

331.34
Ma59
9b

カール・マルクス
賃労働と資本
賃賃・価格および利潤

マルクス・レーニン主義研究所訳

改造選書



* 0020385000 *

0020385-000

331.34-Ma59-9bウ

賃労働と資本

カール・マルクス・著

改造社

昭和23

ADB



1.34
33*4
Ma 59
96



マルクス・レーニン主義叢書

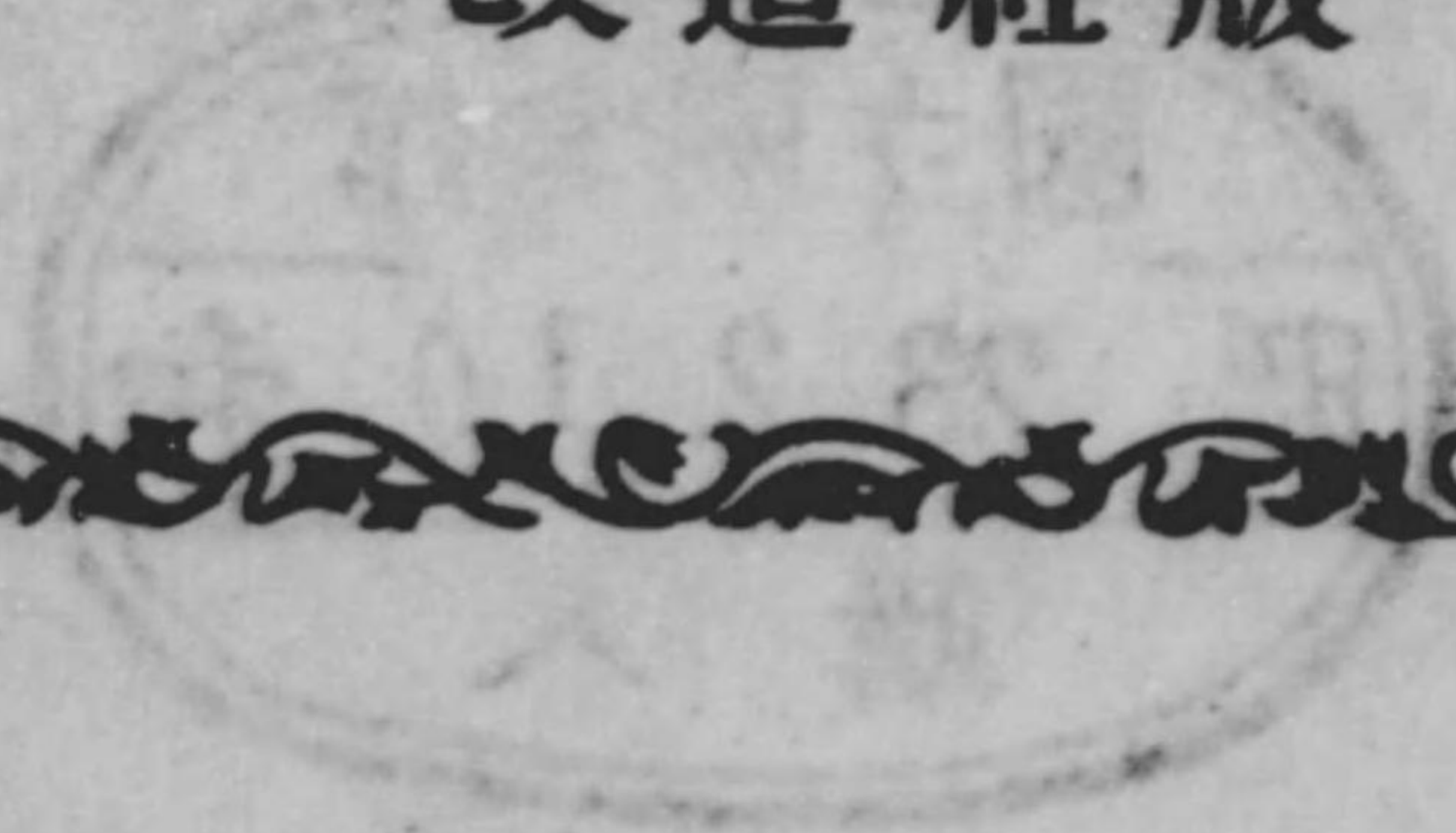
賃労働と資本
賃労働価格および利潤

マルクス・レーニン主義研究所訳

改造選書

23

改造社版



マルクス・レーニン主義叢書

の刊行に際して

われわれは、全人口の九十五パーセントを占める働らく人民の利益を最も忠實にまもるものである。われわれが他の諸政黨と異なる基本的特徴の一つは、今日日本の新たな建設と発展とに眞に正しい指針を與えうる唯一の理論である。マルクス・レーニン主義の理論によつて、武装されているというのである。すなわち、われわれは、すでに二十五年に亘つて、マルクス・レーニン主義の理論を研究し、それに従つて行動し、それを人民大衆に理解せしめるために努力してきたのである。

そのために、マルクス・レーニン主義にたいする人民大衆の關心は著るしく増大したのであり、このことは、終戦後今日に至るまでわれわれの力が、多くの困難があつたにもかかわらず、急速に發展した事實に現われている。しかも、それにも拘らず、現在もなほ、わが國におけるマルクス・レーニン主義の理論的水準は一般に低く、人民大衆のそれにあつた理解は、きわめて不十分である。これは、日本の新たな建設にとつて非常に大きな障碍となる。それゆえわれわれはここに、『マルクス・レーニン主義叢書』を刊行して、マルクス・レーニン主義の理解把握のために、必ず讀まねばならぬ主要な諸古典の最も正確な、わかりやすい日本語を提供し、人民大衆のマルクス・レーニン主義にかんする研究と理解とを促進する一助としたのである。

マルクス・レーニン主義の理論は、われわれに、周圍の諸事件の内的關係を理解し、事



件の進行を豫見し、現在事件が如何にまた如何なる方向に發展しつつあるかということだけではなく、將來それが如何なる方向に發展せざるをえないかということをも知ることを、可能ならしめる。マルクス・レーニン主義の理論を把握した者は、確信をもつて前進し、新しい日本の建設と發展とを行うことができるのである。

しかし、マルクス・レーニン主義の理論を把握するということは、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの諸著作に散在する個々の結論と命題とを熱心に暗記し、必要なときにそれを引用するものだと考えたり、あるいは、それがあらゆる情勢と場合とにあてはまるものだとか考へることではない。マルクス・レーニン主義の理論は、社會の發展に關する・労働運動に關する・民主主義および社會主義革命に關する・共産主義社會の建設に關する・科學である。従つて科學として、それは、決して同一の場所に止まらないし、また止まりえない。それは絶えず發展しより完全になる。それは、その發展の過程において、新しい經驗と知識とをもつて絶えずその内容を豊富にするのである。

マルクス・レーニン主義の理論を把握するということは、古典の字句に拘泥することではなく、この理論の本質を體得し、わが國の歴史的具體的な諸條件の下における實踐的な諸問題の解決にあつてこの理論を活用することを學ぶことである。マルクス・レーニン主義の理論は、獨斷論ではなく、行動への手引である。

わたくしはこの叢書の讀者がこのことを銘記されることを切望する。
一九四七年九月

マルクス・レーニン主義研究所長 野 坂 參 三

譯 者 例 言

一、『賃労働と資本』は Karl Marx: Lohnarbeit und Kapital (マルクス・エンゲルス・レーニン研究所、一九三四年版) を底本とし、カウツキー版、ジョインズの英譯版等を参照して譯出されたものである。

二、『勞賃、價格および利潤』は Value, Price and Profit (National Executive Committee, Socialist Labour Party, 1919. New-York) を底本とし、エレメンタル・ビュツヒャー版(一九二三年エレメンタル・ビュツヒャー)およびマルクス・エンゲルス・レーニン研究所版(一九三四年)を参照しつつ譯出されたものである。

三、原文で斜體文字になつてゐるところは、この譯書では傍點が附してある。行の改め方、傍點のうち方は、すべて研究所版に従つた。「編輯者」と附記してあるのは、研究所の編輯者を意味する。「」の中にある句は、編輯者と明記してある場合の外、すべて譯者の補註である。

四、本書の譯出には、宮川實があたつた。

一九四七年八月十五日

マルクス・レーニン主義研究所

目次

叢書刊行の辭
譯者例言

賃労働と資本

序	文	マルクス・エンゲルス・レーニン研究所	九
エンゲルスの序文	……	……	一七
緒言	……	……	三
賃労働は何であるか？ それは如何にして決定されるか？	……	……	三
商品の價格は何によつて決定されるか？	……	……	四

労賃、価格および利潤

ドイツ版への序文 マルクス・エンゲルス・レーニン研究所……………八五

前置き……………九一

一、生産と労賃……………九三

二、生産、労賃、利潤……………九六

三、労賃と貨幣……………一二一

四、供給と需要……………一二八

五、労賃と価格……………一三二

六、価値と労働……………一三六

七、労働力……………一四一

八、剰餘価値の生産……………一四六

九、労働の価値……………一五〇

十、利潤は商品をその価値において賣ることによつて得られる……………一五二

十一、剰餘価値が分解する種々なる部分……………一五四

十二、利潤、労賃および価格の一般的關係……………一五九

十三、労賃の値上げが企てられまたは労賃の引上げに對して抗争される主要な場合……………一六三

十四、資本と労働との闘争およびその諸結果……………一七三

附 録

一、インターナショナル労働者同盟の決議……………一八七

二、マルクスの手稿「労賃」……………一九一

あとがき……………二二五

賃労働と資本

序文

いまや「一九三三年にこの序文は書かれた」、「賃労働と資本」が、マルクスによつて指導された最初の共産主義的日刊新聞たる『新ライン新聞』の欄に現われてから、すでに八十四年になる。しかもなお資本制搾取に關するこの立派な・やさしい・叙述は、ちつとも時代後れになつていない。それは、その時以後、數多くの版で、また數多くの國語で、大衆向パンフレットとして、労働者たちの間に流布された。そして、將來も資本制搾取が存続するかぎりには、それは、マルクス主義の宣傳の主要な道具としてその意義を失わないであらう。

マルクスは、この著述において『ブルジョアジーの存在とその階級支配との基礎をなし、かつ労働者たちの奴隷状態の基礎をなす、経済的諸關係の』叙述を與えている。労賃とは何であるか？ それは如何にして決定されるか？ 資本によつて搾取されているどの労働者にも關係のあるか？ 這個問題から出發して、彼は、價值法則を簡潔に説明し、剩餘價値の起源をあげき出し、そして、殲滅的な論戰において、労働者と資本家との利害は一致するといふ、資本家と・その政治的ならびに『學問的』

代理者たちとの説を、徹底的に説破している。そしてその際マルクスは、労賃の運動法則、労賃の利潤にたいする關係、資本制的分業と資本制的に使用された機械との作用、産業豫備軍（大衆失業）の發生、プロレタリアートの累進的窮乏化、最後に、週期的恐慌と資本主義の崩壊との不可避性について、概略的に述べている。

マルクスが彼の經濟學的諸發見を最も廣い労働者大衆の前に説明したこの著作の『導きの糸』は、ブルジョア、プロレタリアートの階級利害は宥和しない、ということである。ドイツの社會民主黨は、マルクス主義の旗を泥土に踏みじり、マルクス主義の學說を偽造し、資本と労働との間の宥和を説教してきた。それは、一方では、プロレタリア革命に反対する。そしてサウエト聯邦における社會主義の建設に反対する。極めて激しい闘争を行いながら、他方労働者たちの前では、資本が増大し繁榮するのはプロレタリアートの利益になる、資本が増大し繁榮すれば、資本主義はおのずから社會主義に『成長してゆく』だろう、という嘘をついた。しかも社會民主黨は、單に階級宥和を説教したばかりではなく、あらゆる可能な手段をもつてそれを實現しようとし、試みさえした——すなわち、戦債の承認や、労働協定や、調停制度や、ストライキの絞殺から、十一月革命の鎮壓や、聯立内閣への参加や、『より小なる害悪』の理論や、『寛容政策』や、ファシスト獨裁に對する大衆闘争のサボタージュ

ユと絞殺から、ファシズムの陣營への公然の移行、すなわち、労働組合の引渡しと、労働者の屠殺者たるヒットラーに對する一九三三年五月十七日の帝國議會における賛否投票に至るまでの、あらゆる可能な手段をもつて。歴史そのものは、これに對して、明白な反駁すべからざる解答を與えた。ブルジョアとプロレタリアとの間の階級對立は減少しなかつた。それどころか、階級對立が今日ほど尖鋭化したことは嘗てなかつたのである。

社會民主主義がなしえなかつたことを、すなわちプロレタリアートの階級闘争を抑壓することを、いまやファシズムが試みている。數千の革命的労働者たちを自分の徒黨によつて鎮壓させ、數萬の革命的労働者たちを監獄や集團拘禁所で食糧攻めにしたり拷問したりさせながら、ヒットラーもまた資本と労働との宥和を説教し、自分を『正直な仲買人』（ヒスマルクが自分を批判した言葉）だと觸れ込み、『ドイツ人労働の解放』、計畫經濟、その他の『社會主義的』な『改造』を約束している。そして實際には彼は、ストライキを禁止し、労働組合を破壊し、それを、社會ファシスト的な労働組合幹部の膳立てに従つて、また彼等の援助によつて、階級闘争の抑壓のためのファシスト的機關たらしめようと試みている。しかし、ドイツにおけるファシズムの政權獲得以來のわずかの數ヶ月がすでに、すなわち、ドイツのプロレタリアートとその英雄的な共産黨との闘争および非合法活動の、このわづ

かの數ヶ月がすでに、この試みは、社會民主主義の試みよりもなお遙かにより急速に失敗するに違いない。ということをも、明かにした。今日のドイツ（一九三〇年代のドイツ）については、マルクスが『賃労働と資本』のなかで一八四八—四九年のドイツについていつたところの命題、すなわち、あらゆる社會改造は、プロレタリア革命と反革命（それは當時には封建的な反革命であつたが、今日ではブルジョア的・ファシスト的な反革命である）とが『武器をもつて勝敗を決する』（本譯書三四頁）までは單なる空想にとどまるという命題が、ふたたび當てはまる。

『賃労働と資本』は労働者のための講義から成立つてゐる。この著作は、單に科學的研究者としてだけでなく、また理論を、やさしく説明するひととしての、マルクスを示している。ブルジョア的な教授たちや、マルクス主義の社會民主主義的な偽造者および裏切者たちは、マルクスの『理解しがたいこと』彼の『故意に曖昧でひねくれた』表現様式を、飽くことなく非難する。これこそは、マルクスの理論にたいする特に卑怯な一闘争方法に外ならない。『賃労働と資本』は、この話がいかにも偽りであるかということをおよび、ヴィルヘルム・リープクネヒトがマルクスの追憶のなかで、マルクスは『理論を、やさしく説明する優れた能力』を具えていたと書いてゐるのが正しいことを、證明する。リープクネヒトは書いてゐる、『たれも彼れ以上に、科學の俗流化、すなわちその變造、淺薄化および

無氣力化を憎んだものはないが、またたれも彼れ以上に、自分の意見を明瞭に言わ表はす能力を有つていたものはない』と。

リープクネヒトは、一八五〇—五一年に、共產主義的なロンドン労働者教育協會でマルクスの試みた經濟學に關する講義に出席した、そしてマルクスの教え方を次のように描寫してゐる。

『マルクスは方法的に講義を進めた。彼は一つの命題を、できるだけ簡潔に立て、それからそれをより長い詳論で説明した。そしてその際彼は、労働者にとつて理解しがたい一切の表現を避けようと、非常に注意して努力した。そのあとで彼は、質問することを聴講者に促した。質問する者がないと、彼は試験をはじめた。そしてその試験を彼は教育學的巧妙さをもつて行つたので、彼の講義にはなんらの遺漏もなく、またなんら誤解されることもなかつた。この巧妙さについて私が驚いたことを話したとき、私は、マルクスはすでにブリュッセル労働者協會で經濟學の講義をしたことがある、ということをお聞きされた。いずれにせよ、彼は秀れた教師たる素質をもつていた』（ヴィルヘルム・リープクネヒト、『カール・マルクスの思ひ出。略傳および追憶』ニユルンベルヒ、一八九六年三八頁。）

『賃労働と資本』は、一八四七年十一月にブリュッセル・ドイツ人労働者協會で行われたこの講義から成立つてゐる。それが書き下ろされたのはすでに一八四八年二月であつたが、その印刷は——マルクスが『經濟學批判』（一八五九年）の序言で述べてゐるように——二月革命によつて妨げられた。

一八四九年四月になつてようやく、マルクスは、この著作を『新ライン新聞』で公けにした。一八四九年の論文の續きの原稿は、なるほど、エンゲルスが序文で書いているように、発見されなかつたが、しかし、たしかに一八四七年の講義の一基礎であり、その内容が『賃労働と資本』と一部分一致しており一部分關聯している。賃賃に關する手稿が発見された。われわれは、その最も重要な二節を、この版の附録にとり入れた（この譯書では卷末の附録のうちに採録してある）。第六節は、賃賃制度のブルジョアの改良案、すなわち賃賃制度のもたらす荒廢化的諸結果のブルジョアの『救済』案たる、貯蓄銀行や工業教育や産兒制限や交換銀行や利益参加を取扱つてゐる。われわれはここにすでに、けちな詐欺的な策略——それをもつて今日、社會民主主義者やファッシストたちが、プロレタリアートの獨裁と資本家の收奪とをめざす労働者たちの闘争を妨げようと試み、労働者たちを胡麻化して、毛皮を濡らさないで洗濯し、生産手段の資本家的私有を存続させながらその諸結果をなくすることができるとのように見せかけようとする、かの詐欺的的策略——の立派な批判を見出す。ついで第七節において、マルクスは、労働組合の役割を取扱い、労働組合は賃賃のための闘争にのみ止まつてはならず『舊來の全社會の顛覆のために』闘争せねばならぬことを、明かにしている。彼がここで人の心に刻みこんでいる、『ブルジョアにたいする戦費』としての労働組合の釀金に關する言葉は、『労働組合は、

社會主義のための學校である』^{*} という有名な解答と同じように、革命的労働組合運動の理論家としてのマルクスを示している。

^{*}『フォルクスシユタート』、一八六九年、第十七號。一八六九年九月三十日ハイファでなされたカアル・マルクスとの會見に關する、ドイツの労働組合の役員たるハマンの報告による。

自分の階級の解放理論であるマルクス主義を身につけようとする労働者は、すべて、共產黨宣言と『空想から科學への社會主義の發展』の外に、レーニンおよびスターリンの通俗的な諸著作の外に、『賃労働と資本』を読んで、根本的に研究せねばならぬ。彼はここに、經濟學上の諸々の難問題の巧妙なやさしい説明を見出すのであつて、この説明においては、叙述の明瞭さが内容の深さおよび豊かさとは結びつけられている。『賃労働と資本』は、一八六五年のマルクスの有名な講演、『賃賃、價格および利潤』とともに、彼の主著たる『資本論』の研究のための、もつともよい準備書である。しかも『賃労働と資本』は、『資本論』と同じように、單に資本主義の本質とその崩解の理解への手引きをなすばかりでなく、過渡期と社會主義の建設に關する經濟的諸問題の理解への手引きをもなす。たとえば資本は『社會的生產關係』あるいは『ブルジョアの生產關係』であるという有名な説明を思い出されたい。それは、資本を廢棄することは不可能であるという、および、サウエト聯邦における諸經營は資本主

義的性格をもつという、社会民主主義者およびファシストたちのあらゆる嘘の足場を奪うものである。——資本の放棄とは、機械の放棄、大規模産業の放棄を意味するのではなくて、賃労働という社会関係の・生産手段の資本家的私有の 放棄を意味するのである。……

第一次五ヶ年計画の尨大な諸成果は、レーニンおよびスターリンによつて繼續されかつ現代に適用されたマルクスの経済學説の正しさの、より廣大な確證である。第二次五ヶ年計画がサウエトの労働者たちの課題たらしめている、『経済における・および人々の意識における・資本主義の殘滓』を除去するための闘争においても、『賃労働と資本』は、依然として一の價値多い宣傳用の武器である。

この版の出版はカアル・シュミットによつて準備された。

一九三三年六月十八日

マルクス・エンゲルス・レーニン研究所

序

次の労作は、連載論説として一八四九年四月四日以後の『新ライン新聞』にあらわれたものである。その臺本となつたのは、マルクスが一八四七年ブリュッセルのドイツ人労働者協會において行つた講義である。印刷の上では、それは斷片のままになつてゐた。第二六九號の終りにある『以下つづく』は、當時のあわたましい諸事件^(一)、すなわち、ロシア軍のハンガリー侵入や、ドレスデン、イーゼルローン、エルベルフェルド、パラチナーラおよびバーデンの暴動——それらは一八四九年五月十九日にこの新聞自體の禁止をもたらずにいたつた——の結果、ついに實現されなかつた。この續きの原稿はマルクスの遺稿中に發見されなかつた。

(一)エンゲルスは、一八八四年にチューリヒの「ゾチアルデモクラート」に掲載された『マルクスと「新ライン新聞」という論文の中で、當時の状態を次のような言葉で描寫している。『ドレスデンおよびエルベルフェルトの暴動は鎮壓され、イーゼルローンの暴動は包圍され、ライン州およびウエストフアールレンは、プロシヤのラインランドの壓服を終つた後にパラチナーラおよびバーデンに進軍する筈だつた銃剣によつて、充満した。そこで、遂に政府は敢てわれわれに肉迫した。』(「ゾチアルデモクラート」、チューリヒ、一八八

四年三月、第十一號および第十三號。エンゲルス『カール・マルクスと「新ライオン新聞」』一八四八—四九年この新聞は禁止された。——編輯者。

『賃労働と資本』はパンフレット型の單行本としてすでに數版あらわれている。最後のものは、一八八四年ホツチンゲンリチューリツヒのスイス印刷協同組合版である。^(一)これら從來の諸版本は、正確に原本の言葉通りであつた。しかしこの新版は一萬冊以上も宣傳用パンフレットとして頒布される豫定である。そこで私には、かういふ事情のもとでは、マルクス自身も原文をそのまま重版することに同意するかどうか、といふ疑問が起らざるをえなかつた。

(一)ドイツにおける『社會主義黨憲法』時代には、社會民主黨は、非合法政黨として、その黨文獻を外國(スイス)で印刷し、そしてそれを非合法な方法でドイツに密輸入せざるをえなかつた。——編輯者。

四十年代には、マルクスはまだ彼の經濟學批判を完成していなかつた。それはやつと五十年代の終りに完成された。それゆゑ、『經濟學批判』第一分冊(一八五九年)以前にあらはれた彼の諸著述は、個々の點において一八五九年以後の諸著述と異なつており、後の諸著述の立場からすれば曖昧であり且つ誤りでさえもあると思われるような表現や全命題を含んでいる。ところで、一般讀者を目當てとする普通の版においては、著者の精神的發展のうちに含まれているかか前見地もまた少しも差

支えないということ、著者も公衆も共にこういう昔の著述をそのまま重刷することを要求すべき争うの餘地なき權利を有するということは、自明である。そして私は、そのうちの一語でも變えようなどとは、夢想だにしなかつたであらう。

新版がほとんど専ら労働者たちの間の宣傳用に當てられる場合には、事情は全く異なる。その場合には、マルクスは無條件的に、一八四九年日附の古い叙述を彼の新しい立場と調和させたであらう。そして私は、凡ゆる本質的な點でこの目的を達成するに必要な若干の變更や追加を私がこの版のために企てるのは、マルクスの精神において行動するのだと確信している。従つて、私はあらかじめ讀者に言つておく、これは、マルクスが一八四八年に書き下ろしたパンフレットではなくて、ほぼ彼が一八九一年に書いたであらうパンフレットである、と。且つその上に、本當の原文は極めて多くの部數が流布しているので、私がそれを後の全集版で再び不變のまま重版しうるまでは、それで充分事足るであらう。

私の變更はすべて一點をめぐる。原本によると、労働者は賃金と引換えに資本家に彼の労働を賣ることになつてゐるが、本書では、彼の労働力を賣るとなつてゐる。そしてこの變更のゆゑに、私は報告の義務をもつ。一つには労働者への報告として、——それは、これによつて、こゝに横わるものは

決して單なる字義拘泥ではなく、寧ろ恐らくは全經濟學の最も重要な點の一つであることを、彼等に理解せしめんがためである。二つにはブルジョアへの報告として、——それは、これによつて、最もむつかしい經濟學的説明をもたやすく理解しうる無教養な労働者は、かゝる面倒な問題を一生涯かゝつても解きえないわが傲慢な『教養階級』に較べて、どんなにひどく卓越しているかを、彼等に悟らしめんがためである。

古典派經濟學は、工場主は彼の労働者たちの労働を買いそれに對して支拂つてゐるのだというよう
な、工場主たちのありふれた考えを、産業上の實踐から受け入れた。かゝる考えは、工場主たちの商
慣習や、簿記や、原價計算のためには、まつたく充分だつた。ところが、素朴にそれが經濟學のうち
に移し入れられると、それはここでまつたく驚くべき誤謬と混亂とを惹き起した。

(1) マルクスは『資本論』第一卷「第一章註三二」で書いてゐる。『私が古典派經濟學といふのは、俗流經濟
學とは反對に、ブルジョアの生産關係の內的關聯を研究するW・ペティ(一六二三—一六八七年)以來のす
べての經濟學である』と。イギリスにおける古典派經濟學の最後の偉大な代表者はリカードであつた。
——編輯者。

經濟學は、あらゆる商品の價格——その中には經濟學で『労働』と名づけられてゐる商品の價格も
また含む——は絶えず變動するという事實を、すなわち、あらゆる商品の價格は、往々にして商品その

ものの生産とはまつたく無關係な極めてさまざまの事情によつて騰落し、その結果、價格は通常、純
粹な偶然によつて規定されるように見えるという事實を見出した。そこで經濟學が科學として現われ
るや否や、その最初の課題の一つは、この外見上商品價格を支配してゐるように見える偶然の背後にか
くれて、本當はこの偶然そのものを支配してゐるところの、法則を探究することであつた。絶えず或
は上へ或は下へと動揺し振動する商品價格の内部において、經濟學は、この動揺と振動とがその周囲
を巡つて行われるところの、確固たる中心點を探し求めた。一言で云えば、經濟學は商品價格から出
發して、それを規制する法則としての商品價值を——「それから凡ゆる價格の變動が説明され」*。それ
に諸々の價格變動が結局はすべて引き戻されるべき・商品價值を——探し求めたのである。

(1) 『狹義の經濟學は、十七世紀の終頃に天才的な人々によつて生み出されたとはいへ、フイジオクラト和
よびアダム・スミスによつて行われたその積極的定式化においては、本質的に十八世紀の兒である。』(F・
エンゲルス『反デューリング論』——編輯者。

*カウツキー版、英語版、ロシア語版(一九三三年)には、この括弧内の句がある。

そこで古典派經濟學は、一商品の價值は、その中に含まれてゐる・すなわちその生産のために必要
な・労働によつて規定されるということ、發見した。この説明をもつて古典經濟學は満足した。そ
してわれわれもまた、しばらくは此處に立ちどまることが出来る。ただ誤解を防ぐために、私は、

今日ではこの説明はまったく不十分になつてしまつたと言つておきたい。マルクスは、はじめ、労働の価値形成的性質を根本的に検討し、これによつて、一商品の生産のために外見上また實際上必要なあらゆる労働は、必ずしもその商品に、あらゆる場合において、消費された労働量に一致する価値量を与えるわけではないということを、発見した。それゆゑ、今日われわれが簡単に、リカアドのような経済学者たちと共に、一商品の価値はその生産に必要な労働によつて規定されるというにしても、われわれは、その際いつも、マルクスによつてなされた留保を前提とするのである。ここではこれだけで充分だ。詳しいことは、マルクスの『経済学批判』(一八五九年)ならびに『資本論』第一卷にある。^(一)

(一)この問題の平易な説明を、マルクスみずから一八六五年に、彼の講演『賃賃、価格および利潤』で與えた——編輯者。

しかし経済学者たちが、労働によるこの価値規定を『労働』という商品に適用するや否や、彼等は、一の矛盾から他の矛盾に陥つた。『労働』の価値は如何にして規定されるか？ そのうちに含まれている必要労働によつて。しからば、ある労働者の一日、一週、一ヶ月、一ケ年に亘る労働のうちには、どれだけの労働が含まれているか？ 一日、一週、一ヶ月、一ケ年分の労働である。もし労働があらゆる

る価値の尺度であるとするれば、われわれは『労働の価値』をもまさに労働でのみ表現しうる筈である。だがもしわれわれが、一時間の労働の価値は一時間の労働に等しいということだけしか知らないならばわれわれは、労働の価値について絶対に何も知らぬのである。それではわれわれは、髪の毛一筋も目標に近ずいたのではない。われわれは相變らず一つ所をぐる／＼廻りしているのである。

それゆゑ古典派経済学は、別の仕方の問題を解決しようとして試みた、すなわち云つた、一商品の価値はその生産費に等しい、と。だが労働の生産費とは何であるか？ この問題に答うるためには、経済学者たちは、論理にいささか暴力を加えざるをえなかつた。労働をそのものの生産費——それは遺憾ながら確めるわけにゆかない——の代わりに、彼等はいまや、労働者の生産費は何であるかを究明する。そしてそれは確めることができる。それは時と事情とに應じてそれぞれ異なるが、一定の社會状態、一定の地方、一定の生産部門にとつては、それはやはり一定しており、少なくとも可なり狭い限界内にある。われわれは今日、資本制生産の支配下に住んでいるが、そこでは、人口の大部分を占め且つ益々増大しつつある階級は、生産手段——道具、機械、原料——および生活資料の所有者のために賃賃と引換えに労働することによつてのみ、生活することができる。この生産様式の基礎の上では労働者の生産費は、彼に労働する能力を與え、その労働能力を維持し、彼が老齡や、病氣や、死によ

つて退去するに際しては、新たな労働者によつてこれを補充し、かくして労働者階級を必要な強度で繁殖せしめるために、平均的に必要である生活資料の總量——またはその貨幣價格——から成る。われわれは、この生活資料の貨幣價格が平均一日三マルクだと假定しよう。

するとわれわれの労働者は、彼を備つてゐる資本家から日々三マルクの勞賃を受けとる。資本家は、その代りに彼を、例えば毎日十二時間働かせる。そしてこの資本家は恐らく次のように計算するのであろう。

かりにわれわれの労働者——機械仕上工——は、或る機械の一部を作り、それを一日で仕上げるものとしよう。原料——必要な豫備的形態にある鐵や眞鍮——は、二〇マルクする。蒸汽機關の石炭消費と、この蒸汽機關そのものの磨損と、旋盤その他この労働者がその労働に際して使用する道具の磨損とは、一日分および彼れへの割當について計算すれば、一マルクの價值に相當する。一日分の勞賃は、われわれの假定に従えば、三マルクである。これらを合計すれば、この機械部分は二十四マルクである。しかし資本家は、それと引換えに彼の顧客から平均して二十七マルクの價格を、すなわち彼れの投下した費用を三マルクだけ超過する價格を、受けとりうるように計算する。

資本家が懐にするこの三マルクは何處から出てくるか？ 古典派經濟學の主張に従えば、諸商品

は、平均においては、その價值で、すなわちこれらの商品に含まれている必要勞働量に一致する價格で、賣られる。して見れば、上掲の機械部分の平均價格——二十七マルク——は、その價值に等しく、それに含まれている勞働に等しいのであらう。しかし、この二十七マルクのうち二十一マルクは、機械仕上工がその仕事を始める前に、すでに存在した價值である。二十マルクは原料に、また一マルクは、作業中に燃焼された石炭や、作業に際して使用されてその作業能力をこの額の價值だけ減少させた機械や道具やに、含まれていた。残るところの六マルクは、原料の價值に附加されたものである。ところで、この六マルクは、經濟學者たち自身の假定に従えば、ただわれわれの労働者が原料に附加した勞働からのみ生じうる。従つて、彼の十二時間分の勞働は、六マルクの新價值を生み出したのである。だから、彼の十二時間分の勞働の價值は、六マルクに等しいであらう。そしてわれわれはかうにして遂に『勞働の價值』とは何であるかを、發見したものと云えよう。

『一寸待つて！』とわれわれの機械仕上工は叫ぶ『六マルクと？ しかし俺はたつた三マルク貰つたぎりだ！ 俺の資本家は、俺の十二時間分の勞働の價值はたゞの三マルクだけだと、嚴かに誓つていう、そして俺が六マルクを要求すると、彼は俺を一笑に附するばかりだ。どうしたらその辻褄が合うのだらう？』と。

われわれはさきに労働の価値について、堂々めぐりに陥つたと思つたが、今度はいよいよ本當に解決するべからざる矛盾に陥つたのだ。われわれは労働の価値を探求した。そしてわれわれは今その必要とするよりも、より多くのものを見出した。労働者にとつては十二時間分の労働の価値は三マルクであり、資本家にとつては六マルクである、そのうち資本家は三マルクを賃として労働者に支拂い、三マルクを自らそのポケットに収める。それゆえ、労働は一個の価値でなく、二個の価値を、しかも甚だしく異なる価値を有つことになる！

この矛盾は、われわれが貨幣で表現された価値を労働時間に還元すると、もつと甚しくなる。十二時間分の労働で六マルクの新価値が生み出された。そこで六時間で三マルクだが、これは労働者が十二時間分の労働と引換えに受けとる総額である。十二時間分の労働と引換えに労働者は、等しい對價として、六時間分の労働の生産物を受けとる。だから労働は二つの価値を持ち、そのうち一方は他方の二倍の大きさであるか、そうでなければ十二は六に等しいか、のいずれかである！ いずれの場合にもまつたこの矛盾が現われる。

いくらぐるぐる廻つても、労働の賣買と労働の価値とについて語るかぎり、われわれは、この矛盾から免れるわけにはゆかない。そして經濟學者たちにとつてもまたそうであつた。古典派經濟學の最

後の分派たるリカアド學派は、大部分、解決不可能なこの矛盾に跌いて倒れた。古典派經濟學は一つの袋小路へ走り込んだ。此の袋小路からの出道を見出した人は、カアル・マルクスであつた。

經濟學者たちが『労働』の生産費だと思つたところのものは、労働の生産費ではなくて、生きた労働者自身の生産費であつた。そしてこの労働者が資本家に賣るものは、彼の労働ではなかつた。『彼れの労働が現實に始まるや否や』とマルクスはいう、『彼の労働はすでに、労働者に所屬することをやめる、だからもはや、彼によつて賣られるわけにゆかない』と。それゆえ、彼はたか／＼彼れの將來の労働を賣ることができるだけだ、すなはち一定時間に一定の労働給付を行うという義務を負うことができるだけだ。しかし、こうすることにより、彼は、労働（それはやつとこれから始まらねばならぬものだ）を賣るのではなく、彼は一定の時間にわたり（時間拂賃の場合）もしくは一定の労働給付の目的のために（出來高拂賃の場合）、彼れの労働力を、一定の支拂と引換えに、資本家の自由處分にまかすのだ、つまり彼の労働力を賃貸または販賣するのである。だが、この労働力は、彼の人格と癒着しており、それから離すことはできない。従つて労働力の生産費は、彼の生産費と一致する。經濟學者たちが労働の生産費と名ずけるものは、正に労働者の生産費であり、従つてまた労働力の生産費である。かようにして、われわれはまた、労働力の生産費から労働力の価値にたち歸り、そして、マル

クスが労働力の賣買に關する節において、『資本論』第一卷、第四章、第三節）したように、一定の質の労働力の生産のために必要な社會的必要労働の分量を規定することができるのである。

さて、労働者が資本家に彼の労働力を賣つた後に、すなわち、豫め約束された勞賃——時間拂勞賃または出來高拂勞賃——と引換えに彼の労働力の自由處分を資本家に委ねた後に、何が起るか？ 資本家は労働者を彼の作業場もしくは工場へ連れて行くが、そこにはすでに労働に必要なすべての對象物、すなわち原料や、補助材料（石炭、染料等々）や道具や、機械やが存在する。ここで労働者は、汗水流して働きはじめる。彼の日給は上述の通りに三マルクだしよう。——彼がそれを時間拂勞賃でえるか出來高拂勞賃でえるかは、この場合少しも問題でない。われわれはここでもまたも通り労働者は十二時間のうちに、消耗された原料に對して、彼の労働によつて六マルクの新價値を附加し、この新價値を資本家は完成品の販賣によつて實現するものと、假定しよう。彼はそのうちから労働者に三マルクを支拂うが、残りの三マルクは、自分で着服する。ところで、労働者は、十二時間に六マルクの價値を生み出すならば、六時間には三マルクの價値を生み出す。それゆえ、彼は、資本家のために六時間働きたれば、勞賃として受とつた三マルクの對價を、資本家に對してすでに償つていたのである。六時間の労働が終れば、双方とも債務履行済みで、どちらも相手方に一文の借りもないのだ。

『一寸待つて！』と今度は資本家が叫ぶ。『俺は労働者を、まる一日間、十二時間、雇つたのだ。しかるに、六時間はホンの半日に過ぎない。だから文句言わずに、残りの六時間が終るまで續いて働け——そうしたら始めてわれわれは勘定すみになるのだ！』と。そして労働者は、實際、彼が『自由意思で』取り結んだ契約に従わねばならぬのであつて、その契約の結果、彼は、六時間の労働が費されている労働生産物と引換えに、まる十二時間働くべき義務を負うのである。

出來高拂勞賃においても、事情はまつたく同じである。われわれの労働者は十二時間に十二個の商品を作るものと、假定しよう。その各々は、原料と磨損とに二マルクを要し、そして二マルク半で賣られる。そこで資本家は、その他の諸前題が以前と同じであるとすれば、労働者に一個あたり二五ベニヒを與えるであろう。すなわち十二個で三マルクになり、それだけ儲けるのに労働者は十二時間を必要とする。資本家は十二個に對し三〇マルクを受けとる、原料と磨損との二四マルクを差し引くと六マルク残るが、そのうちから彼は、三マルクの勞賃を支拂い、残りの三マルクを懐にする。まつたく前と同じである。この場合にもまた、労働者は六時間を自分のために、すなわち彼の勞賃の代償のために（十二時間の各時間のうち半時間づつ）、六時間を資本家のために、働くのである。

最も立派な經濟學者たちでさえも、彼等が『労働』の價值から出發したかぎり、當面して失敗したところの困難は、われわれが労働の價值の代わりに労働力の價值から出發するや否や、消滅する。労働力は、今日の資本制社會では商品であり、すべての他の商品と同じように商品である。だがしかしまつたく特別な商品である。すなわち労働力は、價值の源泉となるという・しかもこれを適當に取扱えば、それ自身の有するよりもヨリ大なる價值の源泉となるという・特別な性質たる價值創造力をもつている。今日の生産の状態の下では、人間の労働力は、一日のうちに、單にそれ自身が有し且つそれ自身に費される價值よりも大なる價值を生産するだけではない。あらゆる新たな科學的發見とともに、あらゆる新たな技術的發見とともに、労働力の一日分の費用以上に出る・労働力の一日分の生産物のこういう剰餘は、次第に増大し、従つて、労働日のうち労働者が彼れの日給の代償を稼ぎ出す部分は短縮し、従つてまた労働日のうち、労働者が資本家にたいし、その代償を支拂われることなく、自分の労働を贈呈しなければならぬ部分は、延長する。

そしてこれが今日のわれわれの全社會の經濟的制度である。ひとり労働階級のみがあらゆる價值を生産するのである。けだし價值は、労働を表わす別種の表現、すなわち一定商品のうちに含まれていゝる社會的必要労働の分量を今日の資本制社會において言い表わす表現にすぎないからである。しかし

労働者によつて生産されたこの價值は、労働者には屬さない。それは、原料や、機械や、道具や、その所有者に労働者階級の労働力を買うことを可能ならしめる前拂手段やの、所有者に屬する。だから労働者階級は、彼等によつて生産された全生産物量のうち、ホンの一部分だけを取り返えずにすぎない。そして、われわれがすでに見たように、資本家階級が自ら着服するところの・そして精々地主階級と更にそれを分配するだけでよいところの・生産物の他の部分は、あらゆる新らしい發明や發見とともにますます大きくなり、他方、労働者階級に歸屬する部分は（頭割りで計算すると）たゞ極めて徐々に且つ目だたない程度に増大するだけであるか、あるいは少しも増加しないかであり、場合によつては低落することさえありうるのである。

だが、このますます急激に相次いで行われつつある發明や發見、この未曾有の程度で日々に高まつてゆく人間労働の生産性は、結局、今日の資本制社會がそのために没落せざるをえなくなるところの一の葛藤を作り出す。一方には、測り知れない巨額の富と、その取得者が使用し得ない諸生産物の過剰とが、生じる。他方には、社會の大衆がプロレタリア化し、賃労働者に轉化し、正にそれゆゑにかの過剰生産物を手に入れることができなくなる。少數の甚だしく富裕な階級と、大多數の無所有な賃労働者階級とに、社會が分裂した結果、この社會は、それ自身の過剰の生産物のうちに窒息しながら

ら、他方、その成員の大多數は、ほとんどあるいは決して、極端な缺乏から保護されていないのである。この状態は日に増しますます不合理なものとなり、そしてますます無用なものとなつてくる。それは廢除されなければならない。一の新たな社會秩序、すなわち、そこでは今日の階級差別が消失しており、またそこでは——恐らく或る短い・いくらか不足勝ちの・しかし道徳的には甚だ有益な・過渡期の後に——社會のすべての成員の既存の老大な生産諸力の計画的な利用と發達により、平等な労働義務の下で、生活するための・生活を享樂するための・すべての肉體のおよび精神的能力を發達させ活動させるための・諸手段をば、平等に且つますます豊富に、與えるところの、一の新たな社會秩序が可能である。そして、労働者たちがますますこの新たな社會秩序を戦いどるべく決意していること、このことについての證據は、大洋の兩岸において、明五月一日と五月三日の日曜日とが、これを與えるであろう。

一八九一年四月三十日

ロンドンにて

フリードリヒ・エンゲルス

賃労働と資本

われわれは、今日の階級闘争と國民闘争との物質的基礎を成している經濟的諸關係についてこれまで何も述べなかつたことを、諸方面から非難されている。「今日の階級闘争と國民闘争とは、その物質的基礎を成す經濟的諸關係から説明されるべきであると主張しながら、經濟的關係そのものの説明を十分にしていな」といふ非難を受けている、との意味」。われわれは計画的に「一定の考から故意に」經濟的諸關係が政治的衝突の中に直接に現われている場合にかぎり、これに觸れたのであつた。

「これまで」何よりも先づ最も必要であつたことは、眼前の歴史において階級闘争を追究し、そして現存する・且つ日々に新たに造られている・歴史上の材料によつて、次の事柄を——すなわち、二月革命および三月革命^(二)を行つた労働者階級が壓服されると共に、労働者階級の相手（フランスにおけるブルジョア共和主義者、全ヨーロッパ大陸において封建的專制政治と戦つた市民階級および農民階級）

もまた、同時に征服されたということ、フランスにおける『尊敬すべき共和制』の勝利は、同時に、かの英雄的な獨立戦争を以て二月革命に應えた諸國民の没落であるということ、最後に、ヨーロッパは、革命的労働者たちの敗北とともに、その舊時の二重奴隷状態に、すなわちイギリス的ロシヤ的の奴隷状態に、逆轉したということ——經驗的に證明するにあつた。パリにおける七月闘争、ヴィーンの陥落、一八四八年十一月におけるベルリンの悲喜劇、ポーランド、イタリアおよびハンガリーの絶望的努力、アイルランドの兵糧攻め——これらがヨーロッパにおけるブルジョア階級と労働者階級との間の階級闘争の總括された主要な諸契機であり、われわれはこれらによつて、次のことを證明したのである。——すなわちあらゆる革命的叛亂は、たゞその目的が階級闘争からまだ遠くに離れているように見えても、革命的労働者階級が勝利をうるに至るまでは、必ず失敗に終るといふこと、また、プロレタリア革命と封建的反革命とが、一の世界戦争において武器を以て勝敗を決するに至るまでは、あらゆる社會改良は一のユートピアたるに止まるということを證明したのである。われわれの叙述においては、現實においてそうであるように、ベルギーとスイスとは、——一方はブルジョア的な君主制の模範國であり、他方はブルジョア的な共和制の模範國であるこれらの兩國は、ともにヨーロッパの革命にも階級闘争にも無關係であると自惚れているのであるが、——大歴史畫における

る悲喜劇的漫畫的の浮世繪であつた。

(一)パリにおける一八四八年二月二十三日および二十四日の、ウインにおける三月十三日の、およびベルリンにおける三月十八日の、諸革命を意味する。これらの革命に關する、およびその後の出來事に關する、詳細は『一八四八年乃至一八五〇年のフランスにおける階級闘争』ルキ・ボナバルトのブルユメール十八日』および『ドイツにおける革命および反革命』を見よ。——編輯者。

*一八四八年におけるフランスのブルジョア共和制のことであつて、プロレタリアートが、その獲得のために関つた『社會共和制』に對していう。一八四八年六月におけるパリ労働者の敗北は、『尊敬すべき共和制』の決定的勝利を意味した。

しかるにいまや、讀者諸君は一八四八年における階級闘争が、どれくらい政治的諸形態で發展したのを目撃したのであるから、いまや、經濟的諸關係そのものをば——ブルジョア階級の存立とその階級支配との基礎をなし、かつ、労働者の奴隷状態の基礎をなす、經濟的諸關係そのものをば——より立ち入つて討究すべき時期は、正に到達しているのである。

われわれは「この問題をば」三つの大きな部分に分つて叙述するであらう。一、賃労働の資本に對する關係、労働者の奴隷状態、資本家の支配。二、今日の制度の下では中間市民層およびいわゆる農民層の没落が不可避であること。三、世界市場の專制的支配者たるイギリスによつてヨーロッパ諸國のブルジョア階級が商業的に隷屬させられ且つ絞り取られていること。

(一八九一年の版では Bürgerstandes (市民身分の) となつてゐる。「新ライン新聞」によつて訂正した——
編輯者。

われわれはできうるかぎり簡単に且つ通俗的に叙述することを努め、経済學の最も初歩的な諸概念でさえも前提しないであろう。われわれは労働者に解かつて貰いたく思う。なおドイツにおいては、看板をかけた現状辯論者から、下つては社會主義的な空想論者および認められぬ政治的天才に至るまで、——分裂したドイツにはこれらの人々が王侯よりも多く存在する。——最も簡単な經濟關係に關してさえ最も著しい無智と概念の混亂とが行はれてゐるのである。
そこで先づ第一の問題に取掛かろう。

勞賃とは何んであるか？

それは如何にして決定されるか？

ひとが労働者たちに「君の勞賃はどれだけか？」と訊ねるならば、或る者は「私は私のブルジョアから一日一マルクを受取つてゐる」と答え、他の者は「私は二マルクを受取つてゐる」などと答えるだろう。彼等は、彼等の屬してゐる労働部門の異なるに従つて「一定の労働時間にたいし、あるいは」一定

の作業の完了にたいして、例えば一エルの麻布を織ること、または一ボーゲン分(十六頁分)の活字を植えることにたいして、彼等各自の資本家から受取るそれだけの金額を擧げるだろう。彼等の擧げる金額の異なるにも拘わらず、ともかく勞賃というものは、一定の労働時間にたいして、または一定の労働給付にたいして、資本家が支拂う金額だといふ一點においては、彼等は總て一致するであろう。
すなわち、資本家は、貨幣をもつて労働者の労働を買い、また労働者は貨幣と引換えに彼等の労働を資本家に賣るように見える。しかしこれはまったく錯覺だ。實際彼等が貨幣と引換えに資本家に賣つてゐるのは、彼等の労働力だ。この労働力をば、資本家は一日分、一週間分、一月分というように買うのだ。そして彼は、それを買つた後は、労働者を約束の時間内労働させることによつて、それを消費するのである。資本家は、労働者の労働力を買つたと同じ貨幣額、例えば二マルクをもつて、二ポンドの砂糖またはその他なんらかの商品の一定量を買うことができたであろう。彼が二ポンドの砂糖を買つた二マルクは、二ポンドの砂糖の價格である。彼が十二時間分の労働力の使用を買つた二マルクは十二時間の労働「力」の價格である。だから労働「力」は、恰も砂糖が商品であるのと全く同じ意味において、一個の商品である。前者は時計で測られ、後者は衡器で測られる。

労働者たちは、彼等の商品たる労働力を、資本家の商品たる貨幣と、交換する、そしてこの交換は

一定の率で行われる。若干の労働「力」の使用に對して若干の貨幣、例えば十二時間分の機織^{はたき}労働「力」に對して二マルクと云うの類だ。ところがこの二マルクは、私が二マルクで購買しうるすべての他の諸商品を代表していないだろうか？ だから實際においては、この労働者は、彼の商品たる労働力をば、すべての種類の商品と、しかも一定の比率で、交換したのである。資本家は彼に二マルクを與えることによつて、彼れの労働日と交換して、若干の肉、若干の衣服、若干の燈火等を與えたのである。だから二マルクは、労働力が他の諸商品と交換される比率、すなわち彼の労働力の交換價值を表わす。一商品の價格とは、その交換價值が貨幣で評價されたものに外ならない。だから勞賃もまた、労働力の價格（それを世人は普通に労働の價格と呼んでいる）に附せられた。すなわち人間の肉と血との外にはその容器をもたぬこの特別な商品の價格に附せられた。特別の名稱に過ぎぬのである。

任意の種類の一の労働者、例えば一人の織物工を取つて見よう。資本家は彼に織機^{はたき}と糸を供給する。織物工は仕事にかかり、糸は織物となる。資本家は織物を自分のものとし、それを例えば二十マルクで賣る。さてこの場合に、織物工の勞賃は、織物の二十マルクの、彼れの労働の生産物の一部分であるだろうか？ 決してそうではない。織物が賣られるよりもすつと前に、恐らくはそれが織

り上げらるるよりもすつと前に、織物工は彼の勞賃を受取つてゐる。だから資本家はこの勞賃をば、織物を賣つてえた貨幣で支拂うのではなくて、豫ねてから持ち合わせていた貨幣で支拂うのである。恰もブルジョアが彼に供給する織機および糸が織物工の生産物でないのと同じように、彼れが自分の商品たる労働力と交換して受取る諸商品もまた、決して彼れの生産物ではない。ブルジョアは彼れの織物の買手を一人も見出しえないこともありうる。またそれを賣つて勞賃だけの額をさえ、得ることができぬこともありうる。或はまた織賃に較べて非常に有利にそれを賣ることもありうる。しかしこれらのことは總て織工には何の關係もない。資本家は、彼れの手持ちの財産——彼れの資本——の一部分をもつて、織物工の労働力を買うのであり、それは彼が彼れの財産の他の一部分を以て、原料たる糸や労働用具たる織機を買つたのと、まったく同じである。これらの仕入れをしてしまつた後では——そしてその仕入れた物のなかには織物の生産に必要な労働力も含まれているのだが——彼はただ彼れのものである原料と労働用具とをもつて生産するだけである。ところで、わが善良な織物工はもちろんやはり労働用具に屬するのだから「その點においては織機と同じなのだから」、彼は、織機と同じように、生産物または生産物の價格の分前を受取るのでは決してない。

だから勞賃は、労働者が生産した商品にたいする、彼れの分前ではない。勞賃は、資本家がそれに

よつて生産的労働力の一定量を買取るところの、既存の商品の一部分である。

だから労働力は、その所有者たる賃労働者が資本家に賣るところの、一商品である。なぜ彼はそれを賣るか？ 生きんがために。

けれども労働力を働かすことすなわち労働は、労働者自身の生命の活動であり、彼れ自身の生命の發現である。そしてこの生命の活動をば、彼は、自ら必要とする生活資料を確保するために、第三者に賣るのである。だから、彼れの生命の活動は、彼にとつては、ただ生存せんがための一手段に過ぎない。生活せんがために、彼は働くのだ。彼は労働をば自分の生活の一部に算入することさえしない、それはむしろ彼の生活の一犠牲である。それは彼が第三者に賣り渡した一つの商品だ。だから彼の活動の生産物もまた、彼の活動の目的ではない。彼が自分自身のために生産するものは、彼が織つていゝる絹布でもなく、彼が鑛山から掘りだす金塊でもなく、彼が建築する宮殿でもない。彼が彼れ自身のために生産するものは、賃賃だ、そして絹布や金塊や宮殿は、彼にとつては、一定量の生活資料に——恐らくは木綿の上衣とか銅貨とか地下室とかいうようなものに——變わるのだ。そして十二時間の間、織つたり、紡いだり、鑿抗したり、轆轤を廻したり、家を建てたり、シャベルを使つたり、石を割つたり、運搬したりなどしてゐる労働者——この労働者にとつては、この十二時間にわたる紡績、機織、

鑿抗、轆轤廻し、建築、シャベル使ひ、石割等が、果して彼の生活の表現だ、生活だといえるだらうか？ その逆である。彼の生活は、これらの仕事が終わつた時、食卓において、居酒屋において、寢床において、はじめて始まる。それと反對に、かの十二時間の労働は、彼にとつては、機織り、紡績、鑿抗等としては何の意味ももたない。それはただ彼をして食卓に向はしめ、居酒屋に席を占めしめ、寢床に身を横えしむるための、備け口としてのみ意味をもつ。もし蠶が幼蟲としての彼の生存を維持するために繭を紡いでいるのなら、蠶は一つの完全な賃労働者であるだろう。労働力は何時でも商品であつたわけではない。労働は何時でも賃労働、すなわち自由労働であつたわけではない。奴隷は彼の労働力を奴隷所有者に賣つたのではない、それは恰も牛が彼の勤勞を百姓に賣らないのと同じことだ。奴隷は、彼れの労働力と一緒に、一纏めにして、彼の所有者に賣られる。彼は、一所有者の手か他の所有者の手に譲渡されうる一つの商品だ。彼れ自身、が一つの商品であつて、その労働力が彼の商品なのではない。農奴はただ彼の労働力の一部のみを賣る「相手に引渡すとゆう意味」。彼は土地の所有者から賃賃を受け取るのではない。却て土地の所有者が彼れから一定の買物を受取るのだ。農奴は土地に屬し、彼は土地の領主にその收穫を納める。これに反し自由労働者は自分自身を賣る、しかも實に切賣りするのだ。彼は八時間、十時間、十二時間、十五時間づつ彼の生命を、今日も明日

も、それも最も高く買う人に、原料、労働用具、および生活資料の所有者に、すなわち資本家に、せり賣りする。労働者はどの所有者にも属しないし、また土地にも属しないが、しかし彼の日々の生命の八時間、十時間、十二時間、十五時間分づつが、これを買うた人に属するのである。労働者は、嫌と思えば何度でも、自分の雇われている資本家の所を去る、そして資本家もまた、自分に都合が好いと思えば何度でも——最早や労働者から何等の利益を引き出しえないか、または豫期した利益を引き出しえないならば、何度でも直ぐに——彼を解雇する。けれども労働者の所得の唯一の源泉は、労働力の賣却にあるのだから、彼は、その生存を見棄てないかぎり「その労働力の」買手の全階級すなわち資本家階級から縁を切るわけに行かぬ。彼は甲または乙という特定の資本家にこそ属していないが、しかし資本家階級に属している。そしてそのために、誰かのところへ自分を賣るといふこと、すなわちこの資本家階級のうちに誰か一人の買手を見出すといふことが、彼の重大な問題となる。

次にわれわれは、資本と賃労働との関係を更に詳しく考究するに先つて、賃賃の決定に關して考慮に入れるべき最も一般的な諸關係を、簡単に述べらるであらう。

賃賃は、すでに述べたように、労働力という特定の商品の價格だ。それゆゑ賃賃は、他の一切の商品の價格を決定する法則と同じ法則によつて、決定される。そこで次ぎの問題が起る。商品の價格

は如何にして決定されるか？

商品の價格は何によつて決定されるか？

それは、買手と賣手との間の競争によつて、需要の供給にたいする・欲求の提供にたいする・關係によつて、定まる。「ところで」商品の價格を決定するこの競争は三面的である。

同じ商品が種々の賣手によつて提供される。同じ品質の商品を最も安く賣るものは、確かに、その他の賣手を競争場裡から驅逐し、最大の販路を確保する。だから賣手は互に販路を、市場を、争う。かれらは何れも賣りたいと思ひ、できるかぎり多く賣りたいと思ひ、できることならその賣手を閉め出して自分だけが賣りたいと思ふ。だから誰もが他の者よりも安く賣る。かくて、賣手たちの間に競争が起り、これによつてかれらの提出した商品の價格は引下げられる。

しかし買手たちの間にもまた競争が起り、この競争の方は提供された商品の價格を高める。

最後に、買手と賣手との間にも競争が起る。一方はできるだけ安く買おうとし、他方はできるだけ高く賣ろうとする。買手と賣手との間のこの競争の結果は、前に述べた二つの側における競争がどう

いう関係にあるかということに、すなわち買手の隊内における競争と賣手の隊内における競争との何れが強いかということに、依存する。産業は相對峙する二大軍隊を戦場に引き入れ、これらの各々は更にそれ自身の隊伍内においてそれ自身の軍勢同士で戦闘を行う。そしてその内輪の喧嘩の一番少ない軍隊が、相手の軍隊を負かすことになる。

かりに、市場に百梱の棉花があつて、同時に千梱の棉花に對する買手があるとしよう。從てこの場合には需要は供給より十倍ほど大きい。だから買手の間における競争は非常に強く、かれらの各々は是非一梱を、もし出来るならば百梱全部を、手に入れようとするだろう。この例は決して勝手な假定ではない。われわれは商業史上で、棉花の凶作の際に、若干の互に聯合した資本家たちが、單に百梱だけでなく、世界における棉花の全供給を買占めようとしたことを、たびたび経験している。さてかような場合には、一人の買手は棉花に對して比較的高い値をつけ、それでもつて他の人々を競争場裡から驅逐しようとする。棉花の賣手は、敵の軍隊が仲間同士で最も烈しく争つてゐるのを見て取り、且つ彼等の所有してゐる棉花の百梱は全部賣れて仕まうことが保證されてゐるので、彼等の敵が互に競争して棉花の値を競り上げてゐる際に、自分たちが互に争い合つて棉花の價格を下落せしめないうように、用心するであろう。そこで俄に賣手の軍隊内には平和が訪れる。かれらは買手に向つて一

人の如くに對立し、泰然と手を拱き、かれらの要求は——最も熱心な買手の附け値そのものにさえ極めて限られた限界があるという場合でないかぎり——殆ど際限のないこととならう。

要するに、一商品の供給がその商品に對する需要よりも少い時には、賣手の間には、たゞ僅かな競争が行われるか、または競争が全くその跡を絶つのである。そしてこの「賣手の間の」競争が減退すれば、それと同じ割合で、買手の間の競争は増大する。その結果は、商品價格の多かれ少なかれ著るしい騰貴だ。

これと反對の結果を伴う反對の場合がより一層頻繁に發生していることは、ひとの熟知するところである。需要に對する供給の著しい超過、賣手の間における捨鉢的な競争、買手の缺乏、馬鹿々々しい價格での商品の投賣り。しかし價格の騰貴とか下落とかいうのは何のことだ？ 高い價格、安い價格といふのは何のことだ？ 一粒の砂も顕微鏡で見れば高く、一個の塔も山と比較すれば低い。また價格は需要と供給の關係によつて決定されるとしたところで、その需要と供給の關係は何によつて決定されるのか？

試みに誰でもよいから然るべき立派な實業家に、この問題を尋ねて見たまえ。彼は一瞬間の躊躇もなしに、第二のアレキサンダ大帝のように、この形而上學の難問を九々の表で解くだろう。彼はわれ

われに向つていうだろう、もし私の賣る商品の生産に一〇〇マルクかゝり、そうして私がこの商品を賣つて——もちろん一年後に——一一〇マルクを得るならば、それは普通の、正直な、控目の利潤だ。しかし私が交換において一二〇マルク、一三〇マルクを得るならば、それは高い利潤だ、そうして私が二〇〇マルクも得るようなことがあつたら、それは異常な、法外な利潤といふべきだろう、と。さてこの場合、この實業家にとつて利潤の尺度として役立つのは何か？ それは彼れの商品の生産費だ。もし彼がその商品と交換して回収する他の諸商品の總量が、その生産により、僅かの費用しか掛からぬものであれば、彼は損をしたのである。「これに反し」彼が彼れの商品と交換して回収する他の諸商品の總量が、その生産により、多くの費用を要するものであれば、彼は得をしたのである。そうして、彼は、彼れの商品の交換價值が、零——生産費——以下であるか以上であるかの度合によつて、利潤の低下または増大を計算するのである。

すでに述べたように、需要と供給との關係が變動するにつれて、或る時は價格の騰貴、或る時は價格の下落、或る時は高き價格、或る時は低き價格が生じる。「ところが」或る商品の價格が供給の不足または需要の不釣合な増加によつて著しく騰貴したならば、必然的に、なんらかの他の商品の價格は比較的に下落している、何故と云うに、一商品の價格は、これと交換して他の商品が得られる割合を

貨幣で現わしたものに過ぎないからである。例えば絹布一エルレの價格が五マルクから六マルクに騰貴したならば、銀（當時は銀本位制が行われていた）の價格は絹との關係において下落したのであり、また同様に、その従來の價格のままであるすべての他の商品の價格も、絹布との關係において、下落したのである。ひとは絹布の同一量をうるために、それと交換してこれらの商品のより多くの分量を提供しなければならぬ。さて一商品の價格騰貴の影響は何うであろうか？ 榮えつゝある事業に向つて、資本がどしどし流れ込む、そして好況を呈している事業の領内への資本のかくの如き移入は、その事業が普通以上の利潤を擧げなくなるまで、或はむしろ、その生産物の價格が過剰生産のために生産費以下に下落するまで、引續いて行われるであろう。

逆の場合。もし商品の價格が、その生産費以下に下落するならば、資本は、この商品の生産から引き上げられるであろう。「そして」もしその部門の事業がすでに時代の要求に適しなくなつており、從て廢れて行かなければならぬといふ場合を除けば、資本のこの退去のために、かゝる商品の生産、すなわちその供給は、需要と適合するに至るまで、從てその價格が再び生産費の高さに騰るまで、或はむしろ——商品の市價は常にその生産費の上か下かにあるものだから——供給が需要以下に減少するまで、從てその價格が再びその生産費以上に騰貴するまで、引續き減少するであろう。

かように資本は、一の事業の領域から他の事業の領域へ、絶えず出入りつたりするものである。そして価格が騰貴すると移入が多すぎるようになり、価格が下落すると移出が多すぎるようになる。われわれは更に他の観点からして、單に供給のみでなく需要もまた、生産費によつて決定されることを、明かにすることが出来る。けれどもそれは、餘りにわれわれの問題から遠ざかることになるだろう。

われわれがすでに説明したように、需要と供給の變動は、商品の価格をばつねに再びその生産費にまで引き戻すものである。なるほど商品の現實の価格は何時でも生産費の上か下かになつてゐるのだが、しかし騰貴と下落とは互に相殺するもので、その結果一定の期間内には、産業の浮沈期を合せて計算すれば、諸商品はその生産費に應じて互に交換され、かくて、その価格はその生産費によつて決定されるのである。

この生産費によつて価格が決定されるということは「普通の」經濟學者たちのいう意味に解してはならぬ。經濟學者たちはいう、商品の平均価格は生産費に等しい、これが法則だ、と。彼等は、騰貴が下落によつて、また下落が騰貴によつて相殺されるころの、無政府的な變動をば、偶然的なものとして見ている。けれどもわれわれは、これと同一の權利を以て——實際また別の經濟學者たちはそう見

ているのだが——變動を法則と見、生産費による決定を偶然的なものとして見ることも出来る。しかもこの變動こそ——それは綿密に觀察すると、最も恐るべき破壊を伴い、そうして地震のようにブルジョア社會をその根柢から揺り動かすものであるが——その経過中に價格を生産費によつて決定するのである。この無秩序の全運動が、その秩序なのだ。この産業的無政府状態の進行中に、この循環運動中に、競争が、謂わば一方の極端を他方の極端によつて相殺するのである。

これを要するに、一商品の価格はその生産費によつて決定されるものだが、それは、この商品の價格が生産費以上に騰貴する期間はそれ以下に下落する期間によつて相殺され、これと逆の場合はまた逆に相殺されるといふ仕方においてある。もちろんこのことは、或る一産業の生産物の個々のものに當てはまるのではなく、たゞその産業部門全體に當てはまるのみだ。従てまた、それは個々の産業家に當てはまるのではなく、たゞ全産業家階級に當てはまるのみだ。

價格が生産費によつて決定されるということは、價格が商品の生産に必要な労働時間によつて決定されるということに等しい。なぜというに、生産費は、第一に、原料と用具の消耗とから、すなわちその生産に一定量の労働日が費されたところの、従て一定量の労働時間を表わしているところの、諸諸の産業生産物から、成り立つており、第二には、その尺度はやはり時間であるところの、直接的な

労働から成り立っているからである。

さて一般に諸商品の価格を規制する同じ一般的法則は、もちろんまた、賃賃すなわち労働「力」の価格をも、規制する。

賃賃は、需要と供給の関係如何により、すなわち、労働力の買手たる資本家と、労働力の賣手たる労働者との間の競争状態如何により、いま騰貴したかと思えば、直ぐにまた下落する。諸商品の価格が一般に變動するのに応じて、賃賃も變動する。けれどもかかる變動のうちにおいて、労働「力」の価格は、その生産費によつて、すなわち、労働力というこの商品を生産するに必要な労働時間によつて決定されるであらう。

しからば労働力（そのもの）の生産費とは何であるか？

*インスティテュート版にはこの句がない。

それは、労働者を労働者として維持するために、また彼を労働者に育てあげるために、必要な費用である。

だから一つの労働が必要とする養成期間が短ければ短いほど、その労働者の生産費は少なく、それに應じて彼の労働力の価格すなわち彼の賃賃は低いわけである。ほとんどまったく見習期間を必要と

しないで、労働者の單なる肉體的存在があれば足りるというような産業部門においては、彼の生産に必要な生産費は、ほとんど單に彼の労働可能な生活を維持するために必要な商品だけに限られる。だから彼の労働「力」の価格は、生活必需品の価格によつて決定されるであらう。

ところがなおもう一つ考慮すべきことがある。工場主が彼の生産費を計算し、これに従つて生産物の価格を計算する場合には、彼は労働用具の消耗をこれに加算する。ある機械が例えば千マルクの費用を要し、そしてその機械が十年間に消耗し盡されるものとすれば、彼は、十年後に廢物となつた機械を新らたな機械と取り換えるために、商品の価格に年々百マルクを加える。それと同じような仕方、簡単な労働力の生産費のなかにも、労働者種屬をして、自から繁殖し、廢物となつた労働者を新らたな労働者によつて置きかえることを可能ならしめるところの、繁殖費が加算されねばならぬ。だから労働者の消耗も、機械の消耗と同じように、加算されるのである。

かくて簡単な労働力の生産費は、總計すると、労働者の生活費および繁殖費となる。この生活費および繁殖費の価格が賃賃を形成する。かくて決定される賃賃は、賃賃の最低限と名づけられる。賃賃のこの最低限は、一般に生産費による商品の価格決定と同じように、一人一人の個人に當てはまるわけではなくて、たゞ種屬（労働者階級全體）に當てはまるだけだ。個々の労働者は、數百萬の労働者は、

必ずしも自ら生活し且つ繁殖しうるに十分なものを受けては居らぬ。けれども全労働者階級の勞賃は、その變動のうちこの最低限に合致する。

さてわれわれはすでに、勞賃ならびにその他の各商品の價格を規制する最も一般的な法則を説明したから、以下われわれは、われわれの問題により詳細に立ち入ることができる。

資本は、新たな原料、新たな労働用具、および新たな生活資料を生産するために使用される場所の、あらゆる種類の原料、労働用具、および生活資料から成立つ。資本のこれらの構成部分のすべては、労働の創造物であり、労働の生産物であり、蓄積された労働である。新たな生産に對して手段として役立つ蓄積された労働が、資本である。

かように經濟學者たちはいう。

黒人の奴隷とは何だ？ 黒色人種に屬する人間だ。經濟學者たちの説明は、この説明くらいの値打である。

黒人は黒人だ。彼は、たゞ一定の諸關係の下で始めて、奴隷となる。紡績機械は絲を紡ぐための機械だ。それは、たゞ一定の諸關係の下で始めて資本となる。これらの關係から切り離したならば、金そのものが貨幣でないのと同じやうに、また砂糖が砂糖の價格でないのと同じやうに、それは決して資

本ではない。

*この傍點はインスティテュート版ではじめて附せられた。

生産において、人間は、單に自然に對して働らきかけるだけでなく、相互に働きかける。彼等は、一定の仕方でも共同に働き彼等の活動を相互に交換し合うことによつてのみ、生産する。生産するためには、彼等は互に一定の諸連絡および諸關係に入り込む、そしてこれらの社會的連絡および關係の内部のみ、自然に對する彼等の働らきかけは行われ、生産は行われる。

生産者が互に入り込むところのこれらの社會的關係、彼等がその下で彼等の活動を交換し生産の總體の仕事に參與するところの諸條件は、もちろん、生産手段の性質の異なるに従つて、相違するであろう。火器という一つの新兵器の發明とともに、必然的に、軍隊の内部的組織は全部變化し、諸個人をして一つの軍隊を形成せしめ一つの軍隊として活動せしめるところの諸關係は變化し、種々なる軍隊相互間の關係もまた變化した。

かくて、諸個人がそのうちで生産するところの社會的諸關係、すなわち社會的生產諸關係は、物質的生產手段の・生産諸力の・變動および發展とともに、變動する。生産諸關係は、その全體において、社會的關係すなわち社會と名づけられるところのものを、しかも一定の・歴史的な・發展階段におけ

る一社會を、すなわち個有な・別個な・性格をもつ一社會を、形成する。古代社會、封建社會、ブルジョア社會は、生産諸關係のかゝる全體であつて、その各々は、同時に、人類の歴史における特定の一發展階段を表わしている。

資本もまた一の社會的生產關係である。それは一のブルジョア的生產關係であり、ブルジョア社會の生産關係である。資本を構成する生活資料、労働用具、原料——は、與えられた社會的諸條件の下で、一定の社會的諸關係のうちで、生産され蓄積されたのではないか？ これらのものは與えられた社會的諸條件の下で、一定の社會的諸關係のうちで、（新たな生産に）使用されるのではないか？ そして正にこの一定の社會的性格こそ、新たな生産に役立つ諸々の生産物を資本たらしめるのではないか？

*この句インステイテュート版には缺けている。

資本は、單に生活資料、労働用具、および原料から成り立つのみではない、單に物質的な諸生産物からのみ成り立つのではない。それは、同じように、諸交換價值から成り立つ、資本を構成するすべての生産物は商品だ。だから資本は、單に物質的生產物の總量であるばかりではなく、諸商品の諸交換價值の、社會的な大きさの、總量である。

われわれが羊毛の代りに棉花を、小麥の代りに米を、汽車の代りに汽船を置き換えても、棉花や米

や汽船—資本の體—が、前に資本の體化されていた羊毛や小麥や汽車と、同じ交換價值、同じ價格を持つていさえすれば、資本は依然として元のまゝである。資本そのものは少しの變化も蒙ることなしに、資本の體は絶えず變化することができる。

しかし、たとえ各々の資本は、諸商品の・すなわち諸交換價值の・總量であるとしても、諸商品の・諸交換價值の・有らゆる總量が、資本だというわけではない。

諸交換價值の有らゆる總量は、一の交換價值である。個々の交換價值はいづれも、諸交換價值の總量である。例えば千マルクの價值のある一軒の家は、千マルクという一交換價值である。一ペニヒの價值のある一枚の紙も、百分の一センチムを百倍したものでやはり諸交換價值の總量である。ところで他の生産物と交換される生産物は、すべて商品である。そしてこれらのものが交換される一定の比率は、それらのものゝ交換價值を形成する、これを貨幣で表わしたものがその價格である。これらの生産物の分量は、それらのものが商品であるという・または一の交換價值を表わしてあるという・または一定の價格をもつてあるという・それらの物の規定には、なんらの影響も與えない。樹は、大きくても小さくても、やはり樹である。鐵を他の生産物と交換する場合に斤をもつてしようと噸をもつてしようと、鐵が商品であり交換價值であるという性格に、何の變化があろうか？ 鐵は、その

分量の大小に應じて、或は大なる或は小なる價值の商品であり、或は高き或は低き價格の商品であるだけのことだ。

それならいかにして諸商品の一總量、諸交換價值の一總量は、資本となるのか？

それが、獨立した社會的力として、すなわち社會の一部分の者の力として、直接の活きた労働力との交換により、それ自らを維持し且つ増殖することによつてだ。労働能力以外には何物ももたない一階級が存在することが、資本の缺くべからざる前提である。

直接の・活きた・労働にたいする、蓄積された・過去の・對象化された・労働の支配が、蓄積された労働を始めて資本たらしめる。

資本の本質は、蓄積された労働が、活きた労働のために、新たな生産の手段として役立つという點にあるのではない。それは、活きた労働が、蓄積された労働のために、その交換價值を維持し且つ増加する手段として役立つという點にあるのである。

資本家と賃労働者との間の交換においては、何が起るか？

労働者は、彼の労働力と交換して生活資料を手に入れる。しかるに資本家は、彼の生活資料と交換して、労働を「労働者の生産的活動を、創造的な力を」手に入れる、この創造的な力によつて労働者は、

單に彼が消費したものを補填するばかりでなく、蓄積された労働にたいして、それが以前に持つていたよりも大きな價值を與えるのだ。労働者は資本家から手元にある生活資料の一部分を受取る。この生活資料は彼にとつて何の役に立つか？ それは直接の消費に役立つ。しかし、私が生活資料を消費するや否や、それは私の手から失われて再び歸つてはこない、——尤もこの生活資料が私の生活を維持している時間を利用して、私が新たな生活資料を生産する場合、言い換えると、消費中に失われる價值の代りに、私の労働によつて新たな價值を生み出す場合は、別であるが。けれども、この貴重な再生産力は、受取つた生活資料との交換において、労働者から去つて資本家の手に渡る。かくて労働者はそれを、彼れ自身の立場から見れば、失うて仕まつたのである。

一例をとらう。一人の借地農業者が、彼の日雇人に、毎日銀貨五グロシエンづつを與えている。後者は、その五グロシエンを得る代りに、終日借地農業者の畑で労働し、かくて彼に十グロシエンの收入を保證する。借地農業者は單に彼が日雇人に渡さねばならぬ五グロシエンを回収するだけではない、彼はそれを二倍にするのだ。だから彼は、彼が日雇人に與えた五グロシエンを、果實を生む・生産的な・仕方で使用し消費したわけだ。彼は五グロシエンで、まさに、二倍の價值を有する土地生産物を生産して五グロシエンを十グロシエンたらしめるところの、日雇人の労働と力とを買入れたのだ。日雇

人は、これに反して、彼が正にその作用を借地農家に譲り渡した彼れの生産力の代りに、五グロシエンを受取るのであるが、彼はそれを生活資料と交換し、そしてその生活資料を、晩かれ早かれ消費してしまふ。だから五グロシエンは二様の仕方消費されるわけだ、すなわち、資本にとっては再生産的に、——というのは、それは十グロシエンをもたらした一の労働力と交換されたから、また労働者にとっては不生産的に、——というのは、それは生活資料と交換されたのだが、その生活資料は永久に消えてしまつてをり、彼はたゞ借地農家と同じ交換を繰り返すことによつてのみ、その価値を再び手に入れることができるのだから。かようなわけで、資本は賃労働を前提し、賃労働は資本を前提する。両者は相互に制約し合う。両者はお互がお互を生み出す。

或る木綿工場の一労働者だが、彼はたゞ綿製品を生産するだけであるか？ いな、彼は資本を生産する。すなわち彼は、彼れの労働を支配しこの労働によつて新たな価値を作り出すことに再び役立つところの、価値を、生産する*。

資本は、それが労働力と交換され、賃労働を生み出すことによつてのみ、増殖されうる。また賃労働者の労働力は、資本を増殖し、労働者を奴隷たらしめる力を強めることによつてのみ、資本と交換されうる。だから資本の増加は、プロレタリアートの、すなわち労働者階級の、増加である。

だから資本家と労働者との利害は同一だ、とブルジョアおよびブルジョアの經濟學者たちは主張する。實際そうだ！ 労働者は、もし資本家が使つてくれなければ、亡びてしまふ。資本は、労働力を搾取しなければ、亡びてしまふ、そして労働力を搾取するためには、資本はそれを買わなければならぬ。生産に向けられる資本すなわち生産的資本が急速に増加すればするほど、従つて産業が繁榮すればするほど、ブルジョアが富めば富むほど、景氣がよくなればなるほど、資本家はますます多くの労働者を使い、ますます高く労働者は賣れる。

だから、労働者のかかりの生活状態のために缺くべからざる條件は、生産的資本ができるだけ速に増加することだ。

しかし生産的資本の増加とは何か？ それは活きた労働にたいする蓄積された労働の力の増大だ。労働者階級にたいするブルジョアの支配の増大だ。賃労働が、自分を支配する他人の富を、自己と敵對的な力を、すなわち資本を、生産したならば、賃労働を雇い入れるための手段、すなわち賃労働者の生活資料は、資本から賃労働に向つて流れ歸る、——たゞし、賃労働が再び資本の一部となり再び加速度をもつて資本を増殖せしむべき槓杆となる、という條件の下で。

資本の利害と労働者の利害とが同一だ、ということは、たゞ、資本と賃労働とは一個同一の關係の二

つ、の側面だ、といふことを意味するにすぎない。一が他を制約するのは、恰も高利貸と放蕩者とが相俟つて立ち行くようなものである。

賃労働者が賃労働者であるかぎり、彼の運命は資本に懸つてゐる。労働者と資本家との利害が共通してゐると、さかんに吹き立てられるのは、この點だ。

資本が増大すれば、賃労働の分量は増加し、賃労働者の數も増加する。一言で云えば、資本の支配はますます多數の人々の上に擴がる。そして最も好都合な場合を假定すれば、生産的資本が増大すれば、労働にたいする需要が増加する。そのため労働「力」の價格、すなわち賃賃は高くなる。

家は大きくても小さくても、それをとり圍む他の家々が一樣に小さければ、住居としてのすべての社會的要求を充たす。けれどもその小さな家の傍に大廈高樓が建てられると、その小さな家は小屋のように見窄らしくなる。そうなるに、その小さな家は、それに住んでゐる者が、なんらの權利をも主張しえない者か、または極めて僅かな權利しか主張しえない者かといふことを、證明することになる。そして文明の進むにつれて、その家がさらにどんなに高くなるうとも、もし隣の大廈高樓が、同じ程度に、または遙に大きな程度に、高くなるならば、比較的に小さなこの家の住人は、彼れの家の中で、つねにますます不快に、ますます不満に、ますます不景氣に感ずるのであらう。

賃賃の著しい騰貴は、生産的資本の急速な増大を前提する。そして生産的資本の急速な増大は、富の、奢侈の、社會的欲求の、および社會的享樂の、同じような急激な増大を喚び起す。だから、たゞ賃賃労働者の享樂は高まつたにしても、それを、彼等には到底及びもつかぬ資本家の享樂の増加と比較すれば、また社會一般の發展の狀態と比較すれば、それが與える社會的満足は、低落したことになる。われわれの欲求および享樂は、社會から發生する、だからわれわれはそれをば社會を標準として測る、われわれはそれをその充足の對象物では測らない。それは社會的の性質をもつから、相對的な性質のものである。

賃賃は、たゞそれと交換されうる諸商品の分量によつてのみ決定される、といふわけのものではない。それは色々な關係を含んでゐる。

労働者たちが彼等の労働力と交換して先づ受取るものは、ある一定額の貨幣である。賃賃はたゞ、この貨幣價格のみによつて決定されるか？

十六世紀には、アメリカで豊富な採掘の容易な鑛山が発見された結果、ヨーロッパで流通する金銀が増加した。従て金銀の價値は、他の諸商品にたいして下落した。「しかるに」労働者は彼等の労働力にたいして、以前と同じだけの分量の銀貨を受取つた。彼等の労働「力」の貨幣價格は依然として同じ

であつたが、それにも拘らず彼等の勞賃は下落した。というのは、彼等は同じ分量の銀と交換して、以前よりも少い分量の他の諸商品を受取ることになつたからである。そしてこれこそ、十六世紀における資本の増殖を、ブルジョアジーの勃興を、促進した諸事情の一つであつた。

もう一つ別の場合をあげよう。一八四七年の冬には、凶作の結果、穀物、肉類、バター、チーズ等の最も缺くべからざる生活資料の価格が著るしく騰貴した。労働者は其の労働力にたいして、以前と同じ額の貨幣を受取つていたものと、假定しよう。彼等の勞賃は下落しなかつたであろうか？ もちろん下落した。彼等は、同じ貨幣と交換して、以前よりも僅かな麵麩、肉類等を受取つたのだ。彼等の勞賃が下落したのは、銀の價值が減少したためではなく、生活資料の價值が増加したからであつた。

最後にまた、労働〔力〕の貨幣價格はもとのまゝであるのに、新たな機械の應用、豊作等々の結果、すべての農産物と工業品の價格が下落したと假定しよう。そうすると、労働者たちは、同一の貨幣をもつて、すべての種類の商品を以前よりも多く買うことができる。だから、彼等の勞賃は騰貴したのであるが、それは正に彼等の勞賃の貨幣價值が變動しなかつたからである。

だから労働〔力〕の貨幣價格、すなわち名目勞賃は、現實勞賃とは、すなわち、勞賃と交換して現實

に與えられる諸商品の總量とは、一致しない。だからわれわれが勞賃の騰貴または下落について語る場合には、われわれは、單に労働の貨幣價格すなわち名目勞賃だけを、眼中に置いてはならぬ。

しかし、名目勞賃、すなわち、労働者が資本家にたいして自分自身を賣り付ける貨幣の總量と、現實勞賃、すなわち、労働者がこの貨幣で買ひうる諸商品の總量とだけで、勞賃に含まれている諸關係が盡きるわけではない。

勞賃は何よりも先づ、資本家の利得、すなわち、利潤にたいする勞賃の關係によつて、決定される——われわれは比例的な相對的な勞賃のことをいつているのである。

現實勞賃は、労働〔力〕の價格を他の諸商品の價格にたいする關係において表わしたものであるが、相對的勞賃は、これと異り、直接の労働によつて新たに生産された價值のうち、直接的労働の獲得する分前を、蓄積労働すなわち資本に歸屬する分前との關係において、表したものである。

われわれがすでに述べたように「上掲三九頁」勞賃は、労働者によつて生産される商品にたいする労働者の分前ではない。勞賃は、資本家がそれをもつて一定量の生産的労働力を買取るところの、既存の商品の一部分である。けれども資本家は、この勞賃を、労働者が生産した生産物を賣る價格のうちから、回収しなければならぬ、なお彼は、それを回収するにあつて、原則として、彼の投下した

生産費以上のある剰餘——すなわち利潤——が残るようにせねばならぬ。労働者によつて生産された商品の販賣価格は、資本家にとつては、三つの部分に分たれる。第一は、彼によつて投下された原料の価格の回収、ならびに、同じく彼によつて投下された道具、機械、およびその他の労働手段の消耗の回収である。第二は、彼によつて投下された労働の回収であり、そして第三は、これらのものを差引いた剰餘、すなわち資本家の利潤である。このうち第一の部分は、以前から存在していた価値を回収するだけのことであるが、労働の回収ならびに資本家の剰餘たる利潤は、まづたく、労働者の労働によつて作り出され、そして原料に加えられた・新・価値からえられる、ということでは明かである。そして此の意味では、われわれは、労働と利潤とを、互に比較するために、労働者の生産物の分前として観察することができるのである。

現實労働は依然としてそのままであつても、或は騰貴しても、相対的労働は、それにも拘わらず下落することがありうる。たとえば、すべての生活資料の価格は三分の二だけ下落したのに、一日の労働は、たゞ三分の一だけ下落して、例えば三マルクから二マルクになつたと假定しよう。そうすると、労働者は、この二マルクをもつて、以前に三マルクをもつてしたよりも、より多量の商品を手に入れることができるけれども、しかも彼の労働は、資本家の利潤にたいする關係においては、却て減少したのである。

たのである。資本家（たとえば工場主）の利潤は、一マルクほど増加した、すなわち、資本家は以前よりも少額の交換価値を労働者に支拂うのに、労働者は、これにたいして、以前よりも多額の交換価値を生産しなければならぬ。資本の分前は、労働の分前に較べて、増加したのである。資本と労働との間の社會的富の分配は、一層不平等になつた。資本家は同じ資本をもつて、一層多量の労働を支配するようになった。資本家階級の労働者階級にたいする力は増大し、労働者の社會的地位は悪くなり、更らに一段と資本家の地位の下に推し下げられたのである。

しからば、労働と利潤との相互關係における騰落を決定する一般的法則は、何であるか？
労働と利潤とは、互に逆比例する。資本の分前たる利潤は、労働の分前たる労働が下落するに伴い、それと同じ比率で騰貴し、逆の場合はまた逆である。利潤は、労働の下落すると同じ割合で騰貴し、労働の騰貴すると同じ割合で下落する。

ひとは恐らく異議を唱えていうであらう、資本家は、彼の生産物を他の資本家たちと有利に交換することによつて、彼の商品にたいする需要の増加——新市場の開發された結果たると、舊市場における需要の一時的増加等々の結果たるを問はず——により、利益をうることができる、だから資本家の利潤は、労働の・すなわち労働力の・交換価値の騰落には關係なく、第三の資本家を瞞着することによ

つて、増加することがありうる、あるいは、資本家の利潤は、労働用具の改良、自然力の新たな應用、等々によつても、増加しうるであろう、と。

われわれは、先づ第一に、たとえそれが逆に起つたとしても、結果は依然として同じだ、ということを確認ねばならぬだろう。なるほど、勞賃が下落したから、それで利潤が騰貴したのではない。けれども利潤が騰貴したから、それで勞賃〔相對的の勞賃〕は下落したのである。資本家は、同量の他人の労働をもつて、以前よりも多量の交換價值を手に入れたが、それだからといつて、労働に對して以前よりも高く支拂いはしなかつた、だから労働は、それが資本家に與える純益に較べると、以前よりも低く支振られることになるのである。

さらにわれわれは、商品價格の變動にも拘わらず、各商品の平均價格は、——それが他の商品と交換される比率は、——その生産費によつて規定される、ということを想い出す。だから、資本家階級の内部における購着は、必然的に相殺される。機械の改良や、生産のための自然力の新たな應用は、一定の労働時間内に、同一分量の労働と資本とをもつて、より多量の生産物を作りだすことを可能ならしめるが、しかし決してより多量の交換價值を作りだすことを可能ならしめはしない。假りに、紡績機械の利用によつて、私が、一時間の内に、その發明前に較べて二倍の絲を、例えば五十ポンドの代

りに百ポンドを、供給しうるようになったとしても、私は、この百ポンドの絲と交換して、以前五十ポンドの絲と交換してえたよりも、より多くの商品を長期に亘つて受取りはしない、というのは、その生産費が半減したからである、言い換えると、私は同じ費用をもつて二倍の生産物を供給しうるようになったからである。

最後に、これを一國について見てもまた全世界について見ても、資本家階級すなわちブルジョアジイは、生産の純益をたとえ彼等自身の間如何なる割合で分配するにしても、この純益の總額は、つねにたゞ、蓄積労働が全體として直接労働によつて増加された増加額に、外ならない。だからこの總額は、労働が資本を増加させるのに比例して、すなわち利潤が勞賃に較べて騰貴するのに比例して、増大するのである。

これを要するに、われわれが資本と勞賃との關係の内部にとどまる場合ですら、資本の利害と勞働の利害とは正反對に對立するものである。

資本の急激な増加は、利潤の急激な増加に等しい。利潤が急激に増加しうるのは、労働〔力〕の價格——相對的勞賃——が同じ様に急激に下落する場合にかぎられる。相對的勞賃は、たとえ現實勞賃が名目勞賃——労働〔力〕の貨幣價格——と同時に騰貴しても、利潤と同じ比率で騰貴しないならば、下

落しうる。たとえば、好景氣の際に、勞賃は五パーセントだけ騰貴するのにも、利潤はそれと異り三十パーセントだけ騰貴するならば、比例的すなわち相對的勞賃は増加したのでなくて、かえつて減少したのである。

だから、労働者の収入は、資本の急激な増大につれて増加するにしても、それと同時に、労働者と資本家とを分つ社會的間隙はますます大きくなり、またそれと同時に、労働にたいする資本の力、資本にたいする労働の依存は、ますます大きくなるのである。

労働者は資本の急激な増加に利害關係をもつ、という意味は、たゞ、労働者が他人の富を急激に増加させればさせるほど、ますます大きなパン屑が彼の手に落ちきたり、ますます多くの労働者が使用され、且つ生み出され、資本に依存する奴隷大衆がますます増加される、ということに外ならない。

これを要するに――

労働者階級にとつて最も都合な状態、すなわち資本のできるかぎり急速な増大でさえも、――たゞそれ如何に労働者の物質的生活を改善するにしても、――到底、ブルジョアの利害すなわち資本家の利害と労働者の利害との間の對立を止揚するものではない。利潤と勞賃とは依然として逆比例の關係にある。

資本が急激に増大すれば、勞賃も騰貴するかも知れないが、しかし資本の利潤の方が不均衡に急速に騰貴する。労働者の物質的狀態は改善されたが、しかしそれは彼等の社會的地位を犠牲にしてである。彼等を資本家から分つところの社會的間隙は擴大されている。

最後に――

賃労働にとつて「最も」都合な條件は、生産的資本のできるかぎりの急速な増大である、ということとは、たゞ次のことを意味するに過ぎない。労働者階級が彼等に敵對的な力を――彼等の上に君臨する他人の富を――急速に増加し増大すればするほど、労働者階級はますます都合な條件の下で、また新たにブルジョアの富の増加のために、資本の力の増大のために、労働することを、かくてブルジョアが自分たちを引摺るための金の鎖を満足してみづから鍛冶することを、許されるということ、これである。

*インステイテュート版には「最も」がない。

生産的資本の増加と勞賃の騰貴とは、ブルジョア經濟學者たちの主張するように、現實に果して不可分離に結びついているものであるか？ われわれは彼等の言葉を信じてはならぬ。資本が肥満すればするほど、資本の奴隷はますますよく肥飼いされる、と彼等がいつても、われわれはそれを信じて

はならぬ。封建諸侯はその従者の華美を誇つたものであるが、ブルジョアジーは、かかる考えを有つにはあまり開化しており、またあまり勘定高い。ブルジョアジーの生存條件は、彼等が勘定高くなることを餘儀なくさせるのである。

それゆえわれわれは、より立ち入つて研究しなければならぬであらう。
生産的資本の増大は、勞賃に如何なる影響を及ぼすか？

ブルジョア社會の生産的資本が全體において増大すれば、一層多面的な勞働の蓄積が生じる。諸資本は、數および規模において増大する。諸資本の増大は、資本家たちの間の競争を増加する。諸資本の規模の増大は、より巨大な武器をもつより強力な勞働者軍を産業の戦場に導くための手段を與ふる。

*一八九一年の版では「諸資本家」となっている。「新ライン新聞」によつて訂正。——編輯者

一人の資本家が他の資本家たちを戰場から驅逐し、その資本を征服しうるのは、たゞ物を安く賣ることによつてである。ところが、自分が破産しないで安く賣りうるためには、彼は安く生産しなければならぬ、すなはち勞働の生産力をできるかぎり高めねばならぬ。しかるに、勞働の生産力は、なかなづく、分業の進歩によつて、また機械のより全面的な採用と不斷の改良とによつて、高められる。

分業を行つてゐる勞働者軍が大きくなればなるほど、機械の採用される規模が巨大となればなるほど、生産費は、比較的にますます減少し、勞働はますます多産的となる。だから資本家たちの間では、分業と機械を増加し、それらを出來るだけ大規模に利用しようとする、全面的な競争が起る。

いま一人の資本家が分業の増進により、新たな機械の應用および改良により、自然力の一層有利な且つ一層大規模な利用によつて、同じ分量の勞働または蓄積勞働をもつて、彼の競争者たちよりも一層多量な諸生産物——諸商品——を生産する手段を見出したものとすれば、たとえば、彼の競争者たちが半エルレの麻布を織り出すと同じ勞働時間のうちに、一エルレの麻布を生産することができるものとすれば、この場合にはこの資本家は、いかなる作戦をとるであらうか？

彼は、半エルレの麻布を従來の市場價格で引續いて販賣することもできるが、しかしそれでは、彼の敵を戰場から驅逐して自分の販路を擴張するための手段にはならない。しかし彼がその生産を擴張したのと同じ割合で、彼のための販路の必要もまた擴張された。彼が喚び起した一層強力な一層高價な生産手段は、なるほど彼が、その商品を安く販賣することを可能ならしめるが、しかし同時にまた、彼が一層多くの商品を販賣することを、彼の商品のために遙により大きな販路を獲得することを、餘儀なくするのである。だからわが資本家は、彼の競争者たちよりも安く、半エルレの麻布を賣ること

になるであろう。

しかし、その資本家は、たとえ彼が一エルレを生産するための費用が、他の資本家たちが半エルレを生産するための費用より多くないにしても、彼は彼の競争者たちが半エルレを賣ると同じように安くは一エルレを賣らないであろう。そうでなければ、彼は、少しも餘分の儲けをしないで、交換によつてたゞ單に生産費を回収するだけであろう。彼が前よりも大きな収入を得ているとしても、それは、彼が前よりも大きな資本を運轉していることから生じるのであつて、彼が自分の資本を他人よりも有利に増殖していることから生じるのではないだろう。それだけではない、もし彼がその商品に、競争者たちよりも、僅か一パーセントだけ安い價格をつけるならば、彼は希望する目的を達するであろう。彼は、競争者たちよりも安く賣ることによつて、彼等を競争場裡から驅逐し、少くとも彼等の販路の一部分をもぎり取ることができるのである。なお最後にわれわれの忘れてならないことは、商品の時價は商品の販賣が産業界の好況時に行われるか不況時に行われるかによつて、絶えず生産費の上にあつたり、下にあつたりするということである。一エルレの麻布の市場價格が、從來普通に行われていた生産費以下または以上となるに従つて、新たな・より生産的な・生産手段を採用した資本家が、その商品を彼の現實の生産費以上に賣りうる割合は、變動するであろう。

しかしわが資本家の特權は、決して永く續くものではない。競争者たる他の資本家たちは、これと同じ機械、これと同じ分業を、これと同じ規模または一層大きい規模で採用する、そしてこの採用は一般に普及し、終に麻布の價格は單にその從來の生産費だけでなく、その新たな生産費よりも下に下落するであろう。

だから、資本家たちは、相互にたいして、新たな生産手段の採用以前の狀態と同じ狀態に置かれることになる、そして、もしも彼等が、この生産手段を以て前と同じ價格で二倍の生産物を供給しうるならば、いまや、彼等は、二倍の生産物をもとの價格以下に供給することを、餘儀なくされるであろう。この新たな生産費の立場で、同じ競技がまた始まる。分業はますます多くなり、機械もますます多くなり、分業と機械との利用される規模もますます大きくなる。そして競争はまた、この結果にたいして同じ反作用を及ぼす。

だからこそ、生産様式、生産手段は、絶えず變革、革命され、分業はより大なる分業を、機械の使用は、機械のより進んだ使用を、大規模な作業はより大規模な作業を、必然的にもたらずのである。これは、ブルジョアの生産を絶えず繰り返してもその軌道から投げ出だすところの、そして資本をば、それがすでに労働の生産諸力を緊張せしめたが故にますますそれを緊張せしめることを強制する

ところの、法則であり、——いささかの休息も恵むことなしに、絶えず「進め！進め！」と耳語するところの法則である。

これは、商況の浮沈の間にあつて商品の価格を必然的にその生産費に一致させるところの法則に外ならない。一資本家が如何に有力な生産手段を戦場にもたらしても、競争は、かかる生産手段を一般化するであろう、そして競争がそれを一般化してしまえば、その瞬間から、彼の資本の生産力が増加したことの唯一の結果は、いまや彼は以前と同一の価格にたいして、以前よりも十倍、二十倍、百倍ほど多くの分量を供給しなければならぬということだ。しかし彼は、賣られる生産物の分量を増加することによつて販賣価格の下落を償うために、恐らく以前より千倍多くを賣らねばならぬであろう、というのは、彼は、單により多く儲けるためだけでなく、その生産費を回収するためにも——すでに述べたように生産手段そのものは次第に高價となる——いまやますます多く賣ることが必要であり、しかもかかる多量の販賣は單に彼にとつて死活問題であるだけでなく、彼の競争者にとつても同じように死活問題となつてゐるからである。そのため、すでに發明された生産手段が多産的であればあるほど、古い競争は、一層甚しい激しさをもつて再開される。従つて、分業と機械の使用は、比較にならぬほど大なる規模において、また新たに行われるであろう。

使用される生産手段の力がどんなであろうとも、競争は、商品の価格を生産費に引戻すことによつて、競争はまた、より安く生産されうようになればなるほど、言い換えると、同一量の労働をもつてより多く生産されううようになればなるほど、それと同じ割合で、ますます安く生産することを、もとの價格でますます多く供給することを、一つの命令的法則たらしめることによつて、絶えずこの力の生む金の果實を資本から奪おうとする。かくて資本家は、彼自身の努力によつては、同一の労働時間内により多くを供給する義務、一言でいえば、彼の資本の増殖のためのますます困難な条件以外には、何物をもえないであらう。だから競争は、その生産費の法則をもつて絶えず資本家を追つかけるのである、また資本家が彼の競争者にたいして鍛冶したあらゆる武器は、ことごとく彼自身にたいする武器として返つてくるのであるが、資本家は、たえず競争をだしぬこうと努力し、新たな・なるほど高價ではあるがしかしより安く生産する・機械と分業とを、休みなく採用して古いものに代え、競争が新しいものを時代後れにするまで待とうとはしないのである。

いまわれわれが、この熱病的な躍起の運動が、全世界市場において同時に起りつゝあるものと考えらるならば、われわれはこれによつて、如何に資本の増大、蓄積、および集中が、その結果として、不
斷の・躁急の・かつたえずその規模を巨大に擴大する・分業や、新たな機械の使用や、古い機械の改

良やをもたらずかを、知ることができらう。

しかし、生産的資本の増大と離すことのできないこれらの事情は、労賃の決定の上に、果して如何なる影響を及ぼすであろうか？

分業が発達すれば、一人の労働者は五人、十人、二十人分の仕事をなしうる。だからそれは、労働者たちの間の競争を五倍、十倍、二十倍に増加させる。労働者は單に、或る者が他の者より労働を安く賣ることによつて競争するだけではない、一人の労働者が五人、十人、二十人分の労働をすることによつて競争する、そして資本によつて採用され且つ絶えず発達せしめられる分業は、労働者を驅つてこの種の競争を行うことを餘儀なくさせる。さらにまた、分業が進むにつれて、それと同じ程度で、労働は簡單化する。労働者の特別の熟練は、價值を失う。労働者は簡單な・單調な・生産力に轉化され、肉體的または精神的な伸縮力を用いる必要が少しもなくなる。彼の労働は誰でもなしうる労働となる。だから競争者たちはあらゆる方面から彼に迫つてくる、そしてわれわれがなお忘れてならないことは、労働がますます簡單に、ますます容易に習得されるようになり、労働をわがものとするに要する生産費が、ますます小さくなるにつれて、——労働の價格も他の諸商品のそれと同じようにその生産費によつて決定されるのだから——労賃はますます下落するということである。

だから、労働が不満足な厭なものになればなるほど、それと同じ程度に、競争は増加し、労賃は下落する。労働者は、或は一層長い時間労働するか、或は同じ時間内に一層多くのものを給付するか、ともかく今までよりは一層多く労働することにより、その労賃の額を維持しようとする。かようなわけで、彼は必要に迫られて、分業の不幸な影響をなお甚しくする。その結果はこうだ。——労働者は、多く働けば働くほど、ますます僅な労賃を受取る、しかもそれは、簡單な理由からで、すなわち、彼は、多く働けば働くほど、ますます彼の共働者たちと競争をするようになり、従てまた彼の共働者たちを彼自身と同じような悪い條件で職を求める競争者たらしめるようになり、従つて結局、自分自身と、労働者階級の一員としての自分自身と競争をすることになるという、簡單な理由からである。

機械は、同一の影響を更に大きな規模で持ちきたす——というのは、機械は、熟練労働者を不熟練労働者によつて、男子を女子によつて、大人を小供によつて、驅逐するからであり、また機械は新しい採用された場合には、手工労働者を大量的に、街上に投げ出し、またそれが完成され改良され、より多産的な機械によつて置き換えられる場合には、前ほどではなくても矢張り労働者を解雇するからである。以上われわれは、資本家たち相互間の産業戦を、大急ぎでスケッチしてみた、この戦闘の勝利は、労働者軍の徴集よりも、その除隊に負うところが多いというのが、この戦争の特徴だ。將軍た

る。資本家は、誰が最も多く産業兵卒を除隊しうるかについて、互に競争しているのだ。

もちろん、経済学者はわれわれに説明して、機械のため餘分となつた労働者は、必ず新しい就業部門を見出すと言つてゐる。

彼等とて、解雇されたこれらの労働者たちが新しい労働部門で仕事をうるということを、敢て直接に主張してゐるのではない。事實はかような嘘にたいして餘り明白だ。彼等の主張するところは、實はたゞ、労働者階級の他の構成部分のためには、例えば、衰微した産業部門にこれから這入ろうとしていた若い世代の労働者たちのためには、新しい雇傭手段が開かれるであろう、というにすぎない。これは、もちろん、落伍した労働者にとつては大變な慰めだ。資本家諸公にとつては、搾取すべき新鮮な肉と血が不足する氣遣はないであらう、死者をして死者を葬らしめよ、だ。このことは、ブルジョアが、労働者たちにたいしてよりも、むしろ自分自身にたいして與える慰藉である。もしも賃労働者の全階級が機械のために全滅されるようなことがあれば、賃労働なくしては資本たる資格を失う資本にとつては、これほど恐ろしいことは無いであらう！

しかしかりに、機械によつて直接にその労働を奪われた人々と、すでにこの仕事の口に期待をもつていた新しい世代の全部とが、みな新たな仕事の口を見出すとしよう。その仕事の口は果してすでに

失われた仕事の口と同じ程度に支拂われると考えられるだろうか？ それはすべての經濟上の法則に反することだ。すでに述べたように、近代の産業は、絶えずより簡単なより低級な仕事をもつて、より複雑な、より高級な仕事に代らしめるのである。

それゆゑ機械によつて一つの産業部門から投出された労働者大衆は、より低い、より悪い支拂を受ける部門以外に、どうして避難所を見出しうるであらうか？

たゞその例外として擧げられているのは、機械そのもの、製造に従事する労働者である。産業でより多くの機械が要求され且つ消耗されると、機械が、従つて機械の製造が、従てまた機械の製造に従事する労働者の雇傭が、必然的に増加せざるをえないのであり、しかもこの部門で使用される労働者は、熟練ある、それどころか教育さえある、労働者である、というのである。

この主張は、以前でも半面の眞理を有するに過ぎなかつたが、一八四〇年以來、まつたくその眞理らしい外觀を失うに至つた。というのは、各種の機械が、木綿工業と同じ程度に、機械そのもの、製造にもますます多く使用されるようになり、機械の製造に従事する労働者は、最高度に精巧な機械に較べればたゞ最高度に不精巧な機械の役目を演じる外なくなつたからである。

けれども工場は、機械のため解雇された一人の男工の代りに、恐らく三人の少年工と一人の女工を

使用するだろう！その男工の以前の賃金は、一人の婦人と三人の子供とを養うに足つた筈ではないか？ 賃金の最低限は、労働者種族を維持し且つ繁殖せしむるに足る筈ではなかつたか？ して見ると、ブルジョアの好んで用うるかような極り文句は、何を証明するのか？ 畢竟するに外ではない、一労働者家族の生計をうるために、今では以前に較べて四倍だけの労働者の生命が消費されることになつた、というだけのことなのだ。

これを要するに、生産的資本が増加すればするほど、分業と機械の使用とはますます擴張される。分業と機械の使用とが擴張されればされるほど、労働者の間の競争はますます擴張され、彼等の賃金はますます収縮する。

且つその上に、労働者階級は、社會のより上層からも補充される。多くの小産業家と金利生活者とが労働者階級に落ち込んでくるが、これらの人々は、労働者と並んで仕事の口を求めて腕を高く差し出す以外には、なんらの策も有しない。かようにして高く差し出して労働を求め腕の林は、ますます繁つてゆくが、腕そのものはますます瘦せて行くのである。

ますます大規模に生産することが、すなわち大産業家であつて小産業家でないことが、勝利の第一条件の一つである戦争に、小産業家が耐ええないということは、もちろん自明の理である。

資本の大きさと數とが増加すればするほど、資本が増大すればするほど、資本の利子はますます下落するということ、従て小金利生活者はもはや利子によつて生活することが出来なくなり、従て彼等は小産業家の列に加わり、かくしてプロレタリアートの候補者の數を増加するに至るということ、すべてこれらのこともまた、立ち入つた説明を要しないであらう。

最後に、資本家たちは、上に述べたような運動に強制されて、既存の巨大な生産手段をますます大規模に利用し、そして、この目的のために信用のすべての發條を動かさねばならなくなるが、それに應じて、産業上の地震が——ここでは商業世界は、その富の・生産物の・そうしてまた生産諸力それ自身の・一部をば、冥府の神に犠牲として供えることにより、始めて自己を保ちうるどころの地震が——一言でいえば恐慌が、ますます増加するのである。かゝる恐慌は、たゞ次の理由のみをもつても、ますます頻繁にますます激烈になるべきである。すなわち、生産物の分量が、従て市場擴張の慾望が増加すればするほど、世界市場は絶えずますます縮少し、開發すべき新市場はますます残り少なくなるのである。というのは、先行恐慌はいづれも、從來まだ征服されていなかつた・または商業によつてたゞ表面的にのみ搾取されていた・市場をば新世界商業に隷屬させてきたからである。——けれども資本は、たゞ労働を食つて生きて行くだけではない。優雅と野蠻とを兼ねた支配者たる資本は、彼れ

の奴隷の死骸を、恐慌によつて没落する全犠牲労働者を墓穴に引きすり込む。これを要するに、資本が急激に増加すれば、労働者たちの間の競争はさらにより急激に増加する。すなわち労働者階級のための雇傭手段たる生活手段は、相対的により急激に減少する。しかしそれに拘わらず、資本の急激な増加は、賃労働にとつて最も好都合な条件である。

労賃、價格および利潤

ドイツ版への序文

この著作『勞賃、價格および利潤』は、カアル・マルクスが一八六五年六月二十日と二十七日とにロンドンにおける第一勞働者インターナショナルの總務委員會で行つた講演である。イギリス人の勞働組合員で第一インターナショナルの成員だつたウエストンは、これよりさき、次のような問題を討議に付することを、總務委員會に提案していた――

『一、勞働者階級の社會的な・および物質的な・状態は、將來一般的に、勞賃の引上げによつて改善されうるか？』

二、勞賃を引上げさせようとする勞働組合の努力は、他の産業部門にたいして有害な影響を及ぼさないか？』*

*一八六五年四月四日の總務委員會會議の議事録による。――編輯者、ウエストンは、

『一、一般的な勞賃の引上げは、勞働者たちにとつて何の役にも立たぬであろうということ。』

二、それらのために、労働組合は有害な作用をするということ^{*}を、主張した。

^{*}一八六五年五月二十日付のフリードドリヒ・エンゲルス宛のカアル・マルクスの手紙。

マルクスが彼の講演『労賃、価格および利潤』——最初の版の英語の表題は『價值、価格および利潤』となつていた——でウエストンにたいして行つた反駁は、非常に確かな効果があつた。そのため總務委員會はこれをパンフレットとして出版したいと思つた。しかしそれは、公刊されなかつた。この講演は、マルクスもエンゲルスも死んだ後はじめて、一八九七年に英語で、また後に——一八九八年に——ドイツ語で、出版された。

マルクスの講演以來すぎ去つた六十八年間に、この講演の現實性は、減少しないでむしろ増加した。資本家の有給書記たちの古い店さらし文句——労働者は賃上げのために闘争すべきではない、というのは、労賃の引上げはそれを相殺するような物價騰貴を強制的に生ぜしめるからである、一國民の勞賃基金は不變の大きさである、ある労働者層が勞賃を多く取りすぎれば、それはそれだけ他の労働者層の勞賃の取前を減少させる、労働組合は政治問題に、資本主義制度にたいする闘争に、關心をもつてはいけない、というような——これらの意識的な嘘は、今日、社會民主主義的およびブルジョア的な經濟學者やジャーナリストたちの共有物である。マルクスのこの著作は、これらの主張の反動的な

背理を粉粹するのである。

イギリス人の労働組合員ウエストンと一幅對をなしたのは、ドイツ人の労働者指導者ラサールであつた。『労賃の鐵則』と労働組合の存在權の否認とは、ラサールの反動的理論における二つの決定的な構成部分であつた。すでに第一次世界大戰以前にだんだんとマルクス主義をラサール主義によつて置き換えていたドイツの社會民主黨は、「三十年代のはじめに」この過程を完了した。自由な労働組合をば、城内の平和の・労働者たちの繋縛の・ストライキ闘争の阻止の・組織に轉化せんとする多年の努力に、社會民主黨は、いまや、その指導する労働組合運動の自發的解消、ヒットラーへの労働組合組織の引渡しをもつて、最後の仕上げをしたのである。

まさにこの時にこそ、ドイツの労働者階級が、經濟闘争の本質を、經濟闘争の政治闘争への移行の本質を、労働組合の現實の課題を認識することが決定的に重要である。パンフレット『労賃、価格および利潤』は、ウエストンの諸見解にたいする反駁をマルクス經濟學說の大綱の解明と巧みに結びつけることによつて、これらの問題を説明している。この書は、經濟學上の複雑な諸問題の平易な明晰な解明の模範であり、理論の科學的性格がそのプロレタリア的な革命的內容と融合統一された敘述の模範である。この書は、マルクス主義の名著『資本論』への最善の手引書である。

このパンフレットのドイツ譯は——附録の労働組合に関する決議のドイツ譯もそうであるが——英語の原文に従つて行われ、それに基いて幾つかの誤がわれわれによつて修正された。最初の六節の見出しは、英語版の編輯者アヴェリングの付したものであり、その他の節の見出しは、カアル・マルクスの付したものである。この版は、カアル・マルクスの『選集』における本文と同じである。このパンフレットの仕上げは、ホルスト・フリーリヒが行つた。

マルクス・エンゲルス・レーニン研究所

勞賃、價格および利潤*

* 一八六五年五月二日と二十日の總務委員會の會議において、ウエストンは特別講演で彼の思いつきを説明し、その講演が討議された。マルクスは、五月二十日付の手紙でエンゲルスに書いている——『今晚はインダーナショナルの臨時會議だ。善良な老シユルーフたる古いオーウイン主義者ウエストン（大工）は、さきに、彼がひき續いて「ビーハイヴ」紙「ビーハイヴ」(蜜蜂の巢)は、一時、第一インダーナショナルの公認機關紙であつて、討議に付せられた諸問題に関する公文書をつづいて發表した。——編輯者』で辯護してゐる次の二つの命題を立てた。

(一) 一般的な勞賃の引上げは労働者たちにとつて何の役にも立たぬであらうということ (二) それらのゆえに労働組合は有害な作用をするということ。

もしこの二つの命題——これを信じてゐるのはわれわれの仲間では彼だけだ——が是認されるなら、われわれは、當地の労働組合に關しても、大陸で蔓延してゐるストライキ病に關しても、漫畫ものである。——ひとびとはもちろん私が反駁することを期待してゐる。だから私は、本來、今晚の私の反駁を仕上げで置くべきであつたが、しかし自分の著書「資本論」——編輯者』を書きつづけることの方がそれよりも重要だと考えたので、私は即席の考でこの反駁を行う外はない。もちろん私は、つぎの二の要點については充分に承知してゐる——(一) 勞賃は諸商品の價值を決定するということ (二) もし資本家たちが、今日四シヨングの代わ

りに五シリングを支拂うならば、彼等は明日は、その諸商品を四シリングの代わりに五シリングで賣るであらうということ（需要の増加によつてそれは可能となる）。さて、これは、極めて月並で、現象の極めて外部的な皮相に拘泥したものにすぎないが、しかしここで論争されるすべての経済的諸問題を、理論的準備のない人たちに説明することは、やさしいことではない。君だつて経済學の課程を一時間に壓縮することはできないだらう。だがわれわれは最善をつくそう。』（マルクス・エンゲルス全集、第三部、第三卷、一八六一年から一八六七年に至るマルクス・エンゲルス往復書簡集、ベルリン、一九三二年、二七二頁。）

マルクスは討議に出席しただけではなかつた。彼は總務委員會の會議でも行つたところの、一つの講演を行つた。マルクス自身もエンゲルスも、この講演を公刊しなかつた。それはエンゲルスの死後ようやく、マルクスの娘エリーナーによつて公刊された。——編輯者。「この講演がなぜ公刊されなかつたかという事情については、マルクスとエンゲルスとの次の往復書簡が参考となるであらう。六月二十四日付のエンゲルス宛のマルクスの手紙——『次の點について君の助言をききたい。僕は、總務委員會で、勞賃の一般的引上げ等がいかに作用するかという、ウエストン君の提出した問題に關する、講演をした。そのうちの第一の部分は、ウエストンのナンセンスにたいする答辯であり、第二の部分は、時宜に適するかぎりでの理論的説明である。ところでひとびとはこれを印刷させたがつてゐる。一方では、それは僕にとつて有益であらう、というのは、彼等はJ・S・ミル、ピースロー教授、ハリスン等々と連絡があるからである。他方では、僕は躊躇してゐる。というのは、(一)「ウエストン君」は論敵としては餘りにバツとしないからであり、(二)この講演は、二つの部分をなす非常に簡潔な、しかし比較的やさしい形式で、僕の著書「資本論」から先取りされた多くの新しいものを含んでおり、他方では、それはまた同時に、必然的にあらゆるものを逸脱せしめざるをえないからである。そういうものを、こんな仕方では先取りすることが果して得策だらうか？ 君は僕よりも靜かに

離れたところから事態を観察するのだから、この點を僕よりもよく判断することができるかと思ふ。』
七月十五日付のマルクス宛のエンゲルスの書簡——「僕は、君がウエストン君と論戦したところで大した名譽になるとは思わないし、また、イギリスの經濟學界への初見参としては、それはきつとまづいだらう。もしそうでないとなれば、君の著書から個々の部分を先き取りするということは、大した損になるとは思わな——かりに君の著書が現實にいま完成するとしたところで——あれは一體どうなつてゐるのかね。」

前 置 き

諸君！

本論にはいる前に、少しばかり前置きを云わせていたゞきたい。

いまや大陸では、ストライキという眞の流行病と、勞賃の引上げを求め一般の叫び聲とが、盛である。この問題は、本大會において取扱われるであらう。インターナショナル同盟の幹部たる諸君は、この重要問題において確固たる立場を持つておるべきである。それだから私は、諸君をひどく退屈な思いをさせるといふ危険を冒しても、この問題に根本的に立入ることが、私の義務だと考えた。

もう一つの前置きを、私は、ウエストン君についていはねばならない。彼は、勞働者階級に最も人

氣のないことを自分で知つてゐる意見を、労働者階級のためだと考えて、諸君に説明したばかりでなく、それを公然と擁護してきた。こういう眞勇の發揮は、われわれの誰もが高く評價しなければならぬものである。私は、飾り氣のない言葉でこの講演をするが、その結論においては、彼のテーゼの根底に横わつてゐる正しい考と思われれるものと、私の考が一致してゐることを、彼が見出すであろうことを期待する。しかし彼の考は、その現在の形では、理論的に誤謬であり、實踐的に危険であると、私は考える。

それでは、當面の問題に移つてゆこう。

一、生産と勞賃

ウエストン君の主張は、實際、二つの前提に基いてゐる。すなわち、第一に、國民的生産物の量はなにか固定したものであり、數學者の謂ゆる不變量であるということ、そして第二に、現實勞賃、すなわち勞賃をもつて買うことのできる使用對象の分量で測定した勞賃の額は、固定した額であり不變量であるということ、これである。

さて、彼の第一の假定は、明かに誤りである。諸君は、年々生産物の價值と分量とは増加しており、國民的労働の生産諸力は増大しており、この増加した生産物の流通のために必要な貨幣額は絶えず變動してゐることを、見出されるであろう。一年の終において、そして互に比較された種々なる年にとつて、眞であることは、一日の各平均日にとつてもまた眞である。國民的生産物の分量または大きさは、たえず變動する。それは決して不變量ではなくて可變量であり、人口の變動を全く度外視しても資本の蓄積と労働の生産諸力がたえず變動するから、それは可變量でなくてはならぬ。もし今日一般的勞賃率の騰貴が生じたとしても、その騰貴は、たゞその終局の効果が何であろうとも、直接的には生産物の分量を變化させないであろうということは、全く正しい。それは、最初には、現在の事態から出發するであろう。しかし、もしも國民的生産物が勞賃の騰貴する前に可變的であつて固定的でなかつたとすれば、それは、勞賃が騰貴した後においてもまた、やはり引きつづいて可變的であり固定的ではないだろう。

しかし、國民的生産物の分量は不變的であつて可變的ではないものと假定しよう。その場合でさえも、ウエストン君が論理的歸結だと考へるものは、やはり根據のない主張にすぎないだろう。いま例えば八といふある一定の數があるものとすれば、この數の絶對的限界は、この數の諸部分がそれらの相對的限界を變へることを、妨げるものではない。利潤は六であり勞賃は二であるとしても、勞賃は

六に騰貴し利潤は二に下落しうるのであつて、そうなつても總額はやはり八である。それだから、生産額が固定しているということは、勞賃額が固定しているということをして、決して證明しないであらう。では、ウエストン君は勞賃額が固定していることをどうして證明するか？ たゞそれを主張することによつて證明する。

しかし、かりに一步をゆづつて彼の主張が正しいと假定してさえ、彼れはそれをたゞ一方にだけ當てはめるが、それは實は兩方に當てはまるであらう。もしも勞賃額が固定的な大きさであるならば、それは引き上げることも引き下げることでもできないであらう。だから、もしも勞賃の一次的引上げを強要する勞働者の行動が愚であるとすれば、勞賃の一次的引下げを強要する資本家の行動もまた、同様に愚であらう。ウエストン君は、一定の事情の下では勞働者が勞賃の引上げを強要しうることを、決して否定しはしないが、勞賃額は自然的に固定しているからその反動がつづいて起らざるをえない、というのである。しかし彼はまた他方において、資本家たちは勞賃の引下げを強行しうるし、實際またそれを絶えず試みていることを、知つてゐる。勞賃額固定の法則に従えば、單に前の場合だけでない後の場合にもまた、やはり反動が起らざるをえないであらう。それだから勞賃引上げの企てであるいは事實上行われた勞賃の引上げに對して反抗する勞働者たちの行動は、正しいであらう。それだから

彼等が勞賃の引上げを強要するのは正しい、というのは、勞賃の引下げに對するあらゆる反動は、勞賃の引上げのための行動だからである。だから、ウエストン君自身の勞賃額固定の法則に従えば、勞働者は、一定の事情の下では、團結して勞賃引上げのために闘争すべきだということになるのである。もしも彼がこの結論を否定するならば、彼は、この結論を生ぜしめる諸前提を放棄しなければならぬ。彼は、勞賃額は不變量だといわないで、むしろ、勞賃額は騰貴しえないしまた騰貴してはならぬといけれども、資本がそれを引下げたく思うときにはいつでも下落しうるしまた下落しなくてはならぬ、といふべきであつた。もしも資本家が諸君を、肉の代わりに馬鈴薯で、小麦の代わりに燕麥で、飼いたいと思ふならば、諸君は、彼の意思を經濟學の法則として受取り、それに従わねばならない。もし或る國では勞賃率が他の國におけるよりも高いならば、例えば合衆國においてはイギリスにおけるよりも高いならば、諸君は、勞賃額におけるこの差異を、アメリカの資本家の意思とイギリスの資本家の意思との差異によつて、説明せねばならぬ。この方法は、確かに單に經濟現象の研究ばかりでなく、すべての他の現象の研究をも、非常に簡單化するであらう。

しかしこの場合でさえも、われわれは質問することができらるであらう、なぜアメリカの資本家の意思はイギリスの資本家の意思と違ふのか、と。そしてこの質問に答えるためには、諸君は意思の領域の外

に出なければならぬ。誰か私に、神はフランスでは一つのことを欲し、イギリスでは他のことを欲するとも知れない。もしも私が彼に神の意思のこの分裂の説明を求めらば、彼は鐵面皮にも、神はフランスでは一つのことを、イギリスでは他の意思を、持ちたく思っている、と私に答えるかも知れない。しかしわがウェストン君は、確かに、一切の理性を否定して論證をするような人では決してない。

資本家の意思は、確かに、できるだけ多くとることである。われわれがしなければならぬことは、彼の意思についてお喋りすることではなくて、彼の力、彼の力の諸々の限界、およびこれらの限界の性格を研究することである。

二、生産、労賃、利潤

ウェストン君がわれわれの前で朗讀された講演は、おそらく簡単な言葉に要約されえたであろう。彼の一切の推論は、次のようなことになる。

——もしも労働者階級が資本家階級を強要して、貨幣労賃の形で四シリングの代りに五シリングを支拂わせるならば、資本家はそれに對して商品の形で五シリングの代わりに四シリングの價值を返すで

あろう。この場合には、労働者階級は、労賃の引上げ以前に彼等が四シリングで買った物に、五シリングを支拂わねばならないであろう。だが何故そうなるのか？ 何故資本家は五シリングと交換してたゞ四シリングの價值だけを與えるのか？ 労賃額が固定しているからだ、という。しかし何故それは四シリングの商品價值に固定しているのか？ 何故三シリングとか、二シリングとか、その他の額に固定していないのか？ もしも労賃額の大きさが、資本家の意思からも労働者の意思からも獨立した、一の經濟法則によつて、固定せしめられているのであれば、ウェストン君は、先づ第一に、この法則を述べてそれを説明すべきであつた。それから更らに彼は、あらゆる所與の時に事實上支拂われる労賃額が、つねに、必然的な労賃額と正確に一致し、それから決して離れない、ということを證明すべきであつた。他方において、もしも労賃額の所與の限界が、資本家の單なる意思に、あるいは彼の貪慾の限界に、依存しているものとすれば、それは恣意的な限界である。それは、何も必然的なものを含んではない。それは、資本家の意思によつて、變更されうるし、從つてまた、資本家の意思に逆つても、變更されうる。

*英語版では「正確」になつてゐるが、ドウンケル版およびインステイテュート版では「事實上」となつてゐる。

ウエストン君は、彼の理論を例證するために、諸君に向つて次のように話した。一つの鉢に一定量のスープが入れてあり、それを一定数の人が飲まなければならない場合には、スプーンの廣さを増してもスープの分量は増しはしないだろう、と。彼には誠にすまないが、この例は私には幾らかばかりで見える。それは私に、メネニウス・アグリツパがかつて用いた比喻を思い出させた。ローマの平民たちがローマの貴族たちに反抗した時に、貴族のアグリツパは、平民たちに向つて、貴族という腹は政治團體の平民という手足を養ふのだ、と話した。しかしアグリツパは、ひとが一人の人間の腹を充すことによつて他の人間の手足を養うということは、證明することができなかつた。ところでウエストン君の方は、労働者たちが食物をとる鉢は國民的労働の全生産物で充されているということ、および、彼等がより多くの食物を取出すことができないのは、鉢が小さいからでも鉢の内容が少ないからでもなくて、たゞ彼等のスプーンが小さいからだということ、忘れていたのである。

どういふ手管によつて、資本家は、五シリングと引換えに四シリングの價値を返すことができるのか？ 彼が賣る商品の價格を引上げることによつてだ。それでは、商品の價格騰貴あるいは——より一般的に云つて——價格變動は、商品の價格そのものは、資本家の單なる意思に依存するのか？ あるいは、反對に、この意思を有效ならしめるためには、一定の事情が必要なのか？ もしそうでない

とすれば、市場價格の騰落すなわちその絶えざる變動は、解くことのできない謎となる。

われわれは、労働の生産諸力にも、使用された資本と労働との分量にも、生産物の價値がそれで表現される貨幣の價値にも、なんらの變動も起らないで、たゞ労働率にだけ變動が起つたものと假定するのだが、この場合に、この労働の騰貴はいかにして諸商品の價格に影響することができるのか？ たゞ、これらの商品の需要と供給との事實上の比率に影響することによつてである。

労働者階級は、全體として見れば、その全所得を生活必需品に費しており、また費さねばならぬ、ということは全く正しい。それだから、労働の一般的騰貴は、生活必需品に對する需要の増加を呼び起し、従つてまた市場價格の騰貴を呼び起すであろう。この生活資料を生産している資本家たちは、彼等の商品の市場價格の騰貴によつて、労働の騰貴を埋合わされるであろう。

しかし、生活必需品を生産しない他の資本家たちはどうであるか？ しかも諸君は、彼等の數が決して少なくないと、信じてよいであろう。もしも諸君が、國民的生産物の三分の二が人口の五分の一——下院の一員は最近それは人口のたゞ七分の一にすぎないと確言している——によつて消費されていることを、よく考えるならば、諸君は、國民的生産物の老大な部分が贅澤品の形で生産されねばならない、あるいは贅澤品と交換されねばならないということ、および、生活必需品の如何に老大な分

量が從僕、馬、猫等に浪費されねばならないかということ——この浪費は、われわれが經驗から知る
ところでは、生活資料の價格が騰貴するにつれて、つねに減少する——を、理解するであろう。

さて、生活必需品を生産しない資本家たちの状態はどうであるか？　いふまでもないことであるが
彼等の利潤率が勞賃の一般的騰貴の結果下落する場合には、彼等は、彼等の商品の價格の騰貴によつ
て、償をうることはできないであろう。というのは、これらの商品に對する需要は増大しないからで
ある。彼等の所得は減少するであろう。そしてこの減少した所得の中から彼等は、價格の騰貴した生
活必需品の同一分量に對して、より多くを支拂わねばならないであろう。しかしただそれだけではな
い。彼等の所得は減少したのだから、彼等はまた贅澤品に對して前よりも少なくしか支出することが
できなくなり、従つて彼等のそれぞれの商品に對する彼等の相互的需要は減少するだろう。そしてこ
の需要減少の結果、彼等の商品の價格は下落するだろう。それゆゑ、これらの産業部門においては、
利潤率は、單に勞賃率の一般的騰貴に單比例して下落するばかりでなく、勞賃の一般的騰貴と、生活
必需品の價格の騰貴と、贅澤品の價格の下落と、に複比例して下落するであろう。

種々なる産業部門に用いられた諸資本の利潤率がこういう風に異つてゐることは、どんな結果をも
たらすか？　なんらかの理由で種々なる生産部門の諸々の平均利潤率に差異が生じた場合に生ずる結

果と、同じである。資本と勞働とは、利益の少ない部門から利益の多い部門に移されるであろう。そ
してこの移轉の過程は、供給が、一方の産業部門では需要の増加に比例して増加し、他方の産業部門
では需要の減少に應じて減少するまで、續くであろう。この變動が完了した後は、種々なる産業諸部
門の一般的利潤率は再び平均化されるであろう。すべての狂いは、本來、種々なる商品の需要と供給
との比率の單なる變動によつて生じたのであるから、その原因がなくなるとともに結果もまたなくな
り、諸價格はそれらの以前の位置と均衡とに復歸するであろう。勞賃騰貴の結果生じる利潤率の下落
は、二、三の産業部門に限られないで、一般的なものとなるであろう。われわれの假定に従えば、勞働
の生産諸力にも生産物の總額にも變化は起らないで、所與の生産物量がただその形を變えるだけだろ
う。生産物量の前よりも大なる部分が、いまや生活必需品の形で存在し、前よりも少ない部分が贅澤
品の形で存在するだけだろう。あるいは同じことであるが、前よりも少ない部分が外國の贅澤品と交
換され、その最初の形で「贅澤品の形で」消費されるであろう。あるいは別の言葉でいえば、國內生産
物の前よりも大なる部分が外國の贅澤品とでなく生活必需品と交換されるであろう。それゆゑ勞賃の
一般的騰貴は、市場價格を一時的に攪亂した後は、諸商品の價格のなんらかの持続的な變化を生ぜ
しめないで、たゞ利潤率の一般的下落を生ぜしめるだけであろう。

もしも、上述の論證において、私は勞賃の全増加分が生活必需品に支出されるものと假定している、
というものがあれば、私はこれに答えて、私はウェストン君の見解にとつて有利な假定をしたのだ、
というであろう。もしも勞賃の増加分が従來勞働者が使用していなかった物に支出されるならば、彼
等の購買力が事實上増加していることは、なんらの證明も要しないであろう。だが、それはたゞ勞賃
騰貴の結果に外ならないのだから、彼等の購買力のこの増加は、資本家の購買力の減少と、正確に一
致しなければならぬ。それゆえ諸商品に對する總需要は増加しないで、この需要の構成諸部分が變動
するであろう。一方の側における需要の増加は、他方の側における需要の減少によつて、相殺される
であろう。こういう風にして、需要の總量は變らないのだから、諸商品の市場價格にはなんらの變動
も生じえないであろう。

*英語版には「餘分の勞賃」Surplus wages となつてゐるが、ドゥンカー版もインステイト版も「勞
賃の増加分」となつてゐる。

それだから、諸君はつぎのような板挟みに陥ることになる。勞賃の増加分は一樣にすべての消費財
に費やされるか——この場合には勞働者階級の側からの需要の増加は、資本家階級の需要の減少によ
つて、相殺されねばならない——あるいは勞賃の増加分は、市場價格の一時的騰貴が起つたもののに

み費やされるか、のいづれかである。この場合には、それに續いて起る若干の産業部門における利潤
率の騰貴と他の諸部門における利潤率の下落とが、資本と勞働との分配の變動を喚び起す、そしてこ
の變動は、供給が、一方の産業諸部門では需要の増加に適應し、他方の産業諸部門では需要の減少に
適應するまでつづくであろう。一方の前提に従えば、商品價格の變動は起らないであろう。他方の前
提に従えば、市場價格の若干の動搖の後、諸商品の交換價值は、以前の位置に低下するであろう。ど
ちらの前提に従つても、勞賃率の一般的騰貴は、結局、利潤率の一般的下落以外のいかなる結果もも
たらさないであろう。

諸君の想像力を刺戟するために、ウェストン君は、イギリスの農業勞働者の勞賃が九シリングから
十八シリングに一般的に騰貴したためにどんな困難が生ずるかを考えてみよ、と諸君に要求した。彼
は叫んだ、生活必需品に對する需要が法外に増大し、その結果物價がおそろしく高くなつたものと、ま
あ考えてみたまえ、と。よろしい、諸君がすべて知つておられるように、アメリカの農業勞働者の平
均勞賃は、イギリス王國の農業勞働者の平均勞賃に較べて、二倍以上高いのであるが、農産物の價格
は、合衆國においてはイギリス王國におけるよりも低いのである。そして合衆國においては、イギリ
スにおけると同一の資本と勞働との間の一般的諸關係が支配しており、また合衆國における年々の生

産物量は、イギリスにおけるよりも遙かに少ないのである。それでは何故われわれの友人「ウェストン君」はこの警鐘をならすのか？ たゞわれわれが事實上當面している問題をそらすために外ならぬ。九シリングから十八シリングへの労賃の突然の騰貴は、一〇〇パーセントの突然の騰貴を意味するであろう。われわれは、イギリスにおける一般的労賃率が突然一〇〇パーセント騰貴しうるかどうかを、議論しているのでは決してない。われわれは、騰貴の大きさを問題にしているのでは決してない、それは各々の実際的な場合に所與の事情に依存し、かつそれに適應しなければならぬ。われわれが研究しなければならぬことは、たゞ、労賃率の一般的騰貴が、たとえ一パーセントだけに限られた場合ですら、いかなる作用を及ぼすか、ということである。

さて、ウェストン君の一〇〇パーセントという空想的な騰貴は別にして、諸君の注意を、大英國で一八四九年から一八五九年までに起つた労賃の事實上の騰貴に向けて戴きたい。

諸君はすべて、一八四八年以來施行された十時間法あるいはより正確に云えば十時間半法を知つておられる。これは、われわれが嘗て経験した最大の經濟的變動の一つであつた。それは、なんらかの地方的な若干の産業でなく、それによつてイギリスが世界市場を支配する指導的産業諸部門における、突然の・かつ強制的な・労賃の引上げであつた。それは異常に不利な事情の下における労賃の引上げ

であつた。ユーア博士、シーニョア教授およびその他のブルジョア階級のすべての經濟上の代辯者たちは、それと共にイギリス産業の吊鐘が鳴るであろうということ、證明した。——しかも、私は敢ていうが、それはウェストン君よりも遙かに有力な根據に基いてであつた。それは單なる労賃の騰貴ではなくて、使用される労働量の減少によつて生ぜしめられ且つそれに基いている労賃の騰貴であることを、彼等は證明した。彼等の主張によると、諸君が資本家から奪おうと欲する第十二番目の一時間は、資本家がそこから彼の利潤をひき出す唯一の時間である。彼等は、資本の蓄積の減少、物價の騰貴、市場の喪失、生産の縮少が起り、その結果労賃が引下げられ、結局不可避免的に破滅がくるぞ、と嚇かした。實際、彼等は、マキシミアン・ロベスピエールの最高價格法もこれに較べれば一些事だ、と聲明した。そして彼等はある意味では正しかつた。それでは、結果は實際上どうであつたか？ 労働日が短縮したにも拘らず工場労働者の貨幣賃は騰貴し、就業工場労働者の數は大いに増加し、彼等の生産物の價格は絶えず減少し、彼等の労働の生産諸力は驚くほど發達し、彼等の商品に對する市場は前代未聞な累進的擴張をきたした。マンチエスターで、私自身、一八六〇年に科學獎勵協會のある會合でニューマンが、自分もユーア博士もシーニョアもその他すべての經濟學の代表者たちも間違つていて、民衆の本能の方が正しかつた、と告白したのを聞いた。私がここで、フランシス・ニュー

マン教授でなしにW・ニューマン[※]氏をあげるのは、彼が、トマス・トウィーク氏の『物價史』の——一七九三年から一八五六年に至る物價の歴史を辿つたあの立派な著述の——協力者および編輯者として經濟學上重要な地位を占めているからである。もしも、勞賃の額は固定しており、生産量は固定しており、勞働の生産力の程度は固定しており、資本家の意志は固定し且つ不變であり、その他なにもかも固定的で窮極的であるという、わがウエストン君の固定的な考が正しいとすれば、シーニョア教授の傷ましい豫言は正しかつたであろう。そしてロバート・オウイン——彼はすでに一八一六年に勞働日の一般的短縮を勞働階級解放のための第一の準備工作として要求し、そしてそれを事實上、一般的偏見をもつともせず、ニューラナークの自分の紡績工場で自力で採用した——は誤まつていたのである。

※最高價格法は、フランス大革命中、一七九三年に發布された。この法律は、商品の最高價格を確定し、そして勞賃を定めた。この最高價格法の最も熱心な味方は、都市と農村との貧民の利害を代表する謂ゆる「狂亂者」であつた。革命的な小ブルジョアのジャコバン黨の指導者たるロベスピエールは、ジャコバン黨が戦術上の考慮から「狂亂者」とプロツクを作つていた一時代に、この法律を實施したのである——インステイテュート版の註

※*マルクスはここでは、トウィークの協力者たる、イギリスの經濟學者W・ニューマーチのことを指しているのだ——ドワンカー版およびインステイテュート版の註

十時間法が採用され、そしてその結果勞賃の騰貴が起つた時期と同じ時期に、大ブリテン（イングランドとスコットランドとウェールズとの總稱）では、ここでは擧げるのが適當ではない色々の理由から、農業勞賃の一般的騰貴が起つた。

私の直接の目的のためには必要のないことだが、諸君を誤らせないために、二三の前置きを云つておこう。

もしある人が二シリングの週勞賃をえてをり、彼の勞賃が四シリングに騰貴するならば、勞賃率は一〇〇パーセントだけ騰貴するだろう。これは、勞賃率の騰貴として言い表わせばすばらしいもののように見えるが、しかし事實上の勞賃額たる毎週四シリングは、やはり哀れな低い飢餓勞賃であるだろう。だから諸君は、誇大に聞える勞賃率の一〇〇パーセント（の騰貴）に眼をうばわれてはならない、諸君はつねに、最初の額はいくらだつたか？ ということを問題にしなければならぬ。

さらに諸君はお分りのことと思うが、十人の者が各々毎週二シリングづつ受取り、五人の者が各々五シリングづつ受取り、さらに五人の者が各々十一シリングづつ受取るものとすれば、その二十人は合せて毎週一〇〇シリングまたは五ポンドを受取るであろう。そこでもしも彼等の週勞賃の總額が二〇パーセントだけ騰貴するならば、五ポンドから六ポンドへの騰貴が生ずるであろう。そして、事實上、

十人の労働者の賃金は不変であり、たゞ五人の労働者の一群の週賃金が五シリングから六シリングに騰貴し、もう一組の五人の労働者の週賃金が五五シリングから七〇シリングに騰貴しただけであつても平均すれば、一般的賃率は二〇パーセントだけ騰貴したといふことができるであろう。労働者たちの半分は、その状態を少しも改善しなかつたであろう、彼等の四分の一は、その状態を眼につかぬ程度に改善したであろう、そしてただ四分の一だけがその状態を事實上改善したであろう、しかし平均を計算すれば、これらの二十人の労働者の賃金の総額は、二〇パーセントだけ騰貴したであろう。そして、彼等を雇用する總資本と、彼等が生産する諸商品の価格と、に關するかぎりでは、彼等のすべてが一樣に賃金の平均的騰貴に與つたのと、全く同じことであろう。農業労働の場合には、標準賃金がイングランドおよびスコットランドの個々の州において非常に異つており、賃金の騰貴の及ぼした影響は極めて不平等であつた。

最後に、この賃金騰貴の起つた期間には、例えばロシア戦争（露土戦争一八五四—五年）の結果課せられた新税や、農業労働者の住宅の廣範圍に亘る破壊などのような、相殺的な諸勢力が可なり強く作用していた。

これだけの前置きをして置いて、私はさきに進み、一八四九年から一八五九年までの間に大ブリテ

ンにおける農業労働者の平均賃率は約四〇・パーセント騰貴した、ということを確認しよう。私は、私の主張を證明するために、充分詳細なこともお話できるのだが、現在の目的のためには、故ジョン・C・モルトン氏が一八六〇年にロンドン技術協會で行つた良心的で批判的な『農業で用いられる諸力』に關する講演を、指摘するだけで充分だと考える。モルトン氏は、スコットランドの十二州とイングランドの三十五州に居住する約百人の農業者から彼が集めたところの、勘定書やその他の信頼すべき文書からその統計を作成しているのである。

わがウェストン君の意見に従えば、そして同時に起つた工場労働者の賃金の騰貴を考慮に入れれば一八四九年から一八五九年に至る諸年には、農業生産物の巨大な価格騰貴が生じた筈である。ところが現實には何が起つたか？ 露土戦争と、それに續いて起つた一八五四年から一八五六年に至る諸年の凶作にも拘らず、イングランドの主要農産物である小麦の平均価格は、一八三八年から一八四八年に至る諸年の一クォーター當り約三ポンドから、一八四九年から一八五九年に至る諸年の一クォーター當り約二ポンド十シリングに、下落した。これは、小麦の価格の十六ポンド以上の下落を意味する。しかもそれと同時に農業労働者の賃金は、平均して四〇パーセント騰貴しているのである。この同じ期間内に、その始と終とを、従つて一八五九年と一八四九年とを、比較すれば、官廳の確認した

被救恤民は、九三萬四千四百十九人から八六萬四百七十人に減少し、その差は七萬三千九百四十九人であつた。なるほどこれは極めて僅かな減少であり、しかもそれに續く諸年に再び消えてしまつたが、しかしそれにも拘らずやはり減少ではある。

穀物條例の廢止の結果、外國の穀物の輸入は、一八四九年から一八五九年に至る期間には、一八三八年から一八四八年に至る期間に較べると、二倍に増加したといふことができよう。しかしそれは何を意味したであらうか？ ウェストン君の立場からすれば、諸君は、外國市場におけるこの突然の、巨大な・継続的な・需要の増加は、その農産物の價格を怖るべき高さに騰貴せしめたに違いない、と豫期するであらう。といふのは需要の増加は、外からきても内からきても、同じ影響を及ぼすからである。ところで現實には何が起つたか？ 凶作の數年を除けば、この全期間中、穀物の價格の破滅的な下落がフランスにおける絶えざる苦情であつた。アメリカ人は絶えず、その過剰生産物を焼くことを餘儀なくされた。そしてロシア人は、もしもわれわれがアークハート氏を信じていることができるならば、合衆國における内亂を煽動した、といふのは、ロシアの農産物の輸出がヤンキーの競争によつてヨーロッパの市場で杜絶せしめられたからである。

ウェストン君の見解は、その抽象的な形態に還元すると、次のようになる。需要のあらゆる増加は

つねに、ある與えられた生産量の基礎の上で生じる。だからそれは、需要される財貨の供給を増加させ、うるものでは決してなく、たゞその貨幣價格を騰貴させるだけである。と。しかし最も普通な觀察によつてもわかることだが、需要の増加は、若干の場合には、諸商品の市場價格を少しも變化させないであらう、そして他の若干の場合には、それは市場價格の一時的な騰貴をよび起すが、この騰貴には供給の増加がつづき、そしてその結果、價格はふたたびその元の水準まで下落し、多くの場合にはその元の水準以下に下落するであらう。需要の増加が勞賃の増加から生じよう、なんらかの他の原因から生じよう、問題の條件にはなんの變りもない。ウェストン君の立場からすれば、この一般的事實の説明も、勞賃の騰貴という例外的な事情の下で生じる現象の説明と同様に、困難であつた。だから彼の見解は、われわれの取扱う問題にはなんらの特別の意味ももたないのである。それはたゞ、需要の増加は供給の増加をよび起すが市場價格の終局決定的な騰貴はよび起さない、といふ法則を説明する場合の、彼の混亂を現わしているにすぎない。

三、勞賃と貨幣

討論の第二日に、わがウェストン君は、彼の舊い主張を新らしい形態で裝うた。彼は云つた、貨幣

勞賃の一般的騰貴が生じた結果、同じ額の勞賃を支拂うためにより多くの貨幣が必要である。通貨の分量は固定しているのだから、いかにして諸君は、この固定した通貨をもつて増加した貨幣勞賃を支拂うことができるのか？と。最初には、困難は、労働者の貨幣勞賃は騰貴するけれども、彼等に歸屬する商品量が固定している、という事實から生じたが、今度は、困難は、諸商品の分量は固定しているにも拘らず貨幣勞賃が騰貴するという事實から生じる。云うまでもないことであるが、もしも諸君が彼の最初の獨斷を否定するならば、彼の第二の苦情もまた消滅するであろう。

しかし私は諸君に、この通貨の問題は、われわれが研究している問題とは絶対に無關係であることを、證明するであろう。

諸君の國では、支拂機構は、ヨーロッパの他のどの國におけるよりも、遙かに完全に出來あがつている。銀行制度の擴張および集中のおかげで、同一の價值額を流通せしめるために、そして同一またはより大なる取引を行うために、必要な通貨の分量は、遙かに少なくてすむ。たとえば、勞賃についていえば、イギリスの工場労働者は、彼の勞賃を毎週小賣商人に支拂い、小賣商人は毎週それを銀行に持つてゆき、銀行は毎週それを工場主に再び返し、工場主はそれを再び彼の労働者に支拂う、等々。この仕組みによつて、一人の労働者の一年分の勞賃、たとえば五二ポンドは、毎週同じ循環を行う一

個のソヴリン金貨（一ポンド金貨）をもつて支拂われうる。イングランドにおいてさえ、支拂機構はスコットランドにおけるほど完全ではない、そしてそれはどこでも同じ程度に完備してゐるわけではない。それだから、例えば若干の農業地方では、純工業地方と較べれば、遙かにより小さい價值量を流通させるために、遙かに多量の通貨が必要とされるのである。

海峡を越えると、諸君は、貨幣勞賃がイングランドにおけるよりも遙かに低いこと、しかしそれは、ドイツ、イタリー、スイスおよびフランスにおいては、遙かに多量の通貨によつて流通せしめられていること、を見出すであらう。同一のソヴリン金貨は、そんなに急速には銀行によつて受取られたり、産業資本家の手に再び返されたりはしないであらう。一年に五二ポンドを流通させるために一個のソヴリン金貨が必要な代わりに、恐らく、二五ポンドの年勞賃を流通させるために三個のソヴリン金貨が必要であらう。もしも諸君がこういう風に大陸諸國をイングランドと比較するならば、諸君は直ちに、低い貨幣勞賃が屢々、高い貨幣勞賃よりも、遙かに多量の通貨を、流通のために必要とする場合がありうるということ、および、これはわれわれの問題にとつては全く無關係な技術的問題にすぎぬということを、理解されるであらう。

私の知つている最もよい計算に従えば、この國の労働者階級の年所得は、二億五千萬ポンドと見積

ることができる。この巨大な額は、約三百萬ポンドの通貨によつて流通せしめられている。いま、五〇パーセントの勞賃の騰貴が起つたものと假定しよう。その場合には、三百萬ポンドではなく、四百五十萬ポンドの通貨が必要となるであろう。労働者の毎日の支出の著るしい部分は、銀貨と銅貨とですなわち金に對するその相對的價値が不換紙幣のそれと同じように法律によつて任意に定められるところの、單なる貨幣章標で、支出されるのだから、貨幣勞賃の五〇%の騰貴は、極端な場合には、たとえば百萬ソヴリンの追加的流通を必要ならしめるであろう。金地金チカネまたは金鑄貨の形でいまイングランド銀行または私立銀行の地下室に横わつてゐる百萬ポンドの金が、追加的に流通するであろう。しかしこの百萬ポンドの追加的鑄造または追加的磨滅から生ずるであろう僅かな出費でさえも、——追加的通貨の不足からなんらかの磨擦が生ずるようなことはあつても、——省かれうるし、事實上省かれるであろう。諸君がすべて知つておられるように、この國の通貨は二つの大きな群に分たれている。その一つの群は、色々な種類の銀行券から成立つており、商人たちの間の取引に用いられ、また消費者と商人との間の大口支拂にも用いられている。そしてもう一つの種類の流通手段すなわち金屬鑄貨は小取引で流通している。この二群の流通手段は、互に全く異なるものではあるが、しかしその流通領域は互に一部分重なり合つてゐる。金鑄貨は、大口支拂においてさえ五ポンド以下の總ての貨幣額の

ために、大なる割合で流通している。明日にも四ポンド券または三ポンド券または二ポンド券が發行されるならば、いまこの流通水路を充している金は、直ちに、そこから追い出され、そして、貨幣勞賃の騰貴のために金が必要とされる流通水路に流入するであろう。こういう風にして、勞賃の五〇パーセントの騰貴によつて必要となる追加的な百萬ポンドの通貨は、たゞ一個のソヴリン金貨をも追加することなしに、調達されるであろう。これと同じ結果は、少し前にランカシャーにおいてさうであつたように、たゞ一枚の銀行券の増發すらなしに、手形流通の増加によつてもえられるであろう。もしも勞賃率の一般的騰貴、たとえばウェストン君が農業労働者の勞賃について假定したような一〇〇パーセントの一般的騰貴が、生活必需品の價格の大きな騰貴をもたらすものとすれば、そして彼の意見通りに得られる筈もない支拂手段の追加額が必要となるものとすれば、勞賃の一般的下落は、同じ規模の、しかし反對の方向の、同じ結果をもたらすに違いない。さて、諸君のすべてが知つておられるように、一八五八年から一八六〇年に至る諸年は綿業にとつて最も好景氣の年であり、殊に一八六〇年は、この點において、商業史上比類なきものであり、そして同じ時には他の産業諸部門もまた大なる好況にあつた。綿業労働者およびこの産業と結びついていた他のすべての労働者の勞賃は、一八六〇年にはそれ以前のいかなる年におけるよりも高かつた。その時アメリカの恐慌が襲來し、すべてのこ

これらの勞賃は、突然、以前の額の約四分の一に低下した。これは、もしも反對の方向であれば、四〇〇パーセントの騰貴を意味したであろう。もしも勞賃が五から二〇に騰貴すれば、われわれは、それが四〇〇パーセントだけ騰貴したという。もしもそれが二〇から五に下落すれば、われわれは、それが七五パーセント下落したという。しかし騰貴した額は、前の場合にも後の場合にも、同じであつて一五シリングであるだろう。そこでこれは、勞賃率における未曾有の突然の變動であり、しかも同時に——もしもわれわれが綿業に直接に従事している労働者ばかりでなく間接に綿業に依存している労働者をもすべて算入するならば——農業労働者の數の一倍半の労働者におよんだのである。それでは小麥の價格は下落したか？ それは、一八五八—一八六〇年の三年間の年平均一クォーター當り四七シリング八ペンスから、一八六一—一八六三年の三年間の年平均一クォーター當り五五シリング一〇ペンスに騰貴した。そして通貨については、一八六〇年には造幣局で三三七萬八千七百九十二ポンドが鑄造されたのに對し、一八六一年には八六七萬三千二百三十二ポンドが鑄造された。すなわち、一八六一年には一八六〇年に較べて、五二九萬四千四百四十ポンドだけ多く鑄造されたのである。なるほど、銀行券の流通は、一八六一年には、一八六〇年に較べて、一三一萬九千ポンドだけ減少した。これを差引いて見たまえ。それでも矢張り一八六一年には、好景氣の年である一八六一年に較べて、通

貨は三九七萬五千四百四十ポンドだけ、すなわち約四百萬ポンドだけ、多かつたのである。しかしイングランド銀行における金地金準備は、それと同じ時に、丁度同じ額ではないが、それに近い割合で、減少したのである。

一八六二年を一八四二年と比較して見たまえ。流通した商品の價值と分量との老大な増加を度外視しても、一八六二年には、イングランドおよびウェールズにおける諸鐵道の株式、社債等のために正規の取引で支拂われた資本だけでも、三億二千萬ポンドにのぼつた。こんな額は一八四二年においては荒唐無稽に思われたであろう。それでもなお、一八六二年と一八四二年との通貨の總額は、殆んど等しかつた。そして一般に諸君は、商品だけでなく貨幣取引一般の價值が巨大に増加したにも拘らず、通貨はますます減少する傾向があるということを見出すであろう。わがウェストンの立場からすれば、これは解くことのできない謎である。

この問題をいくらか立ち入つて觀察したならば、彼は、勞賃を全く度外視しても、そして勞賃を固定したものと假定しても、流通さるべき諸商品の價值と分量とは、そして一般に、決濟さるべき貨幣取引の額は、日々に變動するということ、發行される銀行券の額は日々に變動するということ、いかなる貨幣の介在もなしに、手形、小切手、帳簿上の信用、手形交換所の媒介によつて實現される支拂額は日々

に變動するということ、現實の金屬通貨が必要とされるかぎりでも、流通する鑄貨は銀行の地下室に準備されている・あるいは眠つてゐる・鑄貨および金地金の割合は、日々に變動するということ、國民的流通によつて吸収される金地金の分量と國際的流通のために國外に送られる金地金の分量とは、日々に變動してゐるということ、を見出したであらう。彼はさらに、通貨の分量が固定してゐるということの獨斷は、今日の日々の動きと一致しないところでもない誤りであるということ、を見出したであらう。彼は、通貨の諸法則に關する彼の誤解を勞賃の引上げに反對する論據たらしめる代りに、こんなに絶えず變動する諸事情に通貨を適應せしめることの諸法則を研究したのであらう。

四、供給と需要

わがウエストン君は、*repetitio est mater studiorum* すなわち反覆は研究の母なりというラテン語の諺を信奉してゐる。その結果彼は、彼の最初の獨斷をふたたび新らしい形で繰り返し、勞賃の騰貴の結果生じる通貨の收縮は、資本の縮少を生ぜしめるであらう、云々と云つた。私は、通貨に關する彼の奇妙な考をすでに吟味したので、彼が通貨に關する彼の想像上の不祥事から生ずると想像してゐる想像上の諸結果に立ち入ることは、全く不必要であると考へる。私は次に進んで、彼がこんなに

色々な形で反覆した一、個、同、一、の、獨、斷、を、直ちにその最も簡單な理論的形式に還元しよう。

彼がいかに無批判な仕方では彼の問題を取扱つたかは、たゞ一言いえば明かとなるであらう。彼は勞賃の引上げに反對して、あるいはかゝる引上げの結果としての高い勞賃に反對して、抗議する。それでは私は彼に質問しよう、高い勞賃とは何であるか、低い勞賃とは何であるか？ たゞえば何故五シリングの週勞賃は低く二十シリングの週勞賃は高いと考へるのか？ もしも五シリングが二〇シリングに較べて低いのなら、二〇シリングは二〇〇シリングに較べればさらに低いであらう。もしもひとが寒暖計について講義をしようとして、いきなり温度の高低について話しはじめならば、彼は何等の知識をも與えないであらう。彼はまづ、いかにして氷點は見出されるか、いかにして沸騰點は見出されるか、いかにしてこれらの標準點は自然的法則によつて定められ、寒暖計の販賣者または製造者の思いつきによつては定められないかを、われわれに話さねばならぬ。さて、勞賃と利潤とについて、ウエストン君は、かゝる標準點を經濟法則から導き出すことができなかつたばかりでなく、かゝる標準點を探す必要を感じさえしなかつた。彼は、高い低いという通俗の用語をなにか固定的な意味をもつものとして受入れることで満足したのであるが、しかし、勞賃はその大きさを測定する標準と比較してのみ高いとか低いとか云いうるにすぎないことは、自明である。

彼は、なぜ一定額の貨幣が一定量の労働に對して與えられるかを、私に話すことはできないであろう。もしも彼が私に答えて、『それは需要供給の法則によつて決定される』というならば、私は彼に先づ第一に、いかなる法則によつて需要供給そのものは規制されるか、と質問せねばならぬ。そうすればそんな答は直ちに駄目になるであろう。労働の需要と供給との間の關係は、絶えず變動し、それと共に労働の市場價格もまた絶えず變動する。もしも需要が供給を超えれば、勞賃は騰貴し、供給が需要を超えれば、勞賃は下落する。尤もそういう事情の下では、需要と供給との現實の狀態を、たとえばストライキまたは何等かの他の方法で検してみ、必要があるかも知れないが。しかし、もしも諸君が需要と供給を勞賃を規制する法則だと認めるならば、勞賃の引上げに反對するのは、無益であると共に兒戯に類することであろう。というのは、諸君の訴える最高の法則に従えば、勞賃が週期的に騰貴することは、勞賃が週期的に下落することと全く同様に、必要であり且つ合法的だからである。もしも諸君が需要と供給とを勞賃を規制する法則だと認めないならば、私は、なぜ一定額の貨幣が一定量の労働に對して與えられるか、という質問を再び繰り返すであろう。

しかし問題をより廣く考えると、労働またはなんらかの他の商品の價值が需要と供給とによつて終局的に決定されると考えるのは、全く誤りである。需要と供給とは、たゞ市場價格の一時的變動を規

制するだけである。需要と供給とは、一商品の市場價格が何故その價值以上に騰起しまたはその價值以下に下落するか、を諸君に説明するであろう。しかしそれは、その價值そのものを説明することはできない。いま需要と供給とが均衡を保つものと、あるいは經濟學者たちが云うように互に相い蔽うものと、假定しよう。實際、これらの對立する力が等しくなるや否や、それらは互に無力化し合い、どちらの方向にも作用しなくなる。需要と供給とが均衡化し、從つて作用しなくなる瞬間に、商品の市場價格はその現實の價值と、すなわちその市場價格がその周圍を動搖するところの標準價格と、一致する。それゆゑ、その價值の性質を研究するに當つては、われわれは、需要供給の市場價格に及ぼす一時的影響には何の用もない。同じことは、勞賃についても、他のすべての諸商品の價格についても當てはまるのである。

五、勞賃と價格

わがウエストン君のすべての議論は、これをその最も簡単な理論的表現に還元すると、『諸商品の價格は勞賃によつて規定または規制される』という單一な獨斷に歸する。

この陳腐な且つすでに論駁された謬説に對する反證をあげるために、私は實際上の觀察に訴えよう。

私は諸君に次のことを云いたい、イギリスの工場労働者、鑛夫、船舶建造工等の労働は相對的に高い價格をもつてゐるが、彼等は安い彼等の生産物によつてすべての他の諸國民よりも安く賣つてゐる。ところが例えばイギリスの農業労働者の労働の價格は相對的に低いのに、彼等は彼等の生産物が高いために殆んどすべての諸國民によつて安く賣られてゐる。同じ國の財貨と財貨とを、そして異なる國の諸商品を、比較することにより、私は、現實的だというよりはむしろ外見的な若干の例外を除けば、平均して價格の高い労働は價格の低い商品を生産し、價格の低い労働は價格の高い生産物を生産することを、示すことができるであろう。これはもちろん、一方の場合では労働の高い價格が、他方の場合では労働の低い價格が、それぞれこれらの正反對の結果の原因であることを、證明しはしないであろう。しかし兎に角、それは、諸商品の價格が労働の價格によつては規制されないということを、證明するであろう。しかしこの經驗的な方法を用いるのは、われわれにとつては全く餘計なことである。ウエストン君が、諸商品の價格は、勞賃によつて規定または規制される、という獨斷説を主張したことは、恐らく否定されるかも知れない。實際、彼は決してこの獨斷説を定式化しはしなかつた。むしろ逆に彼は云つてゐる、利潤と地代ともまた諸商品の價格の構成部分をなしている、というのは、諸商品の價格の中から労働者の勞賃ばかりでなく、資本家の利潤と地主の地代ともまた支拂われねばな

らないのだから、と。しかし彼の考においては、價格はいかにして形成されるか？ 先づ第一に、勞賃によつて形成される。つぎにその價格に、資本家のためにある割合の追加がなされ、更らに地主のために別の割合の追加がなされる。一商品の生産のために雇用される労働の勞賃を一〇だと假定しよう。もしも利潤率が一〇〇パーセントであれば、資本家は前貸した勞賃に對して一〇を付け加えるであろう。そしてもしも地代率もまた一〇〇パーセントであるとすれば、勞賃の上に更らに一〇が付け加えられるであろう。そしてその商品の總價格は三〇となるであろう。しかし價格をこういう風に決定することは、價格を勞賃によつて決定することに外ならない。例えば、もしも上掲の場合に勞賃が二〇に騰貴するならば、この商品の價格は六〇に騰貴するであろう。その結果、勞賃が價格を規制するといふ獨斷説を主張する經濟學上のすべての老朽著述家たちは、利潤と地代とを勞賃に對する單なる追加的割合として取扱ふことにより、それを證明しようと思つた。もちろん、彼等のうちのなんびとも、これらの割合の諸制限をなんらかの經濟法則に還元することはできなかつた。むしろ反對に彼等は、利潤は傳統や習慣や資本家の意思やによつて、あるいは何等かの他の同様に恣意的なそして説明のできない方法によつて、規定される、と考へてゐるようである。もしも彼等が、利潤は資本家間の競争によつて決定される、と主張するとしても、それは何物をも説明しはしない。この競争は、確かに、

異なる諸部門における異なる諸利潤率を平等化するであろう、すなわちそれらを一つの平均水準に還元するであろう、しかしそれは、その水準そのもの、すなわち一般的利潤率を決して決定しえないであろう。

諸商品の価格は労賃によつて決定されるというのは、一體どういう意味であるか。労賃というのは労働の価格につけられた名前に外ならないのだから、それは、諸商品の価格は労働の価格によつて規制される、という意味である。「価格」は交換価値であり（私が価値といふのはいつも交換価値のことである）貨幣で表現された交換価値であるから、この命題は、「諸商品の価値は労働の価値によつて決定される」、あるいは「労働の価値は価値の一般的尺度である」、という命題に歸着する。

しかしそれでは、「労働の価値」そのものはどうして決定されるか？　ここでわれわれは、はたと行き詰つてしまふ。もちろん、もしもわれわれが論理的に推論しようと思ふならば、行き詰るといふ意味である。しかしこの説の主張者たちは、論理的な氣兼ねなどにはこだわらない。例えばわがウエストン君を例にとらう。先づ彼はわれわれに、労賃が諸商品の価格を規制するから、労賃が騰貴すれば価格は騰貴せざるをえない、と話す。次に彼は向きを変えて、労賃を引上げて何の役にも立たない、というのは、諸商品の価格は騰貴しており、労賃は實際それが費される諸商品の価格によつて測定されるのだから、ということを示す。かくして彼は労働の価値は諸商品の価値を決定するという主

張からはじめ、諸商品の価値は労働の価値を決定するという主張で終る。かくしてわれわれは、極端な循環論法に陥つて往つたり來つたりし、なんらの結論にも到達しないのである。

これを要するに、一つの商品、例えば労働、穀物、またはなんらかのその他の商品の価値を価値の一般的尺度および規制者たらしめることは、ただ困難を一時他に轉じることにはすぎない、というのは、われわれは一つの価値を他の価値によつて決定するが、この価値そのものはさらにまた何かによつて決定されねばならぬからである。

『労賃は諸商品の価格を決定する』という獨斷は、これを最も抽象的な言葉で表現すれば、「価値は価値によつて決定される」ということに歸着する、そしてこの同義反覆は、實際においてわれわれは価値については何も知らない、ということの意味する。もしこの前提を承認するならば、經濟學の一般的法則に關するすべての推理は、單なる饒舌に變ずる。それゆえリカードが、一八一七年に出版した經濟學の諸原理に關する彼の著述において、「労賃が価格を決定する」という古い通俗的な陳腐な謬説を根本的に論破したのは、彼の大きな功績であつた。この謬説は、アダム・スミスおよびそのフランスにおける先驅者たちが、彼等の研究の眞に科學的な諸部分ではすでに斥けたが、しかし彼等の比較的表面的な俗流的な諸章では再び持ち出しているところのものである。

六、價值と勞働

諸君、私はいま、この問題の眞實の展開に入らねばならぬという點に達した。「しかし」私はこれを極めてうまい具合にやつてのけようと約束することはできぬ、何故というに、さうするためには、私は經濟學の全領域に亘らなければならなくなるから。私はたゞ、フランス人がよく言うように *effleurer* la question すなわち主要點に觸れうるだけだ。

われわれが提出しなければならぬ第一の問題は、商品の價值とは何か？ どうしてそれが決定されるか？ ということである。

一見すると、一の商品の價值は全く相對的、なものであつて、一の商品をばそのものが總ての他の商品に對して有する關係において考えなければ、決定することの出來ぬもののように見えるだろう。實際において、われわれが一の商品の價值、交換價值という時には、われわれはその物が總ての他の諸商品と交換される比例的諸分量を意味する。しかし、そうだとすると「更に」問題が起る、諸商品が相互に交換される諸々の比率は、如何にして決定されるか？

われわれは經驗からして、これらの比率は限りなく相違することを知つてゐる。假りに或る一個の

商品、例えば小麥を取つて見るに、われわれは一クオータの小麥が他の諸商品と殆ど無數の違つた比率において交換されることを見出す、しかしその價值は、たとえ絹布や金やその他の商品で「いろいろに」言い表されるにしても、依然としていつも同じであるから、それはその物が他の諸商品と交換されるこれらの種々なる交換比率とは何か違つたもので、それらから獨立したものでなくてはならぬ。それを、種々なる商品の間のこれら種々なる方程式とは違つた一つの形式で言い表すことが、可能でなければならぬ。

そればかりではなく、もし私が、小麥一クオータは一定の比率において鐵と交換されるか、または小麥一クオータの價值は鐵の一定量で言い表されるか、いうならば、それは私が、小麥の價值と鐵で表わしたその等價とは、小麥でも鐵でもない或る第三者に等しい、ということになる、何故というに、「そういう場合には」、これらの物は二つの違つた形で同一の大きさのものを表現しているということが假定されているのだから。だからこれらの各々は、小麥にせよ鐵にせよ、他方のものからは獨立して、それらのものの共通の尺度であるこの第三者に還元されえなければならぬ。

私はこの點を明かにするために、極く簡單な一例を幾何學から取つて見よう。各種の形態および大きさを有する三角形の面積を比較し、または三角形と長方形またはその他の直線形とを比較する場合に、

われわれはどんな仕方をするか？ われわれはどんな種類の三角形の面積でも、そのものの目に見える形態とは全く違つた一つの表現に還元してしまふ。われわれは三角形の性質からして、三角形の面積はその底邊と高さとの積の半分に等しいことを知り、しかる後始めて、われわれは總ての種類三角形並びにその他の長方形の種々なるあたいを比較することが出来る、なぜというに、これらの長方形はすべて一定の数の三角形に分解し得られるものだから。

商品の價値についても同じ遣方をしなければならぬ。われわれは總ての商品をば總てに共通な一つの表現に還元し、そうして只、それらがこの同一の尺度を包含する比率によつてのみそれらを區別することができねばならぬ。

諸商品の交換價値はこれらの物の單なる社會的機能であつて、自然的諸性質とは何等の關係のないものであるから、われわれは先ず、すべての諸商品に共通な社會的の實體は何か？ ということを探ねなければならぬ。それは労働である。一の商品を生産するためには、一定量の労働がその上に加えられねばならぬ。あるいはその仕上に費されねばならぬ。そうして私はいふが、それは單に労働ではなくて、社會的労働だ。自分自身の直接の使用のために、すなわち自分自身がそれを消費するために、或る貨物を生産する人は、生産物を作り出すだけで、商品を作り出すのではない。自給自足の生産者

として彼は社會と没交渉である。しかるに商品を生産するためには、人はたゞなんらかの社會的の欲望を満たす貨物を生産するばかりでなく、彼れの労働そのものが社會によつて費される労働總量の一部となり一片とならなければならぬ。すなわちそれは社會の内部の分業に従屬していなければならぬ。それは他の諸分業がなければ始めから成り立たぬものであり、また自分の方からは他の諸分業を補充して行かなければならぬものである。

もしわれわれが諸商品を價値として考えるならば、われわれはこれらのものをば専ら、實現された。または固定された。更に言い換えれば結晶された。社會的労働という單一の觀點から觀察するのだ。この觀點からすれば、これらの商品はたゞ労働の多いまたは少い分量を代表しているということだけが相違しうるのであつて、例えば、絹のハンケチには煉化石によりも餘計な分量の労働が費されていくというの類だ。それなら何うして労働の分量を測るか？ それは労働の續く時間によつて、すなわち労働を、時、日等で測るのである。もちろんこの尺度を當てはめるためには、總ての種類労働がそれらの單位としての平均労働または單一労働に還元されるのである。

そこでわれわれは斯ういう結論に達した、一の商品が價値をもつのは、それが社會的労働の結晶だからだ。その價値の大きさ、すなわちその相對的價値は、その中に含まれているかゝる社會的實體

の分量の大小に、言い換えるとその生産に必要な労働の相対的な分量に、依存するのだ。だから諸商品の相対的価値は、それらの商品に費され、實體化され、固定された、労働のそれぞれの量または高によつて決定される。同一の労働時間内に生産されうる諸商品のそれ／＼の分量は、価値において相等しい。或はまた、一商品の価値が他の商品の価値に對する比率は、前者に固定された労働の分量が後者に固定された労働の分量に對する比率に等しい。

恐らく諸君の多數は質問せられるだらう、しからば商品の価値を勞賃によつて決定すること、それを生産するために必要な労働の相対的、分量によつて決定することの間には、果してそんなに大きい・または何等かの・差異が存するのであるか、と。ところが諸君は、労働の報酬と、労働の分量とが、全く別物だということを知らねばならぬ。例えば、一クオータアの小麦と一オンスの金とに同量の労働が固定されているとする。私がこの例を取るのには、それが一七二二年に公にされたベンジャミン・フランクリンの最初の論文に用いられてあるからだ。この著述は『紙幣の性質及び必要に關する一研究』と題するので、そこで彼は、先鞭をつけた者の一人として、価値の眞性質に觸れている。さてわれわれは、一クオータアの小麦と一オンスの金とは、平均労働の同じ分量の結晶物であつて、何日分か何週分かの労働がそれぞれこれらの物の固定されているがために、これらの物は等しい価値、また

は、等價物であると假定する。かようにして金と穀物との相対価値を決めるに際して、われわれは農業労働者および礦夫の勞賃について何か顧慮するかということに少しもわしめない。われわれは、いかに彼等の一日分又は一週間分の労働が支拂われるかということ、または總じて賃労働が使用されたかどうかということさえ、全く未決定のままにしておく。もし賃労働が使用されたにしても、勞賃は甚しく不同であつたかもしれない。その労働を小麦一クオータアに實現した労働者は僅に二ブッシェル（一クオータアは八ブッシェルで、一ブッシェルは二斗一合餘）を受取つていのに、礦業に使用された労働者は金半オンスを受取ていることもありうる。或はまた、彼等の勞賃は等しいとしても、彼等が生産した商品の価値からの距りは、様々の有らゆる程度でありうる。それは穀物一クオータアまたは金一オンスの二分の一、三分の一、四分の一、五分の一、またはその他の何分の一かでありうる。もちろん彼等の勞賃が、彼等の生産した商品の価値を超過し、それより多くなるということはあるが、しかし有らゆる可能な程度においてそれより少くはありうる。彼等の勞賃は生産物の価値によつて制限されるが、しかし彼等の生産物の価値は勞賃によつて制限されはしない。何はともあれ、価値、例えば穀物と金との相対的価値は、使用される労働の価値には、すなわち勞賃には、なんらの關係なくして決められるものである。だから、商品の価値をば、それに固定された労働の相対的、分量で決めること

は、商品の價值をば労働の價值によつて、すなわち勞賃によつて決めるという同義反覆的な方法とは、全つたく別種の事柄である。しかしこの點は、われわれの研究が進むに従つて、なお委しく説明するであらう。

商品の交換價值を計算するに當つては、われわれは最後に用いられた労働の分量に加うるに、商品の原料に以前に費された労働の分量と、かかる労働を助けるために用いられる器具、道具、機械および建物に費された労働とを以てしなければならぬ。例えば一定量の木綿糸の價值は、紡績作業の行程中に綿花に加えられた労働の分量、以前綿花そのものに實現された労働の分量、石炭や油やその他使用された助成材料に實現された労働の分量、蒸氣機關や紡錘や工場用建物やその他のものに固定された労働の分量等の結晶物である。固有の意味における生産手段、例えば道具や機械や建物は、繰り返えされる生産過程の経過中、或は長い或は短い期間に亘つて引續いて使用される。もしこれらのものが原料のように直ちに消費されるならば、これらのものの全價值は、これらのものがその生産を助けた商品に、直ちに移轉されるであらう。けれども、例えば紡錘の如きは、段々にしか消耗しないのだから、それが持續する平均時間と一定の期間例えば一日の内におけるその平均の磨損または消耗とを基礎として、平均の計算がなされる。かようにしてわれわれは、紡錘の價值の中どれだけが日毎に紡がれ

る糸に移轉し、從てまた、例えば一封度の糸に實現される労働の總量の中で、どれだけが以前紡錘に實現された労働の分量に基ずくかを、計算することができる。われわれの現在の目的にとつては、この點に關し最早や之れ以上縷説する必要はない。

商品の價值がもしその生産に費された労働の分量で決まるならば、人が怠惰であればあるだけ、また人が不器用であればあるだけ、その商品を仕上げるために餘計の労働時間を要するから、その人の商品は一層價值あるもののように考えられるかも知れない。しかしこれは大變な間違だ。諸君は私が『社會的労働』という語を使つたことを記憶せられるだらう、この『社會的』といふ形容詞の中には多くの要點が含まれている。商品の價值はそれに費されたまたそれに結晶された労働の分量によつて決まるという時、われわれは、與えられた社會状態において、一定の社會的平均の生産條件の下において、與えられた社會的平均程度の労働の強度と熟練とを以つて、その生産のために必要とせられる労働の分量を意味する。イギリスにおいて力織機が手織機と競争するようになってからは、一定量の糸を一ヤアドの綿布にするのに、以前の労働の半分しか要らなくなつた。そこで憐れな手織機業者は、以前は一日に九時間乃至十時間しか働いていなかつたのに、今は一日に十七時間乃至十八時間働くようになった。けれども二十時間分の彼れの労働の生産物は、今では社會的労働の僅に十時間分を、言

い換えるに一定分量の糸を織物にするため社会的に必要な労働の十時間分を、代表するにすぎなかつた。だから、二十時間に亘る彼の生産物は、以前彼が十時間かけて仕上げた生産物の価値しか持たなくなつた。

さてもしも諸商品に實現された社会的に必要な労働の分量が、それらの交換価値を左右するならば、一の商品の生産に必要な労働の分量が増す毎にその商品の価値は高まり、減する毎にその価値は低くなるをえなないであろう。

もし色々の種類の商品の生産に必要なそれぞれの労働量がいつも不変であるならば、それらの商品の相対価値もまた不変であるだろう。しかし實際にはそういうことは起らぬ。一商品の生産に必要な労働の分量は、使用される労働の生産諸力が變化するにつれて、絶えず變化する。労働の生産諸力が大きければ大きいほど、労働の一定時間内により、多くの生産物が仕上げられ、労働の生産諸力が小さければ小さいだけ、同じ時間内により、僅く生産物が仕上げられる。例えば、人口の増加に伴うて瘦せた土地を耕作することが必要になつてくるようなことがあれば、同じ高の生産物が、より多くの労働量を費してでなければ得られなくなり、その結果農産物の価値は高くなるだろう。これに反し、近代の生産手段を以て、一人の紡ぎ手が一労働日のうちに、手紡車をもつて同じ時間内に紡ぎ得たであ

らうところの綿花量の數千倍を、糸にしてしまふならば、明かに綿花の各一封度は、以前にくらべて絲紡ぎ労働の數千分の一しか吸収しないであろう。そうしてその結果、紡績作業によつて綿花の各一封度に付け加えられる価値は、以前の數千分の一であるだろう。絲の価値はそれに應じて下落するだろう。

しばらく種々なる人々の先天的の精力および後天的の労働能力の差異を度外視するならば、労働の生産諸力は主として次のものに依存するにちがいない。

第一、労働の自然的條件、例えば土地や礦山の豐饒度、等々。

第二、労働の社会的諸力の進みゆく改善、この改善は、例えば大規模生産、資本の集中および労働の結合、分業、機械、作業方法の改良、化學的およびその他の自然的諸力の應用、通信および運輸の機關による時間および空間の縮少、ならびに科學がそれによつて自然的諸力を強制し労働に奉仕せしめるところの、またそれによつて労働の社会的または協力的性格が發達せしめられるところの、その他の一切の發明等からえられる。労働の生産諸力が大きければ大きいほど、より少量の労働が生産物の一定量に費され、從て生産物の価値はそれだけ小さくなる。労働の生産諸力が小さければ小さいほど、より多量の労働が生産物の同じ分量に費され、從てその価値はそれだけ大きくなる。だからわれ

われは次のような一般的法則をうち立てることができる。

諸商品の価値はそれらの生産に使用せられる労働時間に正比例し、使用せられる労働の生産諸力に反比例する。

私はこれまでたゞ価値についてのみ話して来たが、さらに価格については數言を加えねばならぬ、価格は価値のとる一の特種形態である。

価格は、それ自身をとつて見れば、たゞ価値の貨幣的表現たるに過ぎない。例えばこの國〔英國〕におけるすべての諸商品の価値は金價格で表現されているが、大陸では主として銀價格で表現されている。^{*}金または銀の価値は、總ての他の商品のそれと同じように、それを得るために必要な労働の分量によつて左右される。われわれはわれわれの國民的労働の一定量が結晶されているところの、われわれの國民的生産物の一定量をば、金銀産出國の國民の労働の一定量が結晶されているところの、それらの國々の生産物と交換する。そうした方法により、すなわち事實上は物々交換により、われわれはすべての諸商品の価値、すなわちそれらのものに費された労働のそれぞれの分量をば、金および銀で現わすことを學ぶのである。われわれが価値の貨幣による表現について、あるいは同じことであるが、価値の價格への轉化について、やゝ立ち入つて研究するならば、それはわれわれが、すべての諸商品

の価値に一の獨立な・かつ同質な・形態を與えるための、あるいは等しい社會的労働のそれぞれの分量としてそれらを表現するための、一の手続きだということを見出すだろう。価格は、それが価値の貨幣による表現にすぎないかぎり、アダム・スミスによつては *natural price* (自然價格) と呼ばれ、フランスのフイジオクラート〔重農學派の人々〕によつては *prix nécessaire* (必要價格) と呼ばれたのである。

^{*}當時では英國だけが金本位制を採っていた。

しからば価値と市場價格との關係、あるいは自然價格と市場價格との關係はどうであるか？ 諸君がすべて知つておられるように、商品の生産條件が個々の生産者たちにとつていかに相違していても、同じ種類の商品ならばその市場價格はすべて同一である。市場價格は、生産の平均條件の下において、一定の貨物の一定量を市場に供給するために必要な、社會的労働の平均量を表わすにすぎない。それは、一定種類の商品の全量について計算される。

そのかぎりでは一の商品の市場價格はその価値と一致する。しかるに他方において、市場價格は、いま価値すなわち自然價格の上に乗るかと思えば、すぐにまたその下に下がるかというように、絶えず動搖するが、この動搖は需要と供給との變動に依存する。市場價格は絶えず価値から離れている、し

かしアダム・スミスの言つたように、『自然価格は諸商品の価格が絶えずそれに引かれているところの中心価格である。色々な出来事のために、時としては市場価格が自然価格の遙に上に留まつていることもあれば、時としてはいくらかそれ以下に推し下げられることさえある。しかしいかなる障壁があつて市場価格が休息と滞在とこの中心に安定することを妨げようとも、市場価格は不斷にこれに向つて近かすこうとしつつある。』

私はいまこの點をくわしく述べることはできぬ。たゞ、もしも、需要と供給とが互に均衡を保つならば、諸商品の市場価格は、それらの自然価格と、すなわちその生産に必要な労働のそれぞれの分量によつて決定されるそれらの価値と、一致するであろう、ということ言えば充分である。ところが需要と供給とは絶えず互に均衡する傾向をもたざるをえない。尤もそれは一の動搖は他の動搖により、すなわち騰貴は下落により、「価格が騰貴し過ぎて供給が需給に超過すれば、次ぎには価格が下落する」ということにより「また下落は騰貴によつて」「価格が下落し過ぎて需要が供給に超過すれば、次ぎには価格が騰貴する」ということによつて」均衡するの外はないのだが。もしも諸君が、單に日々の動搖だけを觀察する代りに、例えばトウク氏が其の著 *History of Prices* (物價史) でしたように、長期に亘つて市場価格の動きを分析するならば、諸君は、市場価格の動搖、その價值からの背離、その騰貴と下落とは、互

に無力化し相殺するものであつて、獨占の作用およびその他若干の影響——いま私はこれらの問題に立ち入ることは出来ぬ——を無視するならば、すべての種類の商品は、平均においては、それぞれの價值、または自然価格をもつて賣られるものだ、ということを見出されるであろう。市場価格の動搖が相互に相殺するにいたる平均期間は、商品の種類を異にするによつて異なる。というのは、或る種類の商品にあつては他の商品におけるよりも、供給を需要に適合せしめることが一層容易であるからだ。

そこで、廣く一般的に言えば、そして稍々長い期間をとつてみると、すべての種類の商品はそれぞれその價值において賣られるものと見ることが出来るが、もしそうだとすれば、利潤が、——個々の場合における利潤でなく、種々な事業から生ずる恒常的な・そして一般的な・利潤が、——商品の價格から、すなわち商品をばその價值以上の價格で賣ることから、發生するものだと考えるのは、ノンセンスである。この考の馬鹿らしいことは、これを一般化して見ると明かだ。或人が賣手として絶えず得ているものは、買手として絶えず損していなければならぬ。「賣る時には價值以上の價格で賣るから得をするだろうが、物を賣るばかりで何も買わない」といふ譯には行かぬから、一方で賣ると同時に、他方で物を買ふ譯だが、すでに物を買ふとなれば、矢張り價值以上の價格で買ふのだから、賣つた時に儲けた利得は、買ふ時に皆な無くして仕舞い、前後差引きなんらの餘分も残らぬ譯だ。それかと言つて「賣手になることの無い買手、

または生産者になることの無い消費者がある、と言つたところが、それは駄目だ。これらの人々が生産者に支拂うところのものは、彼等が最初生産者から無償で得てきたものでなければならぬ。「しかるに」もし誰かが先づわれわれの金を取り上げて置いて、そうして後からその金でわれわれの商品を買うのなら、われわれはその同じ人にわれわれの商品をいくら高く賣つたとて、それで金持になればしないだろう。こんな種類の取引は損失を軽くすることはできても、決して利潤を産み出す助けにはならぬだろう。

だから利潤の一般的性質を説明するためには、われわれは、こういう理論——すなわち商品は平均していえばその眞實の價值において賣られるものであり、そうして利潤はこれらの商品をその價值において、言い換えると、それに實體化された労働の分量に比例して、賣ることにより獲得されるものだ、という理論——から出發しなければならぬ。もしわれわれがこの前提の下に利潤を説明することが出来なければ、われわれは全くこれを説明することが出来ぬのだ。これはパラドックスであり、日常の觀察に反しているように見える。しかし地球が太陽の周りを廻つていくというのも、また水が最も燃え易い二種の瓦斯から成り立つていくといふのも、等しくパラドックスだ。科學上の眞理は、單に事物のひとを迷わし易い外觀のみ促えるところの、日常の經驗から判斷したならば、何時でもパラドックスである。

パラドックスである。

七、労働力

さてわれわれは、このような早急な方法でなしうるかぎりにおいて、すでに價值の性質、あらゆる種類の商品の價值の性質を研究し了えたからして、われわれは是れからわれわれの注意をば、労働の價值という特殊の價值に向けなければならぬ。そうして茲でもまた私は一見パラドックスに似たことをいつて、諸君を驚かさなければならぬ。

諸君〔労働者諸君〕の總ては、諸君が日々賣るところのものは諸君の労働だということ、従て労働は一の價值を有するということ、また一商品の價格はその價值の貨幣的表現にすぎないのだから、〔労働についても〕必ず労働の價值というようなものがあるにちがいないということ、信ぜられるであろう。けれども、言葉の普通の意味においては、『労働の價值』というようものは全く存在しないのである。すでに述べたように、一の商品に結晶された必要労働の分量が、その價值を構成するのであるが、いまこつちの價值概念を適用して、例えば十時間の労働日の價值を、何うして決めうるか？ その日の中に何れだけの分量の労働が含まれているか？ それは十時間の労働だ。「しかし」十時間の労働日の

價值は十時間の労働に等しいとか、その中に含まれている労働の分量に等しいとかいうのは、同義反覆の・それどころか無意味の・言い表しである。もちろん、ひとたびわれわれが『労働の價值』という言い表しの眞實な・しかし隠れた・意味を見出すならば、われわれはこの不合理な・そして外見上不可能な・價值〔概念〕の適用を説明しうるのであり、それは恰も、ひとたび天體の眞實の運動を確めると、われわれはこれら天體の外観上の・または單に現象的な・運動を説明しうるようになるのと、同じである。

労働者が賣るものは、直接に彼れの労働ではなくて、彼れの労働力である。その労働力の處分を一時彼は資本家に委ねるのである。このことが實際の事實だということは、英國の法制では何うなつてゐるか知らぬが、——大陸のある國々の法制では、ひとがその労働力を賣ることを許される最長期間が規定されてあるのを見ても、よくわかる。もし労働力をいくらでも無期限に賣ることが許されるならば、奴隸制がすぐ復活することになるだろう。もし労働力の賣却が人の一生に亙るならば、その人は直ちに彼れの雇主の生涯の奴隸となるだろう。

英國のもつとも古い經濟學者でまたもつとも獨創的な哲學者の一人である、トマス・ホツプスは、すでに其の著レヴィアタン〔舊譯聖書にてくる海の怪物の名〕において、本能的にこの點に觸れている

が、それは彼のすべての後繼者によつて看過されてしまつた。彼はいう、『ひとの價值または値打は、すべての他の物におけると同じように、彼れの價格、すなわち彼れの力の使用に對して提供されるところのものである。』

この基礎から出發するならば、われわれは、すべての他の諸商品の價值と同じように、労働の價值を決定することができるであらう。

しかしそれをする前に、われわれは次のことを疑問とすることができよう。市場には土地や機械や原料や生活資料を有つてゐる〔労働力の〕買手の一組がいて、これらの人々のもつてゐる物は、原始状態における土地を除けば、すべて労働の生産物であるのに、他方には〔労働力の〕賣手の一組がいてそれらの人々は彼等の労働力、すなわち労働を爲しうるための腕と頭との外、賣るべき何物をも有つていないといふこの奇怪な現象は、何うして起つたのだ？ 一方の組は利潤をえ、且つみづから富むために絶えず〔労働力を〕買つており、他方の組は彼等の生活資料をうるために絶えず賣つておるといふこの奇怪な現象は、何うして起つたのだ？ この問題の研究は、經濟學者が『先行的の・または本源的の・蓄積』と名づけているが、併しより正確には『本源的の收奪』と名づけらるべきものの研究になる。〔そうしてこの問題を研究したならば〕、われわれはそのいわゆる本源的蓄積なるものは、元と労働

する人と彼の労働手段との間に存在していた本源的結合の崩壊をもたらすところの、歴史的過程の一
系列を意味するにすぎないことを、発見するだろう。しかしかかる研究は、私がいま問題とする対象
の範囲外に横わつてゐる。さてひとたび労働する人と労働する手段との分離が確立されるならば、か
かる事態はそれ自身を維持し、かつ絶えず擴大する規模においてそれ自身を再生産し、かくて遂には、
生産様式における一の新たな・根本的な・革命が再びそれを轉覆し、一の新たな歴史的形態において
本源的の結合を恢復するにいたるまではやまないのである。

それでは労働力の價值とは何であるか？

あらゆる他の商品の價值と同じように、労働力の價值もそれを生産するに必要な労働の分量によつ
て決定される。人間の労働力はたゞ彼れの生きた個體の中のみ存する。人間が成長し且つその生命
を維持するためには、彼によつて生活必需品の一定量が消費されなければならぬ。しかるに人間は機
械と同じように消耗する、そして更に他の人間によつて補充されねばならぬ。だから彼は、彼自身
の維持のために必要な生活必需品の分量の外に、一定数の小供——労働市場において彼の後継ぎと
なり、かくて労働者という人種を永續させる爲のもの——を育て上げるために、更に生活必需品の他
の分量を必要とする。そればかりでなく、彼の労働力を發達させ、一定の熟練を習得するためには、

價值の他の分量が費されねばならぬ。尤もわれわれの目的にとつては單に平均労働を考へるだけで充
分である、そして平均労働の教育と發達とに要する費用はほとんどに足りない額である。「だか
らこの點はさして重きを置かなくても可いが」しかしこの機會を捉えて述べて置かなければならぬのは、
異なる質の諸労働力を生産する費用は同じでないから、異なる事業に使用される諸労働力の價值もま
た相違しなければならぬという事だ。だから、勞賃の平等を要求する叫聲は、一の謬想にもとづくも
ので、それは到底實現されえざる無稽の願望だ。それは前提を受入れてしかも結論を避けようとする、
かの謬つた・且つ淺薄な・急進論の所産である。勞賃制度の基礎の上では、労働力の價值は一切の他
の商品の價值と同じ様に決定される。そして異なる種類の労働力は異なる價值を有するから、すなわ
ちそれらの生産には異なる分量の労働を必要とするのだから、それらの労働力は労働市場において異
る價格を附せられねばならぬ。勞賃制度の基礎の上に立つて平等の報酬を要求するのは、——あるい
は單に公平の報酬を要求するのでさえ——それは奴隷制度の基礎の上に立つて自由を要求するのと同
じである。諸君が何をもつて正義と考へ公平と考へるか、ここでは問題にならない。問題は、一定
の生産制度の下に如何なることが必然であり不可避であるかに在る。

以上述べたところによつて明かなように、労働力の價值は、労働力を生産し、發達せしめ、維持し、

ある。労働者の労働力の価値を限定するところの労働の分量は、決して彼れの労働力が遂行しうる労働の分量の限界となるものではない。再び紡績工の例を取つて見よう。すでに述べた様に、毎日彼の労働力を再生産するためには、彼は毎日三シリングの価値を再生産しなければならず、彼は毎日六時間宛働くことによつてそれを行うであろう。しかしながらこのことは、彼が一日十時間または十二時間またはより多くの時間働くことを、妨げるわけではない。ところが資本家は、紡績工の労働力の一日分または一週間分の価値を支拂うことによつて、その労働力をば一日全部または一週全部に互つて使用する権利をうる。だから彼は、労働者をして例えば一日十二時間働かせることにする。それゆゑ労働者は、彼の労賃または彼の労働力の価値を補填するに必要な六時間を超えて、更に六時間働かねばならぬだろう。私はこの時間を剰餘労働の時間と名づけるであろう、そうしてこの剰餘労働が物體化して剰餘価値となり剰餘生産物となるのである。もしわれわれの例にとつた紡績工が、例えば、毎日の労働六時間によつて、彼れの労賃に丁度等しいだけの価値、すなわち三シリングだけの価値を綿花に加えるとするならば、彼は十二時間の内には、綿花に對し六シリングの価値を加え、またそれに應ずるだけの剰餘の糸を生産するであらう。「ところが」彼はすでに、彼れの労働力を資本家に賣つてゐるのだから、彼が産出する全価値または全生産物は、彼れの労働力の一時的所有者である

資本家の手に歸してしまふ。だから資本家は、六時間分の労働が結晶されている価値を前拂して、その代りに十二時間分の労働が結晶されている価値を受取るのであり、三シリングを前拂して六シリングの価値を實現するのである。これと同じ過程を毎日繰り返すことによつて、資本家は毎日三シリングを前拂して毎日六シリングを手に入れる、そうしてその六シリングの半分はふたたび労賃の支拂のためにてゆくが、残りの半分は、資本家がそれに對してなんらの對價も支拂わぬところの、剰餘価値を形成するのである。資本と労働との間のこの種の交換こそ、資本制的生産または労賃制度がその上に立つ基礎であり、かつそれは、労働者を労働者として、また資本家を資本家として、絶えず再生産する結果を齎さざるを得ないものである。

すべての他の事情が同一であるとすれば、剰餘価値の率は、労働日（一日の労働時間）のうち、労働力の価値を再生産するに必要な部分と、資本家のために行われる剰餘時間または剰餘労働との間の比率に依存する。すなわちそれは、労働者がそれだけ働らいたのではたゞ彼の労働力の価値を再生産しまたは彼の労賃を補填するにすぎないであろう範圍をこえて、それ以上に労働日（一日の労働時間）が引き延ばされる割合に依存するのである。

九、労働の価値

われわれはいまや『労働の価値または価格』という表現に立ち還えらねばならぬ。

すでに述べたように、労働の価値または価格とは、事實上、労働力の価値をばその維持のために必要な諸商品の価値によつて測定したものにすぎない。けれども労働者は彼の労働を終えた後に、彼の労働を受取るので、そしてそれのみでなく、彼が現實に資本家に與えるものは彼の労働だということを知っている。彼の労働力の価値または価格は、彼にとつては、彼の労働そのものの価値または価格であるように見えざるをえない。もし彼の労働力の価格〔すなわち彼が受取る賃金〕が三シリング——その中には六時間分の労働が實現されている——であり、そして彼が〔その賃金にたいして〕十二時間働くならば、彼はこの三シリングを十二時間分の労働の価値または価格だと考えざるをえない——實際にはこの十二時間分の労働は六シリングの価値に實現されるのだけれども。このことから二つの結果がでてくる。

第一、労働力の価値または価格は、労働そのものの価値または価格という外觀をさる、尤も、嚴密に言えば、労働の価値または価格という言葉は無意味の言葉だけれども。

第二、労働者の一日の労働のたゞ一部分のみが報酬を支拂われ、他の部分は報酬を支拂われないに係らず、またその不拂のまたは剰餘の労働こそ、剰餘価値または利潤がそれから形成される元本に外ならないにも係らず、あたかも全體の労働が支拂われた労働であるかのように見える。

かような虚偽の外觀をもつていふと云ふ點で、賃労働は労働の他の歴史的形態から區別される。賃制度の基礎の上では、不拂の労働さえ支拂われた労働であるように見える。これに反し、奴隷にあつては、彼の労働の支拂はれた部分さえ不拂であるように見える。もちろん働くためには奴隷は生きて行かねばならぬ、そして彼れの労働日の一部分は彼自身の生活資料の価値を補填するために用いられる。けれども彼と彼の主人との間にはなんらの取引も結ばれず、兩者の間にはなんらの賣買も行われぬから、彼の労働は全部たゞで奪われるように見えるのである。

他方において、あの農奴——つい昨日まで歐羅巴の東方全部に存在していたと謂つてもよいあの農奴——を取つて見よう。この農奴は、彼自身の耕地または彼に割り當てられた耕地で、例えば三日間働き、さうして次の三日間は、領主の土地で強制的の且つ無償の労働を行わねばならぬ。だからこの場合には、労働のうち支拂われる部分と支拂われない部分との區別が眼に見えており、それは時間的にも空間的にも分れている、そしてわが自由主義者達は、たゞで人を働かすという怪しからぬ考に

たいする道徳的憤怒で胸一杯になつたのである。

けれども事實の上では、ひとが自分自身の土地の上で一週のうち三日働き、そうして残り三日間は自分の領主の土地の上でたゞで働くのも、工場または仕事場で自分自身のために一日のうち六時間働き、自分の雇主のためにまた六時間働くのも、全く同じことで、たゞ後の場合には、労働の支拂われた部分と支拂われない部分とが分つことのできないように相互に混り合つており、そうしてそこへ契約といふものがはいり込み、支拂いは週の終りに受取られるというような事によつて、全取引の性質が全く蔽い隠されているというだけだ。無償の労働が一の場合には自發的に提供され、他の場合には強制的であるように見える。たゞそれだけの差である。

以下私は『労働の價值』といふ語を用いるにしても、それはたゞ『労働力の價值』の代わりに世間の俗語として用うるだけだ。

十、利潤は商品とその價值において賣ることによつて得られる

一時間分の平均労働が六ペンスに等しい價值に實現され、または十二時間分の平均労働が六シリン

グ（一シリングは十二ペンス）に實現されるものと、假定しよう。更にまた、労働の價值は三シリングまたは六時間分の労働の生産物だと假定しよう。そうすると、もし一商品の生産に用いられた原料や、機械や、その他のものに、十二時間分の平均労働が實現されているものとすれば、その價值は十二シリングに上ぼるであろう。なおまた資本家によつて使用される労働が、これらの生産手段に十二時間分の労働をつけ加えるとすれば、この十二時間は、六シリングの追加價值に實現されるであろう。だから生産物の總價值は、實現された労働の三十六時間分に上ぼり、そうして十八シリングに等しいであろう。けれども労働の價值すなわち労働者に支拂われた賃金は、僅に三シリングにすぎず、労働者が働いて商品の價值に實現した剰餘労働の六時間分にたいしては、資本家はなんらの對價も支拂わないのである。だから資本家は、この商品を十八シリングでその價值通りに賣ることによつて、彼がそれにたいしてなんらの對價も支拂わなかつた三シリングの價值を實現するだろう。この三シリングが彼の懐に入れる剰餘價值または利潤をなすのだ。かようにして資本家は、彼の商品をその價值以上の價格ではなく、その現實の價值で賣ることにより、三シリングの利潤を實現するのである。

一商品の價格は、それに含まれている労働の總量によつて決まる。けれどもその労働量の一部は、その對價が賃金の形で支拂われた價值に實現され、その一部は、それに對しなんらの對價も支拂われ

なかつた價值に實現される。商品に含まれている労働の一部は支拂われた労働であり、他の一部は不拂の労働である。だから資本家は、商品とその價值において、すなわちそれに費された労働總量の結晶として、賣ることにより、必然的に利潤をえてそれを賣らざるをえないのである。彼は彼が對價を費したところのものを賣るばかりでなく、また彼が何物をも費さなかつたところのもの——尤もそれは彼の労働者に労働を費さしてはいるが——を賣る。資本家にとつての商品の消費と、その現實の消費とは、別々の物だ。だから私は繰り返す、正常の且つ平均の利潤は、商品とその眞實の價值以上にでなく、その現實の價值において賣ることによつて得られる、と。

十一、剩餘價值が分解する種々なる部分

剩餘價值、すなわち商品の總價值の中で労働者の剩餘労働または不拂労働が實現されている部分、私はそれを利潤と名づける。「ところが」この利潤はその全體が労働者を雇つている資本家によつて懐に收められるのではない。「先づ」

土地の獨占は、その土地が農業、建築、鐵道、その他いかなる生産上の目的に使用されていても、その地主をして、かの剩餘價值の一部分を地代の名の下に分け取ることを可能ならしめる。他方にお

いて、労働手段の所有が雇主たる資本家〔資本制的企業者〕をして剩餘價值を生産すること、あるいは同じことであるが、不拂労働の一定量を自分のために占有することを、可能ならしめるという事實そのものは、労働手段の全部または一部を雇主たる資本家に貸し附けるところの労働手段の所有者をして——一言にしていえば金貸し資本家をして、利子の名の下に、自分のためにかの剩餘價值の他の部分を請求することを可能ならしめる、かくして雇主たる資本家そのものに残るところのものは産業利潤または事業利潤と稱せられる部分だけである。

剩餘價值の總額が、この三つの範疇の人々の間に分割されるについて、如何なる法則がこれを支配しているかといふことは、われわれの主題に全く關係のない問題である。しかし次のことだけは、以上述べたところから出てくる。

地代、利子、および産業利潤は、商品の剩餘價值の、または商品に封じ込まれた不拂労働の、別々の部分に對する別々の名稱たるにすぎぬ、そうしてそれらは、一樣にこの源から派出し、またこの源のみから派出するものだ。これらのものは土地そのものから出るのも無ければ、資本そのものから出るものでも無い、けれども土地および資本は、それらの所有者をして、雇主たる資本家〔資本制的企業者〕が労働者から搾り取つた剩餘價值の中から、それぞれの割當をうることを可能ならしめる。勞

働者自身にとつては、この剰餘價值、すなわち彼れの剰餘労働の結果、または不拂の労働をば、全部雇主たる資本家が握り取つてしまおうと、または彼がその一部をば、地代および利子の名の下に、第三者に支出するを餘儀なくせしめられよう、それは大した問題ではない。雇主たる資本家が自身自身の資本のみを使用し且つ彼自身が地主であると假定するならば、全部の剰餘價值が彼のポケットに収まるのである。

雇主たる資本家が、剰餘價值のいかなる部分を結局自分自身に保有しようとしても、この剰餘價值を直接に労働者から搾り取る者は彼である。だから雇主たる資本家と賃労働者との間のこの関係の上に、労賃制度全體および現在の生産制度全體が懸つてゐる。それゆゑ、われわれの論争に参加した諸君のうちの若干の者が、言葉を飾つてこまかし、雇主たる資本家と労働者との間のこの関係を第二次的な問題として取扱おうと試みたのは、誤謬である。尤も、所與の條件の下においては、物價の騰貴は雇主たる資本家、地主、金貸資本家に對して、——そして御望みなら租稅徵集者をこれに加えてもよいが、——極めて等しからざる程度において影響を與えうると彼等が述べたのは、正しいけれども、すでに述べたところから、もう一つ別の結果が生じる。

商品の價值の中で、原料、機械等の價值、一言にして云えば使用された生産手段の價值のみを表わす部分は、決して所得を形成しないで、たゞ資本を補填するだけである。しかしこの點を度外視しても、所得を形成するところの、すなわち労賃、利潤、地代および利子の形態で費されるところの、商品價值の他の部分が、労賃の價值、地代の價值、利潤の價值等々によつて構成されている、というのは誤りである。われわれは、最初に、労賃を無視し、産業利潤と利子と地代とのみを取扱うであろう。いま述べたように、商品のうちに含まれてゐる剰餘價值すなわち不拂労働が實現されているその價值部分は、三つの異なる名稱を有する異なる諸部分に分解する。しかし商品の價值が、これら三つの構成部分の獨立な價值の和によつて構成される、あるいは形成される、というのは、全く眞理の正反對であるだろう。

もしも一時間の労働が六ペンスの價值に實現し、労働者の労働日が十二時間を含み、この時間の半分は不拂労働であるものとすれば、この剰餘労働は商品に三シリングの剰餘價值を、すなわちいかなる等價も支拂われなかつたところの價值を、附け加えるであろう。この三シリングの剰餘價值は、雇主たる資本家が地主および金貸しと——その比率は色々であるが——分け合うところの總基金をなす。これらの三シリングの價值は、彼等が彼等の間に分け合ねばならぬ價值の限界をなす。雇主たる資本家が商品の價值に彼の利潤のための任意の價值を附け加え、それに地主のための他の價值が附け加

えられ、等々して、これらの任意に加えられた確定的諸價値の和が總價値を構成するのではない。それゆえ、所與の一價値が三つの部分に分解されること、この價値を三つの獨立な價値の和によつて形成し、かくして地代、利潤および利子がそれから引き出されるところの總價値を任意な大きさに轉化すること、を混同する通俗的な見解が誤謬であることは、明かだろう。

もし資本家によつて實現される利潤の總額が百ポンドだとするならば、絶對的の大きさとして觀察されたこの額をば、われわれは利潤の量と呼ぶ。しかしもしわれわれが、この百ポンドが投下資本に對して有する比率を計算するならば、われわれはこの相對的の大きさを利潤率と呼ぶ。この利潤率は明かに二様の方法で言い表されている。

かりに百ポンドは勞賃に投下された資本だとしよう。もしも創り出される剩餘價値もまた百ポンドであり——このことは労働日の半分が不拂勞働から成り立つことを示す——そしてもしもわれわれがこの利潤をば勞賃に投下された資本の價値で測るならば、われわれは利潤率は百パーセントに上ほるといふだらう。なぜとていうに、投下された價値は百であり、實現された價値は二百であるから。

これと異り、もしわれわれが、單に勞賃に投下された資本のみでなく、投下された總資本、例えば五百ポンド——そのうち四百ポンドは原料、機械、その他のものの價値を代表するとする——につい

て考えるならば、われわれは利潤率は單に二十パーセントに上ほるといふだらう。なぜとていうに、百ポンドの利潤は投下された總體の資本の五分の一に過ぎないから。

利潤率のこの最初の言い表わし方が、支拂勞働と不拂勞働との間の現實の比率を、すなわち勞働の exploitation (搾取)——このフランス語を使うことを許して貰う——の現實の比率を、われわれに示して呉れる唯一のものである。いま一つの言い表わし方は、普通に使はれているもので、かつ確に一定の諸目的に適合したものである。兎も角それは、資本家が労働者から無償の勞働を搾り取る度合を隠すに、甚だ役に立つものである。^{*}

^{*}資本論では第一の利潤率を剩餘價値率と名づけ、第二の利潤率のみを利潤率と名づけている。

私はなおこれから若干云わねばならないことがあるが、その際、利潤という語は資本家の搾り取る剩餘價値の全量に當てはめて用い、その剩餘價値が種々の部門に分割されることには頓着しないことにする、そして利潤率という語を用いる場合には、私はいつでも、勞賃に投下された資本の價値によつて利潤を測るであらう。

十二、利潤、勞賃および價格の一般的關係

一商品の價值から、それに用いられた原料およびその他の生産手段の價值を補填する價值を引きさるならば、言い換えると、それに含まれている過去の労働を表わす價值を引きさるならば、その價值の残部は、最後に使用された労働者によつて加えられた労働量に歸着するであろう。もしその労働者が一日に十二時間働くならば、そうして十二時間分の平均労働は六シリングに等しい金の分量に結晶するものとすれば、六シリングというこの追加價值は、彼の労働の創り出した唯一の價值である。彼の労働時間によつて決定されるこの所與の價值は、彼と資本家とがそこからそれぞれ彼等の割前または配當を引き出すところの唯一の元本であり、勞賃と利潤とに分割されるところの唯一の價值である。明かに、この價值がこれら二つの當事者の間に分割される割合が可變であるからと言つて、そのために、この價值そのものが變化することはないのである。また一人の労働者の代りに全労働人口を、一労働日の代りに例えば千二百萬の労働日を置き換えたからと言つて、話は何の變りもないであろう。さて資本家と労働者とは、たゞこの限りある價值を、すなわち労働者の總労働によつて測られる價值を、分割しなければならぬのだから、一方が餘計取れば他方は少く取り、一方が少く取れば他方は餘計取ることになるであろう。分量が決まつておる場合にはいつでも、その一部分が減少するに反比例して他の部分は増大するであろう。それゆゑ勞賃が變動すれば、利潤はそれと反對の方向に變動

するであろう。もし勞賃が下落すれば、利潤は騰貴するし、勞賃が騰貴すれば、利潤は下落するだろう。前に掲げた假定の下で、労働者が彼の創り出した價值の半分に等しい三シリングを得るならば、言い換えると、彼れの全労働日が半分は支拂われた労働から、半分は不拂の労働から成り立つならば、資本家もまた三シリングを得る譯だから、利潤率は百パーセントになるであろう。もしまた労働者は僅に二シリングを得るだけであれば、すなわち全労働日の僅に三分の一を自分自身のために働くだけであるならば、資本家は四シリングを得、そうして利潤率は二百パーセントになるであろう。もし又労働者が四シリングを得、資本家は僅に二シリングを得るだけであるならば、利潤率は五〇パーセントに下落するであろう、しかしすべてこれらの變動は商品の價值には影響せぬであろう。だから、勞賃の一般的騰貴は、利潤の一般率の下落を生じるではあるが、商品の價值には影響しないであろう。しかし、諸商品の價值——それは窮極において諸商品の市場價格を規制せざるをえない——は、専らそれらに固定された労働の總量のみによつて決定され、その労働が支拂われた労働と不拂の労働とに分割される割合によつて左右されるもので無いけれども、その事は、例えば十二時間内に生産される一種類の商品または數種類の商品の價值が何時でも不變だ、ということを決して意味しない。一定の労働時間内に、言い換えると、一定分量の労働をもつて、生産される商品の數または量は、使用され

る労働の生産力に依存し、その労働のひろがりまたは長さに依存するのではない。紡績労働の生産力の或る程度をもつてすれば、例えば十二時間の労働日に十二ポンドの糸を生産し、生産力のより低い程度をもつてすれば、僅に二ポンドしか生産し得ないであろう。この場合に、もし十二時間の平均労働が六シリングの価値に實現されるものとすれば、第一の場合には十二ポンドの糸が六シリングに價し、第二の場合には二ポンドの糸が同じく六シリングに價するであろう。だから一ポンドの糸が、第一の場合には六ペンス（二シリングは十二ペンス）に價し、第二の場合には三シリングに價する。かかる価格の差異は、使用される労働の生産力の差異から生ずる。生産力が大なる場合には、一時間の労働が一ポンドの糸に實現され、生産力が小なる場合には、六時間の労働が一ポンドの糸に實現されるであろう。一方の場合には、労賃は比較的に高く利潤率は低けれども、一ポンドの糸の価格は僅に六ペンスであり、他方の場合には、労賃は低く利潤率は高いけれども、それは三シリングである。こういうことになるのは、糸一ポンドの価格はそれに費された労働の總量によつて規定され、その總量が支拂われた労働と不拂の労働とに分割される比率によつては規定されぬが爲めだ。労働の価格〔労賃〕は高くても安い商品を生産することができ、労働の価格〔労賃〕は低くても高い商品を生産することができるものだ、という私の前に述べた事實は、それゆゑにその自家撞着的の外観を失う。そ

れは、商品の価値はそれに費される労働の分量によつて規制され、そうしてそれに費される労働の分量は使用される労働の生産力に専ら依存し、従て労働の生産力の一切の變動に應じて變動する、という一般的法則の表現に過ぎない。

十三、労賃の値上げが企てられまたは労賃の引下げに

對して抗争される主要な場合

われわれはいま慎重に、労賃の値上げが企てられまたはその引下げに對して抗争される主要な場合を考察するであろう。

一、すでに述べたように、労働力の価値、または一層通俗的な言葉で云えば、労働の価値は、生活必需品の価値によつて、またはそれらのものを生産するに要する労働の分量によつて、決定される。しからば、もし所與の國において、労働者の日々の平均必需品の価値が、三シリングで言い表わされるところの六時間の労働を代表するものとすれば、労働者は、彼の毎日の生活資料の等價を生産するために、毎日六時間づつ働かねばならぬだろう。もし全労働日が十二時間だとすれば、資本家は彼に三シリングを拂うことによつて、彼の労働の価値を支拂うだろう。そして労働日の半分は不拂の労働

となり、利潤率は百パーセントに上るだろう。しかしいま、生産性が減退した結果、例えば同じ分量の農産物を生産するのに、より多くの労働を要することになり、かくて毎日の平均必需品の価格は三シリングから四シリングに騰貴したと假定しよう。この場合には、労働の価値は三分の一、すなわち三三 $\frac{1}{3}$ パーセントだけ高まるであろう。そうして労働者が以前の生活標準に相當するだけの、これらの毎日の生活資料に対する等價を生産するためには、労働日のうち八時間を必要とすることになるであろう。だから剩餘労働は六時間から四時間に減じ、利潤率は百パーセントから五十パーセントに落ちるだろう。しかし、この場合には、労働者が労賃の値上げを要求するのは、たゞ彼れの労働の増加した価値を得んと要求するだけであり、それは、あらゆる他の諸商品の賣手が、彼れの商品の費用が増加した時に、その増加した価値を支拂つて貰おうと企てるのと同じである。もし労賃が騰貴しないならば、または「騰貴したにしても」必需品の増加した価値を補償する程度に十分騰貴しないならば、労働の価格は労働の価値以下に落ち、そうして労働者の生活標準は退化するであろう。

しかし變化はまたこれと反對の方向にも起り得る。労働の生産力の増加したお蔭で、毎日の平均必需品の同じ分量は三シリングから二シリングに下落するかもしれない、すなわち、毎日の必需品の價値の等價を再生産するために、労働日のうち六時間でなくて、僅に四時間を要するだけとなるかもしれ

れない。この場合には、労働者は、以前三シリングで買い得たのと同じ分量の必需品を二シリングで買い得るだろう。なるほど労働の価値は下落したのだが、しかしその減少した価値は、以前と同じ分量の商品を支配しうるであろう。かくて利潤は三シリングから四シリングに上り、そうして利潤率は百パーセントから二百パーセントに上るであろう。労働者の絶對的の生活標準は依然として同じだが、彼の相對的勞賃、従つてまた、資本家の社會的地位と比較しての彼れの相對的社會的地位は低下するであろう。もし労働者がこの相對的勞賃の下落に抗爭するとしても、彼れはたゞ、彼れ自身の労働の生産力の増加に對して若干の分前を得、社會的等級における彼れの以前の相對的地位を維持しようとして企てているにすぎないのである。かような譯で、イギリスの工場主は、穀物條例（外國から輸入する穀物に關稅を課した法律）の廢止後、——穀物條例廢止の運動の際に與えた最も嚴肅な誓約を非道にも破つてしまつて——一般に十パーセントだけ勞賃を引下げてしまつた。労働者の抗爭は最初には破れた。しかし、いま委しく述べることはできぬが、種々なる事情のために、失われたこの十パーセントはその後再び恢復された。

*一八四六—四七年は非常なる事業停滯の年であつた。

二、必需品の價値、従つて労働の價値は、依然同じでありながら、貨幣の價値に先づ變化が起つた

ために、必需品の貨幣價格の上に變化が起るといふことがありうる。

以前よりも豊富な鑛山の發見およびその他の事情のために、例えば二オンスの金が、以前一オンスの金の生産に必要であつたと同じ労働で生産できるようになるかもしれない。そうすれば、金の價值は二分の一、すなわち五十パーセントだけ減少するだろう。その場合には、すべての他の諸商品の價值はそれらのものの以前の貨幣價格の二倍で言い表される。そして、労働の價值もまた同様である。以前は六シリングで表されていた十二時間の労働が、いまは十二シリングで表されるだろう。しかるにもし労働者の労働が六シリングに騰貴しないで、三シリングのままであるならば、彼れの労働の貨幣價格は彼の労働の價值の半ばに過ぎないことになり、彼れの生活標準は恐ろしく退化するであろう。このことは彼れの勞賃は騰貴するが、金の價值の下落に比例して騰貴しない場合に、やはり多少の程度において起る。かかる場合には、労働の生産力にも、需要および供給にも、價值にも、何等の變化は起らないであろう。これらの價值の貨幣名以外には、なんらの變化も起らないであろう。かかる場合に労働者は勞賃の比例的引上げを主張すべきではないといふのは、彼れは實物でなしに、名目で支拂われることに満足しなければならぬといふことである。すべて過去の歴史の證明するところによれば、かくの如き貨幣の減價が起る場合には、資本家は何時でも、労働者をだますに好都合なこの機

會をとらえるために油断なく眼をくばつてゐる〔労働者もまた油断してはならぬわけである〕。大多數の經濟學者たちの證言するところによると、金鑛地方の新たな發見、銀鑛の採掘の改善、および水銀の供給の低下等の結果として、いまや貴金屬の價值は再び下落して來てゐる。勞賃を高めようとする企てが大陸において一般的にかつ同時に起つて居るのは、このことから説明されうる。

三、いままでわれわれは、労働日〔一日の労働時間〕は所定の限度をもつものと假定してきたけれども、労働日は、それ自身では決して不變の限界をもつものではない。それを生理的に可能な極度の長さまで延ばそうといふのが、資本の不斷の傾向だ、それは同じ程度において剩餘労働が、従つてそれから生ずる利潤が、増加するからだ。資本が労働日を長くするのに成功すればする程、それが占取る他人の労働の分量はより大となるであろう。第十七世紀中には、そして第十八世紀の初めの三分の二期においてすら、十時間労働日が、イギリス中での標準労働日であつた。反ジャコバン戦争——それは實際には、英國の労働者大衆に對して英國の貴族が仕掛けた戦争であつた——の間、資本はバツカスの酒神を祝うた、^{*} として労働日を十時間から、十四時間、十八時間に延ばした。マルサスは少しも涙脆い感情主義の人ではなかつたが、彼は一八一五年頃に公にした一小冊子の中で、もしこの種の事態が繼續されるなら、國民の生命はその源泉そのものを腐蝕されるであろう、と宣言してゐる。

新たに發明された機械が一般に應用されるにいたる數年前、一七六五年代に、『貿易に關する一論』という標題の下に、イギリスで、一小冊子が公にされた。その匿名の著者——彼は公然と勞働階級の敵たることを名乗つていたが——は、勞働日の限界を擴張する必要を切言した。彼はこの目的のためになにかんすく、勞役場を設けることを提案しているが、彼のいうところによると、それは『恐怖の屋舎』たるべきものである。しからば彼がこれらの『恐怖の屋舎』のために指定した勞働日の長さは何れだか？ それは十二時間だ、——一八三二年に資本家や經濟學者や諸大臣やが、單に現行の勞働時間であるだけでなく、十二歳未滿の小供にとつて必要な勞働時間でもあると認めたところのもの、それは正に同一時間だ。

*人口論の著者として随分冷酷な議論を立てた人だからかういつてある。

勞働者は彼れの勞働力を賣ることによつて、——彼は現在の制度の下では、そうしなければならぬのだ——その勞働力の消費を資本家に譲り渡すのだが、しかし一定の合理的限度内における消費を譲り渡すのだ。彼が彼の勞働力を賣るのは、その自然的な消耗は別として、それを維持せんがためそれを破壊するためでは無い。彼れの勞働力をその一日分または一週間分の價値で賣るに際しては、一日または一週の内はその勞働力が二日分または二週間分の破損または消耗をうけないことが了解さ

れている。假に千ポンドに値する機械を取つて見よ。もしそれが十年間に使用し盡されるならば、それはその生産を助けたところの商品の價値に對して、年々百ポンドを附加するであろう。もしまたそれが五年間に使用し盡されるならば、それは年々二百ポンドを附加するであろう。すなわち、その年の消耗の價値は、それが消費される速度に反比例するのである。ところが勞働者は正にこの點において機械と異つてゐる。機械はそれが使用されると正確に同じ比率において消耗する譯ではない。人はこれに反し、勞働給付の單なる數字的合計から見られるよりも、より大なる比率において衰頽する。勞働者は、その勞働日をば以前の合理的範圍に短縮しようとする企においては、また、彼等が標準勞働日の法的確定を強制することの出來ぬところでは、勞賃の引上げ——單に搾り取られる剩餘時間に比例するだけでなく、それよりもより大なる比率における引上げ——によつて過重の勞働を阻止しようとする企においては、彼等自身と彼等の種屬とに對する義務を履行するに過ぎない。彼等は纔にそれによつて資本家の暴戾な横領に制限を置く。時間あつてこそ人間は發達することができる。勝手に處理することのできる自由の時間をもたぬ人間、睡眠、食事、その他の單に生理的〔に必要〕な中斷を除外すれば、その者の全生涯が資本家のための勞働によつて吸收されている人間、それは役畜〔牛馬〕にも劣る。彼れは他人のための富を生産する單なる機械で、からだは壞たれ、心は獸化される。しかも

近代産業の全史が示すところによれば、資本は、もし妨げられなければ、全労働階級をば、この極度の退化状態に陥れるために無茶苦茶な無慈悲な行動をするのである。

資本家は労働日を延ばす場合には、より高い労賃を支拂いながら、しかも労働の価値を低め得るであろう。労賃の騰貴が搾り取られる労働量の増大に應ぜず、かくして労働力のより速な衰頽が惹き起される場合が、すなわちそれである。このことは他の仕方でも行われる。諸君の中産階級の統計家は例えば、ランカシャーにおける職工家族の平均労賃は騰貴したと諸君に告げるであろう。「しかも實際においては」戸主たる男子の労働の代りに、今日では彼の妻および恐らく三、四名の子供たちまでが、資本のジャガーノートの車輪の下に投ぜられており、かくて労賃総額の騰貴は、一家族から搾取される剰餘労働の総額に、決して相應していかないのだが、彼等はこの事實を忘れて仕舞つていたのである。

*印度の神話におけるクリシュナの偶像、——毎年この像を巨大な車上に乗せ行列をなして索き廻り、信徒たちは、これに轢き殺されれば、極樂へ行けると信じ、自からその車の下へ身を投じたという。

労働日に一定の制限が設けられている場合においてさえ、——工場法の適用されている總ての種類の産業には今日ではかくの如き制限が存在している——労働の価値の從來の標準を維持して行くためだけにでも、労賃の引上げが必要となる場合があり得る。労働の強度の増加のために、ひとは一時間

内に、彼が以前二時間内に消費したと同じだけの生命力を消費されるかも知れない。工場法の適用されてる事業においても、機械の運轉速度の増進や、一人の人間がその監視を受持たねばならぬ作業機械の数の増加やによつて、この事はすでに或る程度まで實現されている。もし労働の強度の増加、言い換えると、一時間内に費される労働量の増加が、労働日の長さの短縮と適當な比例を保つならば、労働者はなお得るところがあるだろう。「けれども」もしこの限度を超えるならば、労働者は一つの形において得たものを他の形で失う、そうしなければ、十時間の労働は以前の十二時間の労働と同じ程度に破滅的となるであろう。労働者が、その労働の強度の増大に相應するだけの労賃の引上げのために闘争することにより、資本のこの傾向を妨げるのは、たゞ彼れの労働の減價ならびに彼れの種屬の退化に對して抗争するに過ぎないのである。

四、諸君のすべては、私がいま説明をする必要のない色々の原因から、資本制的生産は一定の周期的循環を通じて動くことを知つておられる。それは靜穩、遞増する活氣、好景氣、事業過剩、恐慌、および沈滞の状態を通じて動く。諸商品の市場價格および利潤の市場率は、これらの段階に伴うて、いまそれらの平均の下に沈んだかと思えば、またその上にのぼる。この周期全體について觀察したならば、諸君は、市場價格の一の背離は他の背離によつて埋め合されるといふこと、およびその周期を平

均すれば、諸商品の市場価格はその価値によつて規制されるということ、発見されるであろう。ところで、市場価格下落の段階および恐慌ならびに沈滞の段階においては、労働者は、もし全く業を失わなければ、その労賃を引下げられるのは確かなことだ。「しかし」だまされて済ますつもりでなければ、かくの如き市場価格引下の際にも、労働者は資本家に對し、如何なる比例的程度において労賃の引下げが必要となつたかを争わねばならない。もし超過利潤の得られる好景氣時代において、労働者が労賃の引上げのために戦つていなかつたならば、産業の一周期を平均して見て、彼等は彼れの平均労賃、すなわち彼の労働の價值、さえも受取らぬことになるであろう。周期中の不景氣の諸階段には彼れの労賃は必然的に引下げられるのに、周期中の好景氣の諸階段に補償を求めることを差し控えねばならぬと要求するが如きは、愚の骨頂である。一般的に、總ての商品の價值は、需要と供給との絶えざる變動から生ずるところの、不斷の變化しつある市場価格の相殺によつてのみ、實現される。現在の制度の基礎の上では、労働も他の商品と同様な一商品に過ぎない。だから労働もまた、同一の變動を通過しながら、その價值に相應する平均価格で賣られねばならぬ。一方において労働を一個の商品として扱ひながら、他方においてこれを商品の價值を規制する諸法則から除外しようとするのは、不合理である。奴隷は生活資料の永續した固定した量をえているが、賃労働者はそうでない。彼は、他方の

場合における労賃の下落を補償するためだけにでも、一方の場合において労賃の引上げを獲得すべく試みなければならぬ。もし彼が資本家の意志、指圖をば、永久の經濟法則として受入れることに甘んずるならば、彼は奴隷の安固を享受することなしに、奴隷と一切の不幸を分つにいたるであらう。

五、私が以上考察したすべての場合において、———そうしてそれらは「實際に於て」百中の九十九を占めているが、———諸君は、労賃引上げの闘争は單にこれに先立つ諸變化の跡を追うて生ずるといふこと、それは生産の分量や、労働の生産力や、労働の價值や、貨幣の價值や、搾取される労働の長さまたは強度や、需要供給の動搖に依存しかつ産業上の周期の種々の段階に一致するところの市場價格の動搖やに關する、先行諸變化の必然的產物であるといふこと、一言にして云えば、それは資本の先行行動に對する労働の反動であるといふことを發見せられるであろう。労賃引上げの闘争をばすべてこれらの事情から獨立させて取扱ひ、労賃の上になる變化のみを見て、それが由つて生じた他の諸變化を看過するならば、諸君は過つた結論に到達せんがために過つた前提から出發しているのである。

十四、資本と労働との闘争およびその諸結果

一、私はすでに、労賃の引下げに對する労働者側の周期的な抗争、および労賃を引上げようとする

彼等の周期的な企ては、勞賃制度から離すことの出来ぬものであり、それは勞働が諸商品と同一なものとなつており、従つて勞働は價格の一般的變動を規制する諸法則に従うという事實そのものから生ずるものだ、ということも明かにし、さらにまた、勞賃の一般的騰貴は利潤の一般率の下落を齎すもので、諸商品の平均價格または價值に影響するものではない、ということも明かにした。そこでいまや最後に起る問題は、資本と勞働との間におけるこの絶ゆることなき鬭争において、勞働は果してどの程度まで成功するだろうか、ということである。

私は一般的にこれに答え、總て他の商品についてと同じ様に、勞働について次の如く言い得る。曰く其の市場價格は、長い間には、その價值に適應する、だから「その市場價格が」どんなに高くなつても低くなつても、また勞働者がどんなことをしようとも、彼は平均においてはたゞ彼れの勞働の價值を受け取るだけである。そして彼れの勞働の價值は、彼れの勞働力の價值に歸着し、彼れの勞働力の價值はその維持および再生産に必要な必需品の價值によつて規定され、また必需品のこの價值は結局これらのものを生産するに要する勞働の分量によつて規制されるのである。

しかし勞働力の價值または勞働の價值には若干の特徴があつて、それをすべての他の諸商品の價值から區別する。勞働力の價值は二つの要素——一は單に生理的のもの、他は歴史的または社會的のもの

——によつて形成される。その窮極の限界は生理的要素によつて決定される、言い換へると、勞働者階級はそれ自身を維持しかつ再生産し、その生産的存在を永續してゆくためには、生存および繁殖に絶對的に缺くべからざる必需品を受取らねばならぬ。だから、これらの缺くべからざる必需品の價值は、勞働の價值の窮極の限界をなす。他方において、勞働日の長さもまた、窮極の、しかし極めて屈伸性に富んだ・限界によつて制限される。「即ち」その窮極の限界は、勞働する人の生理的な力によつて定まる。もし彼れの生命力の日々の消耗が一定程度を超えるならば、それは毎日繰り返しては發揮されえなくなる。しかし、すでに述べたように、この限界は極めて屈伸性に富んでいる。不健康なかつ短命な世代を急速に續けて行けば、元氣なかつ長命な世代の系列と同じように、勞働市場に充分な供給をしつづけて行くことは出来るであろう。

この單なる生理的要素の外に、勞働の價值はいかなる國においても傳統的な生活標準によつて決定される。それは單なる生理的の生活（生きて行くというだけのこと）ではなくて、人々がその下に置かれ且つその下で育てられるところの、社會的諸條件から生ずる一定の慾望の満足である。「もつともこれは生存上絶對的に必要だというわけではないから」イングランドの生活標準はアイルランドの標準に引下げられ、ドイツの農民の生活標準はリヴォーニアの農民のそれに引下げられうる。この歴史的傳統と社

會的慣習とがこの點について重大な役割を演じているということは、ソントン氏の『過剰人口』に關する著書から、諸君の學びうる所だ。氏はこの著書において、イングラントの種々なる農業地方における平均勞賃は、それらの地方が農奴の状態からでてきた當時の事情が好かつたと否とに應じて、今日でもなお多かれ少なかれ異つてゐることを示している。

勞働の價值の中に這入り込む所の、この歴史的または社會的の要素は、擴げることできれば、縮めることもでき、あるいは生理的限界の外には何物も残らぬように、全く無くしてしまふこともできる。濟度し難き租税食いであり空扶持取りであつた老チョーチ・ローズがいつも云つていたところによると、フランスの異教徒の侵入からわが聖教の慰樂を救うために企てられた反ジャコバン戰爭中に、われわれが前の章であんなに優しく取扱つた正直なイギリスの農業經營者は、農業勞働者の勞賃を壓迫して上述の單なる生理的最低限以下にさえ引き下げ、勞働階級の生理的存続に必要な殘部を救貧法によつて補充した。これは、賃勞働者を奴隸に轉化し、シエクスピアの得意な自營農民を被救恤者ならしめる光榮ある方法であつた。

諸君は違つた國々における標準勞賃または勞働の價值を比較することにより、また同じ國の違つた歴史時代におけるそれを比較することにより、勞働の價值そのものは——たとえすべての他の諸商品

の價值は不變のままであると假定しても——固定的な大きさをなく、可變的の大きさを、ということ
を發見されるであろう。

同様の比較は、單に利潤の市場率が變動するばかりでなく、その平均率も變動する、ということ
を説明するであろう。

しかし利潤については、その最低限を決定する法則は存在しない。その低下の窮極の限界は何だか
いうことを、われわれは言えないのである。それなら何故われわれはその限界を確定しえないのか
？ それは、われわれは勞賃の最低限を定めうるけれども、その最高限を定めえないからである。わ
れわれのたゞ言ひうることは、もし勞働日の限界が決まつてゐるならば、利潤の最高限は勞賃の生理
的最低限に適應するということ、および勞賃が決まつてゐるならば、利潤の最高限は、勞働者の生理
的諸力と兩立しうるかぎりの、勞働日の延長に適應するということである。だから利潤の最高限は
勞賃の生理的最低限と、勞働日の生理的最低限とによつて制限される。この利潤率の最高限の二つの
限界間において、變動の廣大な等差が可能だということは、明かである。その現實の程度がどこに確
定されるかは、たゞ資本と勞働との間における絶えざる鬭争——資本家は勞賃をばその生理的最低限
に引下げ、そして勞働日をばその生理的最低限に延ばそうと絶えず努めているのに、他方勞働者は

これと反対の方向に絶えず壓力を加えている——によつてのみ決定される。

事態は鬭争者たちのそれぞれの力の問題に歸着する。

二、イギリスにおける労働日の制限に關しては、すべての他の諸國におけると同じように、それは立法的干渉によらなければ決して決定されなかつた。この干渉も、外部からする労働者の絶えざる壓迫がなかつたならば、到底起らなかつたであらう。けれども兎に角、その結果は、労働者と資本家との間の私的協約では得られなかつたものである。一般的政治行爲がかくの如く必要であるということとそれ自身が、單なる經濟的活動においては資本がより強い側だということの證據を提供する。

労働の價値の限界内においては、その現實の決定は、いつでも需要と供給とに依存する。茲に需要というのは資本の側における労働の需要を意味し、供給というのは労働者による労働の供給を意味する。殖民地諸國においては、需要供給の法則は労働者に有利に作用する。だからアメリカでは比較的に賃金の標準が高い。資本は其處でも出来るかぎりの事をしてゐるだろう。「けれども」賃労働者が絶えず獨立自營の農民に轉化することによつて、労働市場が絶えず不足勝ちにされるのを、妨げることができない。賃労働者という地位は、アメリカ人の大多數にとつて、單に見習時代に過ぎぬので、彼等は早かれ晩かれ屹度その地位を去るのである。この殖民地的狀態を修正するために、母國イギリス

の政府は、暫らくの間いわゆる近代植民理論を受け入れた、この理論は賃労働者が獨立な農民に餘りに早く轉化するのを阻止するために、人工的に植民地の物價を引上げることから成り立つてゐるのである。

しかしわれわれは次に、資本が生産の全過程の上に威張り散らしている舊文明諸國に移ろう。例えば、一八四九年から一八五九年に至る間のイギリスにおける農業賃の騰貴を取つて見よう。その結果は何であつたか。農業經營者は——われわれの同志ウェストンならば彼等はそう助言するだろうと思ふが、——小麥の價値を高めることも、その市場價格を高めることさえ、出来なかつた。かえつて逆に、彼等はその下落を認めざるをえなかつた。けれどもこれら十一年の間に、彼等はあらゆる種類の機械を導入し、より科學的の諸方法を採用し、耕地の一部を牧地に轉換し、農地の大きさを、従て生産の規模を増大し、これらおよびその他の方法により労働の生産力を増すことによつて労働に對する需要を減少せしめ、再び農業人口を比較的過剩ならしめた。これは、賃金の騰貴に對する——あるいは早きあるいは晚き——資本の反作用が、舊く定住された諸國において取るところの一般的方法である。すでに、リカードが正しく述べたように、機械は労働と絶えざる競争の地位にあるもので、労働の價格が一定の高さに達したとき始めて採用されることが屢々ある、しかし機械の應用は、労働の生産力

を増加するための多くの方法のうちの一つに過ぎない。普通の労働を相対的に過剰ならしめるこの同じ發達は、正に他方においては、熟練労働を簡單化し、かくしてその價值を減少せしめつつあるのである。

同じ法則は他の形においても行われる。労働の生産力が發達するにつれて、資本の蓄積は、勞賃率が比較的高いにも拘らず、加速度をもつて行われるであろう。だから、かつてアダム・スミス——彼の時代には近代の産業はまだ幼年時代にあつた——が推論したように、この資本の加速度的蓄積は労働者の労働に對する需要の増加を保證することによつて、差引き労働者側に利益を齎らす、と推論されぬでもない。この同じ見地からして、現代の多くの著者たちは、過去二十年間イギリスの資本はイギリスの人口よりも遙に多く増加したにも係らず、勞賃がそれほど騰貴してないのを、不思議がつてゐる。けれども資本の蓄積が進行すると同時に、資本の構成に累進的の變化が起つたのだ。全體の資本の中、固定資本、「不變資本」、すなわち機械や原料やその他あらゆる形態に於ける生産手段から成り立つてゐる部分は、資本の他の部分、すなわち労働の購買のため勞賃として支出される部分に比較して、累進的に増大してゐる。この法則はバートン氏、リカアド、シスモンデイ、リチアド・ヂョンズ教授、ラムゼイ教授、シエルブリエー、およびその他の人々によつて、すでに正確な形で——そ

の正確さには多少の差があるが——記述されてゐる。

資本のこれらの二つの要素の比率がもと一對一であつたとすれば、産業の進歩に伴い、それは五對一、乃至その他のものとなるであろう。もし總體の資本六〇〇の中、三〇〇が労働手段や原料やその他のものに放下され、三〇〇が勞賃に支出されているのなら、三〇〇人の労働者の代りに六〇〇人に對する需要を作り出す爲には、總體の資本が倍加されるだけでよい。けれども六〇〇の資本の中で、五〇〇が機械、原料、およびその他のものに放下され、勞賃には僅に一〇〇しか支出されていないのなら、三〇〇の労働者の代りに六〇〇人に對する需要を作り出すためには、同じ資本が六〇〇から三六〇〇に増加しなければならぬ。だから、産業の進歩において、労働に對する需要は、資本の蓄積と並行するものではない。それは依然として増加しはするが、しかし資本の増加に比すれば、絶えず遞減する比率において増加するにすぎない。

これら僅かの示唆は、近代産業の發達そのものが、労働者に對して資本家の方が都合が好くなるように次第次第に形勢を決定せざるをえないということ、並びにその結果として、資本制的生産の一般傾向は、勞賃の平均標準を高めるのではなくてかえつてこれを低め、労働の價值をば多かれ少なかれその最低限度に押し縮めるものだということを、示すに十分であろう。この制度内における事態の傾

向がこうである以上、労働者階級は資本の蠶食に對する彼等の抗争を断念するわけに行かぬではないか、彼等の「境遇の」一時的改善のためにときどき起る機会を最善に利用しようという企を放棄するわけに行かぬではないか？ 彼等がもしそんなことをすれば、彼等は見放されて仕舞つた敗慘者の様な水準の群に墮落してしまふであらう。私はすでに、労賃の標準のために彼等が闘争するのは、全労賃制度から離すことのできぬ附隨事件だということ、労賃を引上げんとする彼等の努力は、百のうち九十九までは、労働の與えられた價值を維持せんがための努力に過ぎないということ、および彼等が労働の價格について資本家と争う必要は、彼等自身を商品として賣らなければならぬという彼等の状態に固有のものだということ、等を明かにしたと考える。彼等「労働者」がもし資本との彼等の日々の衝突において臆病に退却するならば、彼等は明かに、なんらかのより大なる運動を起すための彼等自身の能力を失うであらう。

「しかし」これと同時に、そうして労賃制度に含まれている一般的隷屬からは全く離れて、労働者階級は此等の日々の闘争の窮極の効果をば、自分で誇大視しないようにしなければならぬ。彼等の忘れてならぬことは、彼等はたゞ諸々の結果と戦つていただけで、これらの結果の諸原因と戦つていてのではないということだ、彼等は下向運動を阻止しつゝあるだけで、運動の方向を變じつゝあるのでは

無いということだ。彼等は姑息療法をしていただけで、病氣を根治しつゝあるのでは無いということだ。だから彼等は、資本の飽くことなき蠶食または市場の變動から絶間なく發生するところの、これらの避くべからざるゲリラ戦「ゲリラ」は、もと西班牙の北部で用いられた戦法で、本隊よりの指揮によらず、個々の獨立隊が不規則に小競合をなすこと」に全く没頭してしまわないうに、しなければならぬ。彼等は、現在の制度は、それが彼等の上に課するところの一切の貧窮と共に、同時にまた、社會の經濟的改造に必要な物質的諸條件ならびに社會的諸形態をば生じつつあるということ、理解しなければならぬ。彼等は、『正當な一日分の労働にたいして正當な一日分の労賃』という保守的なスローガンの代りに、彼等の旗印の上に革命的なスローガン『労賃制度の全廢！』と書き誌るすべきである。

當面の問題をば公平に取扱うために私の已むなく深入した所の、この甚だ長い、そうして恐らくは退屈な解説の後に、私は、次の斷案を提供して話を結ぼうと思う。

第一 労賃率の一般的騰貴は、利潤の一般率の下落を齎すであらう、しかしながら、大體において、商品の價格には影響せぬであらう。

第二 資本家的生産の一般傾向は、労賃の平均標準を高めるにあるのではなくて、却て低めるにある。

第三 労働組合は資本の蠶食に對する抗争の中心としては立派な働きをする。それはその力を適當

に使用しなければ部分的に失敗する。もしもそれが、たゞ現存制度の諸結果に對するゲリラ戦にのみ自らを局限し、それと同時に現存制度を變改しようとする試みせず、その組織された力を労働階級の窮極的な解放、すなわち勞賃制度の窮極の廢止のための一槓杆として使用しないならば、それは一般に失敗するであろう。

附

録

一 インターナショナル労働者同盟の決議

カール・マルクスによつて起草され、一八六六年のゲンフにおける
第一回大會で通過したもの

A その過去

資本は集中された社會力であるが、労働者はたゞ彼の労働力を自由に處分しうるにすぎない。だから資本と労働との間の契約は、決して公正な諸條件に基いて締結されることはできぬ、——ここに公正というのは、決して、物質的生産手段および労働手段の所有権を一方の側におき、生きた労働力を他方の側におく一社會でいうような、意味においてではない。労働者たちの唯一の社會的な力は彼等の數である。しかし數の力は不統一によつて破れる。労働者たちの分裂は、彼等相互の間の不可避な競争によつて生み出され、且つ永續化される。

労働組合は、最初、労働者たちを少くとも單なる奴隷状態以上に高めるような契約條件を獲得する

ために、この競争を除去しようとする、あるいは少くとも緩和しようとする、労働者たちの自然發生的な企てから生じた。それだから労働組合の直接の目的は、日常の諸要求に、資本の絶えざる侵掠に對する防衛の手段に、一言でいえば勞賃と労働時間との問題に、限られた。労働組合のこの活動は、單に正當であるだけでなく、また必要でもある。現在の生産様式が存続するかぎり、それを放棄することはできぬ。それどころか、すべての國々に労働組合を設立しそれを統一することによつて、この活動を一般化せねばならぬ。他方において、労働組合は、中世の都市行政および自治體がブルジョアジエの組織の中心となつたように、みづから意識することなしに労働者階級の組織の中心となつた。労働組合は、資本と労働との間のゲリラ戦のために無くてはならぬものであるが、勞賃制度および資本支配一般の廢止のための組織された力として、さらに一層重要である。

B その現在

労働組合は、從來、資本に對する局地的および直接的な闘争のみを専ら眼中においたために、勞賃制度および今日の生産様式そのものに對するその攻撃力をまだ十分に理解していない。だからそれは一般的な社會的政治的運動から餘りに遠ざかりすぎている。しかし最近労働組合は、その偉大な歴史

的任務にいくらか醒めたように思われる。このことは、例えばイギリスにおいて最近の政治運動に労働組合が参加したことから、合衆國において労働組合の機能が高まつたことから、また、シエナイールドにおける最近の労働組合代表者大會の採用した次のような決議から、觀取されうるのである。曰く、『本會議は、萬國の労働者をつつの共同的な友好同盟に統一しようとするインターナショナル同盟の諸努力を完全に是認する、そしてそれゆゑに、本會議に代表者を送つてゐる種々なる組合に對して、この同盟が全労働者階級の進歩および幸福のために重要であることを信じて、この同盟に加盟することを、切に勧告する、』と。

C その將來

労働組合は、その最初の諸目的を度外視すれば、いまや、労働者階級の中心組織としてその完全なる解放という大利益のために、意識的に行動することを學ばねばならぬ。それは、この目的を達成しようとして努力しているあらゆる社會的および政治的運動を支持しなければならぬ。労働組合は、みづからを全労働者階級の前衛および代表者と見做し、またかゝるものとして行動することにより、非組合員の組合への加入を實現することに、成功するに違いない。それは、殊に不利益な事情のためにその

抵抗力を奪われたところの、最も待遇の悪い労働者層たとえば農業労働者の利害を注意深く取上げねばならぬ。それは、その諸努力が、狭量な利己的なものでは決してなくて、踏みじられた大衆の解放を目的とするものであるということを、全世界に納得させねばならぬ。

二 マルクスの手稿『労賃』*

*マルクスの手稿『労賃』の第六および第七節は、一八四七年十二月に書かれた。全集版、第一部、第六巻四〇〇—四七一頁を見よ。角形括弧のうちに納められた二、三の言葉は、補足および外国語による表現の翻譯である。——編輯者。

第六節 諸救済案

一、最も好んで主張される案の一つは、貯蓄銀行の制度である。われわれは、労働者自身の大部分は貯蓄する可能性をもたないということについては、まったく語るつもりはない。

貯蓄銀行制度の目的は、少くとも貯蓄銀行の厳密に経済的な意義は、次のことでなければならぬ。すなわち、労働者たちが、彼等自身の豫見と聰明とによつて、有利な労働時間と不利な労働時間とを